

古戰場 織田真紀に永祿四年五月公進軍放火處處透築壘於洲股極使堅固駐軍於此
 二十三日井口齋藤義龍出師於十四條邑故吾軍亦出輕卒相戰瑞雲儲弟死之我軍少却井口
 軍乘勝進來抵北輕見邑西向成陣公馳馬廻視移軍於西輕見東向成陣於古祠前己入夜井
 口軍真木村牛介進戰公麾軍擊走之稻葉又右衛門乘夜來戰池田信輝佐佐成政共進擊斬之故進
 退相雜勝負不一及深更彼軍稍稍引去公指麾到曙二十四日公帥師還千洲股と見え安
 土創業録に永祿五年五月信長西美濃所々に放火せんとして打立多藝山の麓より北を登りに焼拂ひ
 墨俣に要害を構へらる十九條創業録九條とす今信長記等によりて十九條に改むの砦には織田信清が弟織田勘解由左衛門を入
 置る折節雨降續川水夥く出て通路なかりけれの齋藤右兵衛大夫龍興の所々の洪水にて墨俣よ
 り信長援兵叶ふまじ勘解由左衛門が砦を攻落さむとて押寄す先陣牧村牛助二陣の稻葉又右衛門
 也又十九條より水練を以墨俣へ急を告ぐ信長聞之打立給ふ先陣の池田勝三郎信輝二陣の佐久
 間右衛門尉信盛其次の柴田權六勝家也此勢墨俣に着ければ此間の洪水にて川を可渡とは見
 えさりけりされども信長勘解由左衛門を討せ衍ては叶ふまじと川を乗越し給への勘解由左衛門
 出迎悦び一番合戦を強て望ければ池田を二番に被定牧村牛助の賀留美表深田を前に當て待居
 たり勘解由左衛門水田を越へ岳野に上り牧村と相戦ひけるに牧村打退引退ければ稻葉又右衛門
 入替り勘解由左衛門と相戦けるに味方打負敗北しければ勘解由左衛門一足も引野々村三十

郎に討れにけり池田勝三郎入替り稻葉又右衛門と戦ひ池田勝三郎佐々内藏助二人して稻葉又右
 衛門を突倒し互に讓て首を不取柴田權六勝家はを見て味方の勢ひとなりむとて又右衛門か
 首を取て信長へ捧げ二人の者の振舞を申ければ彼等の如し此の事への目を不可懸されども大
 功をの不知けりと宜ひ權六を感せらる角て夜に入兩陣相引に引退けりとしるせり扱此又
 右衛門が首實檢の時たがひに功をゆづりて池田は佐佐が討しといひ佐佐の池田が討たりといひ
 つのる信長公聞給ひて軍の習ひはまからず人の取たる首をも奪ひて我高名にせんとする物也さ
 てこそ武を勵む意もあらはれてたもしろけれと不興氣にのたまひければ其場にありける島藏
 主辨千よきゆを金といふ僧公の御機嫌のあしきを見て此首の池田か取りたるにてもなく又佐佐か
 首藏主といふとりたるにてもなく侍らのむと申上けれの公猶不審し給ひさらの誰がとりしぞと咎め給ふ藏主
 打わらひて稻葉が首の瓜の定の如く自然と落し成るべしと申しか御前に伺候の人くごつと
 笑ひ公も御機嫌直りよし武邊咄聞書に見えたり

- 宗慶村 輕海の東南にあり 同領 五百七石二斗二升
 小柿村 宗慶の南にあり 同領 八百六十八石八斗五升 中小柿村 下小柿
 村 小柿のうち也 古城跡 村内にあり城主の 小柿助六郎と名細記にいへり土
 岐系圖に土岐彈正少弼頼遠の五男小柿六郎頼長本巢郡系圖に方縣郡とす小柿住とあるは同じ

人なるべし永享以來御番帳に土岐小柿式郡少輔とあるしたるも其一族にて此わたりより出し
人なるべしまた伊賀氏系圖に伊賀伊賀守藤原定就伊賀太郎左衛門光就の子にて大野郡に住すの二男 伊賀丹後守
光重はじめの名三郎伊賀守定重の弟也 本巢郡小柿住すその子 安藤伊織安光小柿住と見えたるこの
城にありしなるべし

高屋村 伊都貫川を隔て小柿の東にあり 同領 千百九石九斗

馬場村 郡村記に高屋村の枝郷にて生津庄とあるせり 御料 安藤家の領とも 六

百三十二石五斗三升九合

北方村 高屋の北にあり 御旗本戸田領 圓鏡寺領とも 千三百十三石八斗六

升四合 春來町 駒木町 新町 中町 本町 石町 舟町 戸羽町 俵町

升屋町 天王町 森町 などいふ町屋ありて其地廣く 地下曲路 など呼ぶ地も皆北

方のうち也 圓鏡寺 池鏡山補陀落院と号し眞言宗古儀也弘仁年中禁闕に紫雲の祥瑞あり

けれの弘法大師勅命を奉り其瑞雲の本原をたづねて此地に來り自ら不動の尊像を彫みて此院に

安置し定照院と名づく其後補陀落上人別に聖觀音の新像をつくり殿中に居奉り國家安全の守と

し額と書て補陀落院と改む 又二條天皇の永延年中良祐法師中興して 本坊 惣

門 浴室 灌頂堂 經藏 寶塔 廻廊 ならびに 南谷 北谷 の 塔頭十

六坊を造り構へて善美を盡し また境内に辨才天女の靈祠を興立して一池を穿ちけれ

の池申よりひとつの明鏡を得たりしかば 池鏡山と名づく 夫木和歌抄に謙徳公 面影に

見つゝをねむむ花の色を鏡の池にうつしうるていつれにこひしままに鏡のめぐりにさ

くら山吹折たてて水鳥などすへて思と云と見えたる鏡の池を此圓鏡寺の池なるよしひ傳へ

たれと左にはあらで山城國愛宕郡加茂にあるかみの池ならむかご美濃の松の附録にいへり

寛弘二年八月八日良祐當院にて寂す年八十今の樓門の永仁四年丙申七月廿四日の造立なるよし

上梁の文に見えたり其外の諸宇のみな崩折して今の存せず 寺寶 紺紙金泥の大般若經の寛

喜二年庚寅七月當郡 曾我耶庄今の方 夕部の池より牛の負ふて出現したりし

是龍王宮より奉獻の經なり といふ其時墨俣川の流れに曾我耶島の浮出たりと土人の

ひ傳へたり 當村牛頭天王の廣前にして正月元日に大般若經を轉讀して國土安穩を祈禱する式

ありいにしへ寺産多かりしが廢絶して今の御朱印五十二石二斗を領す 古城 村内東の方

地下といふ所にあり 土岐系圖に彈正少頼頼遠の四男 北方五郎頼興とに住みしよしと

るしたる居地の跡なるべし 又伊賀氏系圖に伊賀伊賀守定重の長男 安藤伊賀守守就は伊

賀日向守といひしをの 大野郡より當城にうつり齋藤家に属したまた信長公に仕へて軍功あり天

正八年嫡子尙就北方縣郡 甲斐の武田家に内通の聞へあつて信長の勘氣を蒙り領知を沒收せられし

かの道足も尙就と共に住所を退き武義郡谷口村の山中に隠れ在りしか同十年六月信長公事ありしの際本領に立歸り當城に在しを稻葉一鏡父子に攻うたれ終に打し戦死す法號龍峯寺竹殿道足當郡外山の奥村龍峯禪寺に葬り香花の地とす又位牌の谷口村汾陽寺にあり 龍峯寺の開山湖叔和尙の道足の弟なりその嫡子安藤伊賀守尙就二男 安藤七郎守重兄弟及び尙就の子忠四郎等みな此城にありて守就と同時に討死す其うち 七郎の大力の士にて其妻の山内對馬守一豊の妹也 この縁を以て七郎の子孫の土佐高知にありと云るせり 扱此守就入道の美濃の西方三人衆伊賀道足なりと呼べし一人にて國人も重じけるが天正の頃信長公の勘氣を蒙り住地を去りて他郷にかくれ居けるに同十年信長御父子生害の後本領に立歸り當城に搦上を固めて住みたれば 稻葉一鏡父子これと聞北方の今我等か領知なるにいかの舊領なればとて案内もなくして打入事こそ奇怪なれいそき一戦に及ばんとて軍の用意をなすにける まづ伊賀守か長臣稻葉長右衛門人數を集めて本田村に居たりけるを一鏡より兵卒五六十人遣ひし長右衛門を討せける稻葉右近加納雅樂山本六右衛門など一陣に進み双方入乱れ戦ひけるか敵兵あまた討取り此人も取こめられて戦死しけりかゝる所に右京亮の人數八十騎はかりはせ來り村瀬大隅先陣に進み敵四五人射倒し彌はげしく射かけける加納悦右衛門の長右衛門と渡り合ふしく太刀打してたゝかひけるか終に長右衛門を討

伏せ首をとり猶つゝ武者とたゝかひ深田の中にて二三人と渡り合深手数數ヶ所はなから兩人を切伏せたり須藤權右衛門石丸權兵衛の雜兵多く討取り殘卒を追拂らひけれの物はじめよしと一鏡父子大に悦び士卒に糧食をあたへて休息させをれより北方さして攻寄せけり 北方には 安藤伊賀守尙就その父守就入道々足弟嘉首座尙就の弟七郎また尙就の子息忠四郎 家老松田鷹助 同八兵衛と始め五百余人三段に備へて相防く 六月七日の夜宇に押寄せ未明より八日巳の刻まで戦ひしかは敵味方の士卒たかひに百人計りつゝ討死したり道足八十歳余の老人なれとも自ら下知して働き寄手を四五人打とりける所を村瀬大隅弟古田五郎兵衛道足を切伏せて首をとる嘉首座も強く働き敵兩人切散しけれと村瀬大隅に討れにけり安藤七郎の限りなき大力なれの大身をもて立向ひ敵十余人突伏せけるを武光小左衛門遠山作之亟渡り合はし戦ひけるか彼二人をも討とりける所を石丸權兵衛鎗を合せ須藤權右衛門と兩人して七郎を討取りけり權兵衛權右衛門相打の争論あり伊賀守尙就の士卒を下知して居けるを加納悦右衛門十度討合切結ひ終に悦右衛門に討たれけり子息忠四郎の矢種を射盡し太刀を抜て働きけるを右京亮の馬脇に扣へたる粥川六郎ぬき合せて暫く戦ひしか終に忠四郎を討留けり松田八兵衛の十文字の鎗にて寄手七八人突伏追散し一鏡を目かけて馳來りけるを加納外記渡り合左の手を打落し終に首をとりたりける同鷹助の長山與左衛門に

手を負せ長山危く見えけるを長山か下人馳來り胆助を切伏せ主人に首を打せけり残る兵卒或の討たれ或の落行きけれ一鎮父子勝利を得三鎮の河渡へ右京亮の輕海へ人數を引擧たり時に池田の軍兵二千余騎河渡をさして發向すこれによつて一鎮の石川三右衛門に三百余騎を相添へ會我屋に出しけれの岐阜勢いかのてだてにや川端より引返すを三右衛門の何の思慮もなく勇み進んで追打ける其時池田勢取てかへし多勢にて取巻石川か人數を大半討取けれの三右衛門も深手を負ひ馬より落て失にけり池田勢の川を渡りてゆるく岐阜に引退く此時稻葉の居城まで岐阜勢從ふ事もやと一鎮計策を巡らし城の近あたりの村蔭に百姓七八百人に輜を持せて後詰の跡に見せかけり道足取死の骸を禪僧湖叔和尚葬めむとしけるを一鎮の家士村瀬大隅か弟太郎左衛門いたはり乗替にのせさせ奥村まで送り届け懇に葬らせけり猛武の士なれども心さしのやさしさを人々感しけるこそ外山郷奥村就峯寺に其墓を築けり名細記 百莖根 等に見えたり長享元年九月十二日常徳院殿様江州御勅座在陣衆若到蘇番類從のうに印行すに濃州安藤左京亮とまゝるしたるこの安藤の一族にや又別種にや今定かならず

柱本一村の北方の枝郷にて南に並べり 同領 四百三十四石七斗六合

上眞桑村の宗慶の北にあり其和名類聚抄に大野郡三桑とあるこの事か此地大野郡へ遠か

らす御料大垣御預とも千八百八石三斗八枝村二所日内八股

いふ 堯孝法印日記の文安三丙寅年正月一日の條に美乃國眞桑庄爲本領一舊冬令遺補一仍一昨日御下知御施行等拜領之時細川右馬助入道家へ申侍りしあふく哉みのを山のまつかひも有ける御代の道のめぐみを返し云云 立かへりみの御山の松のたねさかふる道のするどはるけきと見え又同月九日條にも眞桑庄遺補のよしをるせり文長ければこには畧す 厚見郡稻葉山のくだりにもあるす合せ見るべし 物部大明神社の當村の生土神にて祭神の弓削守屋大連なりと 道生の涼風にをるせり 美濃神名記に本巢郡從五位上物部明神ありこの社なるべし 諸木明神社の日内にあり 美濃神名記に本巢郡正六位上室木明神とある社也 伊勢神領春日社白山社共に御除地 三石六斗七升六合 八幡社 村内にあり 法英寺の眞言宗にて除地 一石四升四合 あり 乘泉寺の淨土眞宗西派にて除地 六斗八升四合 あり 慶圓寺も同宗にて 四斗七合の除地あり 甜瓜の當地又下眞桑に産す上品にして皮うちのはだ色青く美味香氣世の瓜にすぐれたり用藥須知後編に甜瓜眞桑瓜也とあるしたる如く此地の名があまうりの惣名となりて他國の産をもまきは瓜と呼ぶ事となりぬ 御湯殿のうへの日記に天正三年六月廿九日のふながよりみのみまきはを申す名所のうりとして二ツまを上云云と見えたり其頃までの多くも産せざりしにや 駿府政事録に慶長十七年六月廿五日 松平攝津守 攝津守忠昌の加納の城主也 献美濃瓜一籠

とあるがはじめにてそれよりのち年々江戸へ献上す

下真桑村 上真桑の南西にあり 同 千四百七十五石一斗三升八合 枝郷 一所

乱橋 と云 天神社 元祿十三年より御除地 三石六斗九升二合 あり 教念

寺 浄土真宗西派なり 二石六斗九升七合 元祿十三年以後御除地となる 光福寺

も同宗にて 一石八斗四升三合 元祿十三年より除地となる

小彈正村 真桑の北西にあり 御料 大垣御領 御旗本領とも 二百四十六石二

斗二升七合 土岐系圖 饗庭二郎太郎國朝の三男 小彈正二郎國繼その子 小彈

正二郎太郎國家 と見えたるこの人なるべし

中野村 小彈正の枝村なり 御料 御旗本領とも 百九十二石二斗四升二合

花木城跡 村内にあり 城主原隠岐守長頼 始名原彦 原系圖 土岐光貞の

子隠岐孫太郎定親 始名加茂 郡峰屋の十代原安房守 始名三郎 頼房の長男にて 信長公に仕へ當城に居り 天

正二年信長公父子越前朝倉の餘黨を征伐ありし時 長頼 金森氏と共に 郡上

り 越前に攻入り小城三所攻取り敵兵數百を討取りしかば其功に 越前國大野郡二分

一 長頼に賜ひしかば 越前 につり住めり 同六年信長公攝津國の合戦に軍功を

顯し又 同十年 甲斐の武田と合戦の時 長頼 金森 遠藤等と 飛騨 に至り高

山の 城主江馬兵庫助を攻從へのち 秀吉公に仕へ參河の 岡崎の城 につつる

慶長五年 の乱れに 石田三成に屬きて石津郡太田に在陣し 同十月十二日 京都

にて 自殺す 長頼の弟 原彌二郎直政 のち加左衛門も當國に生れ 信長公に仕へ

不破河内守に屬けり 天正元年宇治槇島 のたかひよりはじめ所々の軍に高名をと

げ 天正十八年 より 蒲生氏郷に仕へ領 六千石 氏郷 卒てのち美濃に歸り 岐

阜秀信に仕ふ 五千石 を領し 慶長五年瑞竜寺 の砦を守り 淺野幸長に攻破ら

れ幸長の招により紀伊國に至り 千五百石 を領し 和歌山にて死去す その子 原

掃部正次父に従ひ 氏郷 また 秀吉公に仕ふ 慶長五年 池田郡六井に閑居す正

次の子 原加右衛門正勝攝斐の 岡田善同に仕へ六井より東野につつる子孫今にあり

直政 の弟 原勘兵衛可永も又 淺野幸長に仕へ 二千五百石 を領して子孫安

藏の 廣島 にあり と見えたり

更屋敷村 小彈正の枝村なり 御料 御旗本領とも 二百八十六石七斗九升二合

早野村 小彈正の東にあり 御料 大垣御領とも 六百六十四石七斗 出屋屋

敷村 早野のうち也

見延村 早野の北にありて 元和高帳 にも 美濃部村 とあるせり 和名類聚抄 に

本巢郡美濃並とある舊地にて當國の主郷なるべし。國造本紀に三野前國造春

日率川朝開化 皇子彦坐王八瓜命定賜國造とある三野前國の本巢國と

もいひて當郡の事なれば國造も佳し也其證は古事記に日子坐王子神大根王亦

名八瓜入日子王三野國本巢國造之祖と見え又若倭根日子大毗毗命開化

御子神大根王者三野國之本巢國造長幡部連之祖とあるして同じ國造を三野

前國また本巢國とかけけるにて知られたり此神大根王のかむほねとよむべし 日本書紀の

景行天皇四年の條に天皇聞美濃國造名神骨之女兄名兄遠子弟名弟遠

子並有國色則遣大碓命使察婦女之容姿時大碓命便密通而不復命由

是恨大碓命と見え 古事記にも 大帶日子於斯呂和氣天皇聞看定三

野國造之祖神大根王之女名兄比賣弟比賣二嬖子其容姿麗美而遣其御

子大碓命以喚上故其所遣大碓命勿召上而即已自婚其二嬖子更求他

女人詐之名其嬖子而貢上云云故其大碓命娶兄比賣生子押黑之

兄日子王此者三野之字 亦娶弟比賣生子押黑日子王此者牟宜都 として

りて往古の三野に前國と後國二國ありて是古に國造を置かれ 國造本紀に三野後

國造志賀高穴穗朝成務天皇 御代物部連祖出雲大臣命孫臣賀夫良命定賜國造とあるせり此のち前

後のわがちなく一國となりて國造の當郡のみならず安八郡その外の郡にも住みしよし國史に見

えたりその續日本紀 また類聚國史に和銅元年三月庚申美濃國安八郡人國造千代

妻如是女一産三男給稻四百束乳母一人とあるたぐひなり 御料大垣御預御

旗本領とも千二十五石一色村の美濃郡のちなり 正善寺の浄土真宗西派

なり 古城趾の原掃部 すみよしし 名細記に見えたり

長屋村の見延の北にあり 御料大垣御預八百五十二石二斗牛頭天王社

の村内にあり永正の頃の鎮座にて天文年中相羽城主長屋大膳亮興造營すとい

ふ祭神の素盞鳥尊 例祭の六月十五日也疫除の所願有靈驗といふ社司は高橋出雲守

里老のつたへに長屋景興此社を修造ししにも居住せし故村名を長屋とせしよしいへり

曾井中島村の長屋の東にあり 尾御領 千六百十四石三斗六升八合 名古屋よ

り十二里あり 春日大明神社 諏訪社 神明社 子安社 みな村民まつれり

梅英寺の臨濟宗にて江南山と號す京都妙心寺の末寺なり 正光寺の浄土真宗京都西本

願寺の直末なり 土器 濃陽志零に古製之有童謡曰我宿者糸抽川之川上爾今日製而明

日燒之里極雖似凶語然其地歲且祝語也今廢而不製と見えたり 芹の伊都貫川に産す

其根白く長くして糸の如し、糸抽川の名此せりより起ると、里老いへり今のまれにあり伊都貫川の事の次の席田郡の條に在るす

文殊村

會井の東にあり、康正二年造内裡段錢並國役引付に積善庵領濃州文殊中村上方段錢と見えたり、中村の當村の枝郷也、御旗本戸田領、千九百七十四石八斗一升五合、戸田氏の第宅、村内にあり、古城墟の濃陽傳記に文殊城中納言定家卿舊館地船木山と云後小笠原七郎泰綱住云云、見えたり、齋藤氏系圖に長井左衛門利安池田郡白檜の城より文殊に移るとあるましもこゝにありし成るべし

山口村

會井の北にありて外山十ヶ村のうちなり、大垣領、二百十五石九斗二升、季瓊日録に長亨三己酉三月二日桃源翁來云就寺領濃州西山口之事、大館左衛門佐殿白之、三日就當寺領濃州山口之事、遣一行於大館左衛門佐殿狀云、相國寺領美濃國西山口事度々以御下知、雖着卜上使人及違乱干今不云、渡之條迷惑之趣自寺家以事書申上候此在所未落居之間國中、所々寺領同篇候以此旨、可然様預御披露者所仰候恐々謹白、三月二日、名判、大館左衛門佐殿、根尾川、此村の山より出づいつぬき川に水源なり、住吉明神社の境、内山林二町余、邑除なり、梶原平三平景時美濃守護の時こゝに住みしといひ傳へたり、吾妻鏡に文治三年十二月七日甲戌梶原平三景時獻靈輿、背與腹白似雪自美濃國出來云云

景時者彼國守護也、二品殊賞、齧給云云、と見えたり、その頃、大内相摸守惟義も當國の守護にて、同書に文治三年三月三日乙己美濃國守護人相摸守惟義申、當國路驛可加新宿所之事、

有其沙汰、早可依、請之由今日所被仰遣也、俊兼爲奉行、とあるせり、惟義の新羅三郎義光の孫の大内四郎義信の子にて修理權大夫正四位下院昇殿相摸武藏駿河と、分脈系譜に見えたり、惟義何れの地に住みしか今傳なければ定かならず、又其頃、土岐左衛門尉光衡も美濃の守護なりしが、その土岐郡のうちに住みしよしひ傳へたれ、其郡の條に在るす合せ見るへしかく同時に三人の守護ありしよし古書に見えたるか或の所くに居住して國務を行ひしとも又三人かゝるく交代して在國せしともいひ傳へたれ、今事實さたかに辨へがたし又

後世、古田兵部山口の城にありしよし、名細記に見えたり、遠碧軒記に古田重能濃州人號、織部とある如く同氏の人當國に居住せり

法林寺村

會井の東北の方にあり、御旗本領、百三十石二斗、祐勾村の法林寺のうちなり、祐向山古城の村の東の方にありて、藤崎十郎四郎泰綱住みしといふ泰綱の當國の守護代にて公定の分脈系譜に小笠原左京大夫長清の十男藤崎十郎行長の二男泰綱十郎四郎美乃國守護代と見えたり、文殊村の條に古城墟ありて小笠原泰綱住みしといふのち、長井勘九郎あるひに長井孫九郎弘義天文の在城しました、竹腰攝津守隱居のち住みしともいふ

西秋澤村 文殊の北にあり東秋澤の東の方に並ひて方縣郡のうちにあリ 御料 大垣御預

五百八十三石八斗三升七合 白山社 村内にあり除地七斗一升

奥村 西秋澤の北にありて外山のうち也 大垣領 百十八石二斗五升 龍峯寺

廣徳山と號し臨濟宗なり 安藤伊賀守成就入道芝原北方に建立したりしが

天正十年六月八日入道戰死 のち湖叔和尚にうつし 入道と葬り墓を

築けりその法號龍峯寺殿竹巖道足居士湖叔和尚を開山とす

木知原村 山口の北にありて外山の郷也 同領 七十六石四斗八升八合 小唐明神

社 應永三十四年神海村より遷りてうつして鎮座す 田社明神 も村内にあり

神海村 木知原の北にありて外山の内なり 同領 百十八石三斗六升二合 分脈系

譜 土岐彈正少弼頼遠の二男 外山遠江守光明と見え 土岐系圖に光明本巢郡に住じ

貞治年中仁木右京大夫義長將軍にまむさしかり土岐康行將軍の命を蒙り仁木を討つ時康行に屬

して軍功ありしはしまるし又光明の弟に外山四郎忠頼といふ人をのせたる外山の郷の

ちも住みしはしなれど何れの村に在りしか傳へなくて今知りがたければらくてにせ

して後の考へをまつ

外野新田 神海村の 枝郷 池 同領 百三石二斗四合 田社明神 も村内にあり

内野村 外野の北にあり隣村外野と對したる里の名也 同領 百二十一石八斗四升

六合

佐原村 東河の神海の北にありて外山郷也 同領 八十八石四斗八合 山

木倉村 山を隔てて内野の東のかた好ありて外山の郷也 同領 九十四石九斗五升

河内村 木倉の南の方にありて外山郷なり 同領 二百四十九石二斗五升三合

天神社 多度權現社 ともに村内にあり

金原村 佐原の北にありて外山のうち也 同領 九十二石三斗八升 日當村 金

原の内也 高坂明神社 美濃神名記 本巢郡正六位上高坂明神とある齋社なり 境

内山林とも二反 除地 權現社 も境内八反除地なり 八幡社 も村民まつれり

平野村 日當の北にありて根尾谷二十七村のうち也 同領 二百一石二斗七升

めしといふ 同領 二十八石七斗七升 地生の涼風に北みの根尾といふ所に夕食神

といふ御社あり祭神の稻荷大明神土人神前に二道の事をいのり決す瑞ありといふ かきたる

社の根尾谷のうち何れの村にあるか定かならずまらるるにまらるる其所を尋ね改め訂すへし

板所村 平野の北にありて根尾廿七郷のうちなり 同領 二百三石三升五合 古城

跡 ハ今村と神所との界なる尾崎にあり 城主根尾和泉守の神所寺谷の住人根尾右京亮の四男にて 信長公の時こゝに住すと云ふまた 一柳三郎左衛門通方ハ河野道直の弟なるが 兄通直と同しく 伊豫の國より 當國に移り氏を 一柳と改め 土岐頼藝に仕ふ 天文十六年頼藝没落の時大桑にて疵を被り頼藝に従ひ岐禮に至りけるが疵にたえがたく 此地に止るのち 信長公に仕へ 元龜三年公 根尾の一族を退治ありし時軍功ありて 信長公書翰 を給ひ 根尾の所司 となる通方の子 一柳爲兵衛直能當所にありて 信長信忠兩君に仕ふ 秀吉公の時 根尾の代官 となりしよし 名細記にまゐるせり

樽見村 ハ板所の北東にありて根尾郷なり 同領 七十一石一斗四升九合

口谷村 ハ樽見の東にありて根尾のうち也 同領 三十四石四斗六升五合

奥谷村 ハ口谷の東にありて根尾郷なり 同領 百八石一斗四升四合

東板屋村 ハ口谷樽見の北の方にありて根尾郷なり 同領 百五十七石五升二合 岩嶽 イワカサ

ハ東西板屋市場村などにかゝりたる山なり印行の國圖に いわたき山 とかけるハ訛りたるなるへし

西板屋村 ハ東板屋の西にありて根尾郷なり 同領 九十二石六斗六升二合 雷公明

神社 ハ境内二反半余除 と名細記 百莖根等に見えたり

市場村 ハ板屋の西にありて根尾のうち也 同領 六十一石二斗一升二合 牛頭天

王社 大領權現社 ハ花園天皇と稱す 養老年中樽見惠四郎造營 根尾中の惣社

と稱し 境内七町村除 と 名細記 百莖根 にまゐるせり

神所村 ハ市場の西にありて根尾郷也 同領 百四石八斗七升六合 春日大明神

社 ハ根尾谷中の惣社にて 境内山林とも五町余 の村除地なり古來より靜女が舞の裝束を持傳へたりまづハ源義經の愛女なり 古城跡 ハ諏訪の社近きあたりの山にあり 太

平記 に爰に 脇屋刑部卿義助ハ去九月十八日美濃の 根尾の城 に立籠しかども

土岐彈正少弼頼遠刑部太輔頼康に責落されて郎等七十三人を召具し微服潜行して熱

田の大宮司が城尾張國波津か崎へ落させ給て十餘日逗留して敗軍の兵を集めさせ給て伊勢伊賀

を経て吉野殿へ被參ける と見え 熱田の大宮司系圖 の上野助季氏の條に 曆應三年

脇屋刑部卿義助自美濃國根尾城郎黨七十二人召連微服潜行而落ニ千尾張國

波豆崎於大宮司城十餘日滞留 としるしたる根尾城ハ是也また 根尾右京亮

神所の寺谷に住し其嫡子 島右京も當村に住みのち大井にうつり又飛驒の高山に落行くニ男

林出羽 島右京が弟也 當村中屋敷に住しのち徳山にうつる

中村 ハカ ハ 神所の北にありて根尾のうち也 同領 八十石五斗一升五合 根尾川

ハ 此あたりの村くを流れ末ハ杭瀬川に入る 溪鱈 ハ 根尾川の産上品にして長良川に劣ら

ス 此邊の諸村にてとる 厚紙薄口紙 是も此あたりの諸村よりすき出す 中村内藏 ハ こ

ハ の人なり神所の根尾右京の三男中村内藏當村に住しのうち市場村にうつり 金森法印に仕

ヘ しよし 名細記に見えたり

越卒村 ハ 中村の北にありて根尾の郷なり 同領 百四十六石八斗五升五合 中本

桐社 ハ 當村門脇神所市場樽見の惣社と稱し 境内一町三反余 村除なり

門脇村 ハ 越卒の北西にありて根尾郷也 同領 六十二石九升三合

長嶺村 ハ 門脇の北にありて根尾の郷なり 同領 百三十石六斗二升六合

天神堂村 ハ 長嶺の北にありて根尾のうちなりもとハ天神戸とかきしを近頃改む 同領 百

二十一石八斗六合

長島村 ハ 天神堂の西北にありて根尾の郷也 同領 六十七石三斗四升五合

黒津村 ハ 長島の北にありて根尾の郷なり 同領 七十五石一斗一升七合 數合村

ハ 黒津のうちなり

越波村 ハ 黒津の北東の方にありて根尾郷也 同領 百九石八斗一升三合 屏風山

ハ 高山にて材木に出す神所村のかたより街道ありて根尾谷の村くを經黒津の大河原越波な

コ より越前の大野郡温湯村に至る

下大須村 ハ 越波の東の方にありて根尾の郷なり 同領 百七十三石九斗二升六合 大

瀧 ハ 山中にあり高 十間余 といふ

上大須村 ハ 下大須の北にありて根尾のうち也 同領 八十一石四斗三升 明神山 ハ

高山にて諸材を出す 明神瀧 ハ 明神山の上にありて湯釜の瀧ともいふ根尾川の水源嶮に

して行き安からす 明神社 ハ 山中にありて瀧よりハまらく隔たれり 杉大樹 ハ 大須

明神の神木なり高 三十三間 ハ かりの老杉なりしか 寛政年中 枯て朽折たり惜むハ

し 小徑 ハ 樽見東板屋のかたより村くをへてこハに至り越前の大野郡荷暮村にゆく山路

もつとも嶮難なり 大須二郎頼兼 ハ 土岐系圖に池田兵庫頭頼忠の末子にて左京大夫頼益の

弟なるが本奥郡根尾大須にすみよしとせり

松田村 ハ 下大須の南西にありて根尾郷也もと 悪田村 ハ といひよし 村高帳 に見えた

り 同領 八十四石五斗八升四合 岩茸 ハ 大須村の明神山をはじめ松田村越波村

邊の山くより出す名産なり

東小鹿村 ハ 松田の南にありて根尾郷也 同領 十五石四斗六升三合

西小鹿村

東小鹿の西に並ひて根尾郷なり 同領 二十三石四斗二升

新撰美濃志十二の卷

尾張文園岡田 啓編輯

美濃簡齋神谷道一修正

席田郡

加茂村 郡のうち南西の隅にあり 御旗本領 四百三十四石九斗七升七合 賀

茂明神社 美濃神名記 に席田郡正六位下加茂明神と見えたり

芝原村 郡のうち南東の方本巢郡北方の北の並ひにあり故に芝原北方とつらね喚べり 加

納領 今大垣御預 二百八十九石 天神社 美濃神名記 に席田郡正六位下

柴原明神とある社なるへしあるひに同記に正一位天満天神とある神かともいへり 牛頭

天王社 南の方北方の町にあり

佛生寺村 加茂芝原の間にあり 御旗本領 八百八十九石八斗

石原村 佛生寺の北にあり 御料 御旗本領とも 六百七十一石二斗二升 法

應寺村 石原のうちなり

春近村

芝原の北にあり 吾妻鏡 の文治二年六月九日の條に美濃國事應申狀等行沙汰
先了子細追可被仰也云云一春近並郡戶庄年貢事早無懈怠可進濟之由可被下知也云
云と見えたる春近のこなり 御旗本領 四百七十一石四斗四升八合 國恩寺

の眞言宗なり往古國分寺また國分尼寺などいひしが後世轉して今の寺號となりし物ならむか
三代實錄 に仁和三年六月五日丁未美濃國司上言國分寺災焚宇佛殿一時成燬燼席田郡
定額尼寺殿堂宏麗令修御願請爲國分寺許之と見えて不破郡の國府なる國分寺の燒亡
せし故當郡の定額尼寺を國分寺とせられしなり 春近兵衛尉の鎌倉北條家の被官の士にて

こゝに住みし人なり 吾妻鏡 に寛喜四年十一月十三日凡去年飢饉武州被迴撫民術之餘
美濃國高城西郡大久禮以上千餘町之乃貢被停進濟之儀遣平出左衛門尉春近兵衛尉等於當國
於株河驛被施于往反浪人等於尋緣邊上下向輩者勘行程日數與旅糧至稱可止住
由之族者預置于此庄園之間百姓被扶之云云と見えたり

北野村

春近の枝郷なり 美濃神名記 に席田郡正一位天滿天神とあるのこなるへし今神
社のありやなしやを知らず重ねて聞訂すへし 同領 三百九十八石七升八合

郡府村

春近の北にあり此郡の主郷にてはじめて郡を建し時より郡司もこゝに居りまた國造
なごも住居しゆる郡府と名つけし物なるへし 續日本紀 に靈龜元年秋七月丙午尾張國人外從

八位上席田君遷近及新羅人七十四家貫千美濃國始建席田郡焉と見え 同紀 に天平寶字
二年十月丁卯美濃國席田郡大領外正七位上子人中衛無位吾志等言子人等六世祖父乎留和斯知

流布の印行本乎を午にあやまる今金澤本によりて改む 自賀羅國慕化來朝當時未練風俗不著姓字一望隨國號蒙賜姓
字賜姓賀羅造とあるし 日本後紀 に弘仁五年八月丙寅化來新羅人加羅布古伊等六人配
美濃國とある席田君加羅造とこゝに貫し人なるへしまた 國造眞祖父の 續日本後

紀 に承和七年四月戊辰太政官奏去承和五年十一月二日美濃國言管惠奈郡無人任使郡司暗
拙是以大井驛家人馬共疲官倉領仆因茲坂本驛子悉逃諸使擁塞國司遣席田郡人國造眞祖父令
加教諭於是逃民更飯連不絶遂率妻子有本土一夫見善不棄何以責成望請停史生一
員特置驛吏預于把笏令得威勢至得其人爲終身任其公廩者給史生料一勅減省官

員一頗非穩便宜史生數猶復舊例眞祖父一身特聽任用從此而後不得更補其俸料者分
折公廩給史生半分事力公廩不在給限と見えたり 國造田の事の 政事要畧 に延喜
十四年太政官府民部省國造田美濃國廿四町とあるせり 續日本紀 に神護景雲二年六月戊辰外正七位下

元年四月癸巳朔美濃國方縣郡少領外從六位下國造眞祖私稱二萬東於國 同領 五百九十六石三斗九合
分寺一授二外從五位下とあるは國造にて國郡の少領を兼ねし人なり 正保の頃 松平丹波守光重
智勝院 北の方桑山にあり大慈山と號し曹洞宗なり

祖母智勝院殿菩提の爲に建立 し代々の墓を築けり智勝院の松平丹波守康長の室女

久松佐渡守勝俊のむすめにて東照宮の異父同母の御妹なり

三橋村

加茂の北にあり 同領 七百十四石六斗 福田地村 三橋のうちなり

印行の國圖 福田寺とかけり 三代實錄 元慶元年四月十九日庚寅卜定悠紀美濃國席田郡主基備中國都宇郡並卜食と見えたる大嘗會修行の地なりし故福田地と呼ひしかやかて村名となりし物ならむか 美濃神名記 席田郡正六位下春稻明神同しく大物忌明神など大嘗會にかはりたる神をのせたるも其名ごりなり 伊都貫川 村の西にあり川上根尾川にて北より流れ來り當郡の西のかた本巢郡の堺を南へ生津本田の間をへて東南に折れ河渡の南にて河渡川に入る 八雲御抄 につねき河美乃とえりし 清少納言が 枕の草子 にぬき川とかき 催馬樂 にぬき川とうたふも此川なり 梁塵愚按抄 に貫河の美濃國に伊豆貫河と云所あり伊豆を畧していへりとえりし 和歌色葉集 に伊つぬき川つるありとかきたるとく古歌に多くの鶴をよみ合せたり 金葉集 の賀歌題しらす 藤原道經 君か代の幾万代かかさぬへき につねき川の鶴の毛衣 續後拾遺集の 冬 大納言成通 席田のいつぬき川に永柱めて宿る 月には敷物そなき 新千載集に 正治二年百首歌奉りたる時 後京極攝政前太政大臣 廷田のいつぬき川のえき波にむれぬる鶴の万代の聲 此歌月浦集にはむれぬる鶴のとあり 新續古今集 賀 後小松院御製 席田のいつ貫川の川水と住てふ鶴といつれ久しき 同集 賀 雅明親王 田鶴の住むいつ

ぬき川の數浪に猶立まさる御代の數かな 源道濟集 にいのり 万代のいつぬき川にむれい

たるたつのかげにそ見るべかりける 夫木和歌抄 に 法橋顯昭 むしろ田のいつぬき川に年

をへて波や立らむつるの毛衣 同抄 に 千首歌 民部卿爲家 むしろたのいつぬき川に立波

も万代かけてたつそなくなる 同抄に 御集 後堀河院御製 むしろ田のいつぬきかけし玉な

らむちとせをちさる菊の白露 拾玉集 に 雪十首 慈鎮和尚 さえくして雪ふりしけり 廷

田のいつぬき川を先氷ける 堯孝法印日記 文安三年に 名所鶴 かへり來てむすふもうれしたつ

のすむいつぬき川のふるき流を 家集にはふかき 藤川記 に むしろ田を織る物ならぬえき波や

いつぬき川のためとなるまし 永正後柏原院御製 後水尾院勅点集 に 日野弘賢 晴まなき

席田川の五月雨にはしや怪らむ鶴の毛衣 ことめり また 古本催馬樂 に 牟之呂太乃也牟

之呂太乃 伊川奴支加波彌也須牟川留乃 伊川奴支加波彌也須牟川留乃 段二 須牟川留乃也

須牟川留乃知止世乎加禰天會安會比安戸留千止世乎力禰天會安會比安戸留 原本落字誤字あり 體源抄 等

に參考し とうたへり此歌夫木抄にのせて 題しらすよみしらす むしろ田のいつぬきかに

すむつるのちとせをかけてそあそびあらそふ ことえり また 體源抄 梁塵愚案抄 源氏 奥入 同河海抄 等にのせたる 催馬樂 歌に 古本催馬樂に 奴支可波の世々のや波良多乃久良 也波良加爾奴留與波名久天於也左久留川末段於也左久留川末波末之天留波之もえかしあ良波也

波支乃伊知爾久川加比爾加牟三久川加波々千加伊乃保會之支平可戶左之波支天宇波毛と利支天
美也知加與波牟 とうたへりはしめの歌の題の席田のちのり貫河とあるせり 盛衰抄 の奥書
に 于時文安三年丙寅五月廿五日終書功畢觀勝寺金剛佛子行學文明龍集著雍關茂仲呂十有七日
糸貫河西隱禱釋常昭 と見えたるの春近村の國恩寺に住し僧か今定かならず

上之保村ガミノカ

那のうち西北のはてなる里なり 御旗本大島領 千百十三石八斗 大島

氏ノ 第宅 村内にあり 船木山 村の東の方にありて南の郡府村の桑山にかゝり西

北の本巢郡文殊村東の方縣郡西卿村にかゝる 和名類聚抄 本巢郡船木とあるしてふるき郷
名なれど今の廢じて只庄名と此山の名にのこれり 後拾遺集にもみち猶色あさしといふ心を

今上よませ給ふつゝのてに奉り侍ける 右大辨通俊といかなれの船木の山の紅葉はの秋のすぐれ
處にがれざるはむ 新勅撰集に左京大夫顯輔歌合し侍けるに紅葉をまみてつかひしける 權

中納言經忠 嵐ふくふなきの山の紅葉は 時雨のあめに色をさかる 夫木抄 名所歌中

源忠季 ぬつま路や舟木の山の木の間にあはのかにみゆは夜つぐ夜哉川藤川記に 五月雨の

紅葉をそむるためしあらば舟木の山にかゝるがれぬ 舟木抄 舟木抄 舟木抄 舟木抄

夫木抄 松葉集等に舟きの山美のさめあれき諸國に多き地名なれば 尾張國山田郡船木 遠江國

船木 近江國蒲生郡船木 丹波國水上郡船城 布奈 尾張國山田郡船木 遠江國
安藝國沼田郡船木 布奈 同國安藝郡船木 布奈 下總國海上郡

めがたし船木濱の大嘗會の名所なれり近江なる事明かなり 藤原隆信朝臣の家集 にみやこへ
かへるとて 前に上野國に下りふなきの山にもみちさかりにこがれわたりしにうみのたもてにもちり
たるを見て 紅葉ちる舟木の山よそなれとたきををはるかにこかれてそゆく と見えたるの近
江なる事あるく又 夫木抄 に元永元年正月 中院入道右大臣家歌合 左京大夫顯輔郷 さへ
波や船木の山のはとさすほにいて、今そ啼渡るなり とよまれし近江の山なるを松葉集に
美濃に入れたるは謬りなるへし 同抄 に家集中務卿のみこ いまもかもゆふ立すらし船木山
のさかのにしに雲のかゝれる とよみ給ひし肥後國の山と聞えたり
席田 和歌の名所なれど今いづれとさすべき地なし只一郡のうちを廣く其地と見るへしむ
かしは京都楞伽寺の庄園なりじ也觀應二年七月十九日從一位藤原朝臣基嗣の記されし楞伽寺記
に寺産庄園伴目三河國志貴庄云云美濃國庭田庄云云 と見えたり 又定家卿の領地なりしとい
ひ傳へしも據なきにあらす 拾遺愚草に美濃介なりしよし見えたる其頃舟木あたりに館ヤカ
で在られしかも知りがたし猶不破郡府中村國司の條にまるとを合せ見るへし 新勅撰集 に
百首歌よませ侍ける時 祝歌 太宰大貳重家 むしる田にむれぬたつの千代もみな君かよは
ひにまかしとぞ思ふ 同集物名にくつひむし 二條太皇太后宮大貳 數ならぬかゝるみくつひ
むしる田の鶴のよはひも何か祈らむのよはひに何かいのちむとあり 夫木抄 に冬歌中むし 賀茂政平

ゆきにしく物なかりけりむしろたのふへの、原の冬のけしきは、藤川記に、いくちとせかき
 らぬ御代の席田の鶴のほひにまかじとそたもふ、新拾遺集、賀源師光、席田に千とせをか
 ねて住つるも君かよひにまかじとそ思ふ、永正後柏原院御日次和歌結題に、田家見鶴、内
 大臣實隆、まつかにて庵もる友のむしろ田のむれぬるたつにまかじとそ見る、贈内大臣守光
 守捨し庵のある、蓮田に獨立さらぬ鶴のもろ聲、まつかにての歌の雪玉集にもあり、新題林集
 に、名所鶴仙、河門中御、むしろ田に老ぬるたつやまき忍ぶ世くにもあへるよはひなるらん
 同しく、實陰武者 小路、まき忍ぶ霜やいふとせむしろ田に友もむれぬる鶴の毛衣

新撰美濃志十三の卷

尾張文園岡田 啓編輯
 美濃簡齋神谷道一修正

方 縣 郡

河渡村 ハ郡のうち南西のはてなる里にて江渡とも合渡ともかけり此東なる長良川の川上岐阜カカ
 の北西にて二ツにわかれて南北に流れ當村の十町はかり東に至りて又兩川一ツに合ひて流る、
 故合渡と名づけしよし貝原が 岐蘇路記 にいへり 東山道の宿驛 なれば旅店休茶屋等
 ありて町屋つねに賑合ひ東の方厚見郡 加納驛 まで一里半の馬つきなり 加納領 千
 三百八十一石七斗 上河渡村 カミノワタ ハ河渡のうちなり 河渡川 ハ村の東南を流る 山
 縣 武儀 郡上 賀茂 四郡の川く所々にて落合長良岐阜をへてこゝに至る此あたり川巾廣
 く水深し舟渡りありて河渡のわたりといふ川下ハすのまた川なり 古城趾 ハ村内にありて
 宿の北の方をその舊地也といふ 井戸十郎 陸奥出 生人也 はじめて築きて居るそのうち 伊賀伊
 賀守守就入道道足 その子 安藤伊賀守尙就の居城となりしが信長公の勘氣を蒙り武

寺田村

儀郡の谷口村に退きしよし 安藤氏系圖に名細記古城の條等に見えたり 同領 九百三十三石二斗二升 季瓊日録に長録己卯九月

廿四日建仁寺禪居龍濃州寺田卿半濟之事三會院末寺濃州祥勝院領守護半濟之事とあるの當村の事也

小島村

の寺田の東北にあり 同領 七十四石二斗 小島五郎重平の分脈系譜に

浦野兵庫允重遠の孫小島五郎重平と見えたりこの人なるべしその子 小島二郎重俊の事の各務郡岩瀧村の條にしるす

一日市場村

の寺田の北にあり土岐郡に同名の村ありて何れもむかし月毎の朔日十一日廿一日な

るに市のありし里なり 四日市場 五日市場 七日市場などいへる里名の諸國に多き皆同じ例なり 同領 百六十七石四斗三升

曾我屋村

の一日市場の北にありて 元和高帳に曾我部村とかけり 分脈系圖に利仁將軍の

裔孫坂戸判官藤原則明の子妙見堂別當能秀住美濃蘇合郷とあるの事の事なるへし 坂戸夕部曾我部蘇合みなかよふ言葉なり 同領 千三百四十三石九升 夕部池の北方

村圓鏡寺の傳へに彼寺の什寶紺紙金泥の大般若經の寛喜二年庚寅七月曾我耶庄夕部池より牛の負ふて出現せし經なるよし其時墨俣川の流に曾我耶島の浮出たりといへり 古城跡の

曾我部内藏すみよし 名細記に見えたり また土岐系圖に池田刑部少輔益忠の子曾我

部六郎頼久 其子治部少輔益世 其子民部少輔益盛 其子民部少輔

頼盛 其子治部少輔益世 其子民部少輔益盛 其子民部少輔

又丸村

の曾我屋の北にあり 同領 三百八十七石八斗六升

河部村

の又丸の東に並へり 和名類聚抄に厚見郡 河邊とあるのこゝなるへし此地其

尻毛村

の河部の東南にあり 陸奥岩城平 領 五百一十一石一斗八升 上尻毛

村 尻毛のうち也

木田村

の尻毛の北東にあり 同領 千百九石八斗七升 西木田村 柿ヶ瀬村

の木田のうち也 木田三郎重長の分脈系圖に源滿政の裔孫佐渡守重宗の二男 木田

三郎重長住美濃國東有武郷とあるのこゝの人なるへし有武の則武の轉したるにてこゝ

の隣郷なり 源平盛衰記にも木田三郎重長美濃國の人なるよし見えたりその長男 木田判

官代重國の同し系圖に承久京方於美濃國大豆渡被誅高松院判官代開田家紋片蓮とあるせ

り又重國の子 木田又太郎重知の子 開田木田二郎國用また重國の弟 木田上

座重賢の子 木田太郎重季同太郎二郎重兼等 同系譜に見へたり開田の彼家の別

苗この近き改田村其地なるへし

則武村 ハ木田の東にありて康正二年造内裡段錢並國役引付に伊勢因幡入道殿濃州則武郷段錢

と見えたり 同領 四百六十八石五斗九升 則武新田村 ハ則武のうちなり

正木村 ハ則武の北にあり 尾張御領 加納領とも 七百五十一石一斗八升五

合 名古屋まで十里あり 西正木村 南正木村 ハ正木のうちにて都合三郷にわかつてり

白山權現社 ハ村うちにある 貴船社 天白社 等ありしか今の廢れたり 心洞

寺 ハ大白山と號し臨濟宗京都妙心寺の末寺也 盤桂和尚 の 開基 なるよし 名

細記 に見えたり 影現寺 ハ浄土真宗西派岐阜の願誓寺の末寺也 日根野氏宅跡 ハ

日禰野左京亮その子織部正ともにてこゝに住みしよしひ傳へたり

折立村 ハ正木の西にありて 鵜飼庄 といふ鵜飼ハ此あたりに九郷ありて 折立ハそ

の本郷なり 和名類聚抄 に方縣郡鵜飼とかけり諸國に鵜飼のある事ハ 侍中羣要 に諸

國進 鵜石 鵜飼 によしゑるせり 季瓊日錄 に永享九丁巳六月十五日允書記以 鵜飼庄 大藏

港年賞横領事庭中奏之即包都寺三十九貫文鑑 監寺分三十六貫文大藏 港領一町餘田地可

渡之由被 仰出 即命之請取狀兩通懸之御目 七月四日濃州鵜飼庄主事被 命 當圓寺都文 乃

林光院領也十八日當寺都文祝公見 充 林光院領鵜飼庄主職 云云 同十九日濃州龍門寺公帖御

判出候云云 尾張御領 九百七石九斗五升六合 今の減して 四百十三石一斗

二升 となる名古屋へ十里あり 枝村 一所ありて 三股 といふ 五靈宮 村内にあ

りまた 石神祠 藏王祠 稻荷祠 神明祠 天王祠 村民祀れりと 濃陽志畧

に見えたり 超勝寺 ハ浄土宗鎮西派廣大山と號し京極智恩寺の末寺なり

黒野村 ハ折立の西にありて鵜飼郷九ヶ村の一所なり 岩城平領 七百九十一石三斗

二升 光順寺 ハ浄土真宗西本願寺の掛所にて願下五十余ヶ寺あり 吉城趾 ハ加藤遠

江守光泰の子 加藤左衛門尉貞泰 始名 作十父光泰卒去の時幼稚に付領知を減せられ文

祿年中甲斐國 谷村 の城より當城にうつり 四萬石 を領す慶長十五年伯耆の 米子

の城にうつり 六萬石 を賜ふ元和三年伊豫國 大洲 の城にうつり 左近大夫 と

改め 同九年五月廿三日卒 法號 大峯院英寒玄雄居士 あるひハ秀吉公の頃大澤

下鵜飼村 ハ黒野の西にありて鵜飼郷なり 岩城平領 四百二十石五斗五升 村山家

岩跡 土岐の一族村山氏が陣城なりしといふ其のち道三入道もすみしとぞ

東改田村 ハ下鵜飼の西にありて 元和の高帳 には皆田村とかけりされハ 和名類聚抄 の厚

見郡皆太ハこゝなるへし其郡へいと近し 加納領 岩城平領とも 五百六十八石二

斗七升九合

西改田村 の東改田の西にあり 元和高帳 にの皆田とのみありて東西の事なし 岩城平領

六百八十一石三斗七升八合 八幡宮社 村内にあり

下西郷村 の改田の北にあり 同領 九百十五石三斗七升一合小西郷村 の下西郷

のうち也

中村 の小西郷の東にあり 和名類聚抄 の席田郡那珂なるへし此地其郡へ遠からず

加納領 三百二十七石三斗八升四合 上中村古城 の額額源五同右京なむ

と住しよしいひ傳へたり其人くの事の厚見郡宇佐村の條にくのしくまるす合せ見るべし

小野村 の黒野の北にありて鶴飼郷なり 御料 五百六十九石九斗五升八合 關白

社 の正法寺の門前田の中の農家の藪の中にありて杉の大樹のこれり 文明六年九月一

條禪閣兼良公此地に來り數月滯留ありしかば土岐成頼又その執權齊藤利藤なむと給仕奉

りけり其ころ 公の御女 細姫君 を利藤の子 齊藤新四郎利國に賜ふ 利國明應五年

戰死 のち細姫當村利國の領に隠棲し 松隱菴維清利貞尼 と稱しのち武儀郡 谷口

村 に移らる 父兼良公薨去 の後 尼公此社を創建 して靈神を祀らる世の人

關白社 と稱すといふ尼公の天文七年谷口村にて逝せらるその勝臣田中將曹重純の子孫今に

ありて此社の敷地の農家なり 正法寺 の醫王山と號し臨濟宗妙心寺悟溪派なり 土岐美

濃守成頼は先祖より河手の正法寺 盤樂山の且那なりしが關山派歸依のあまり 寛正六年七

月別 に此村に 當寺を建立 して醫王山正法寺と名づけ妙心寺衛梅院の 雪江深和

尙を開山 とまたりしが 天文十一年 の頃 齊藤道三が兵亂に燒亡し其のち再建

ありしも 又永祿五年 の兵火にやけたりしを 慶長年中黒野城主加藤左衛門尉

貞泰廢寺の跡に眞言 古 の一寺を建立し五光山 正法寺 と名づく今の寺是なりあるひの

蓮華院 ともいふ寺の前に後成恩寺兼良公の靈廟ありて關白社といふ郡上の城主東常和なら

びに種玉權宗祇長亨の頃兼良公の庶を拜する和歌常和の家集にのせ又享祿のはじめ西三條内大

臣實隆公 道達院號 も正法寺に來り和歌の宴會を行はれしとぞ 古老 叢話 作者詳ならず 寛延實曆頃の作なりと美

濃國鶴飼の庄に小野と云里あり爰に 一條禪閣兼良公の墓あり公の應仁の始め山名島山に

くるしめられ南都に六年計たのして文明の頃の美濃國へ下り和歌道にまたしく又歸なれり持覺

院妙椿法印が本に行給ひ此所の正法寺に住給ひ後又周防國大内助か許へこし給ひそこにて身ま

かり給ふ然らば美濃に墓有ることの齊藤持覺院利國の妻の公の御女なりければ爰に墓を移し營

みてとふらひけるとかや織なる藪の内に有とぞとあり

古市場村 の小野の東にありて鶴飼郷なり 加納領 六百八十九石八斗五升八合 往古

此所市場にて少川市と呼べりしと今市立なく村名にのみ残り 日本靈異記 に聖武天皇御

世三野國片縣郡少川市有二力女爲人大也名爲三野狐是昔三野國狐爲母力強當三百人力住少川市内特己力凌弊於往還商人而取其物爲業時尾張國愛智郡片輪里有二力女爲人少也是昔有三元與寺道也場法師之孫也其聞三野狐凌弊於人物而取念試之蛤捕五十斛載泊彼市也矣儲備副納熊萬練縫廿段時狐來彼蛤皆取令賣然問之言自何來女蛤主不答矣問不答重四遍問乃答之言來方不知狐念元禮打起依即三手侍捉熊萬縫以一逼打之縫若肉炙取二縫二逼打々縫若肉十段縫隨打皆若肉狐白之言服也犯也惶也於是知益於狐之力也蛤主女言自今已後在此市不得若強住者終打殺也狐所打毆不仕其市不奪人物彼市人物皆悅安穩夫力人爰繼世不絕誠知先世殖大力因今得此力矣拊久良 拊之 縫 弊 師倍 毆 比曾米 條也

今川村 ハ古市場の東にありて鶴飼郷なり 御料 四百二十四石六斗五升
 交人村 ハ今川の北にありて鶴飼郷なり 加納領 九百六十四石一合 三代實錄に

貞觀四年五月十三日庚辰美濃國厚見郡人外從五位下行助教六人部永貞讀岐少目從七位上六人部愛成散位從七位下六人部行直等三人賜姓善淵朝臣天孫火明命後少神積命之裔孫與伊豫部連次田連等同祖也云云 仁和元年十二月十一日辛酉正五位下行大學博士善淵朝臣永貞卒永貞者左京人也本姓名六人部福貞美濃國人揚名官達改姓善淵名永貞

貫三附京兆一也七十三卒於官一とあるしたる六人部を 交部 とかける例もあれこの人の

人かといふ人あり厚見郡のこより遠からねのさもあらむか今定かには辨へがたしまた續日本後紀に承和三年閏六月乙酉美濃國人主殿察少屬美見遣貞繼改本居貫三附左京六條二坊其先百濟國人也云云 嘉祥二年八月丁未美濃國方縣郡前權大領外正八位下美縣貞繼賜姓善根連

とあるも此あたりの人にやあるひの美縣と美濃の方縣をつゝめたるにて此郡人なる事たしかなれの方縣津の神の本居の地福光村のあたりの人にてあらむか今のまりかたしえのらくしかにまるとして後の考をまつのみ 美見遣の事は續日本紀に延暦七年九月丁未美濃國厚見郡人善淵朝臣貞繼賜姓美見遣と見たり

洞村 ハ交人の西にありて鶴飼郷なり 御料 御旗本領とも 七百四十一石三合
 深坂明神社 ハ 御除地八斗四升八合 ハ 圓城寺 ハ 臨濟宗にて 五石五斗三升八合 ハ 御除地 ハ あり
 御望村 ハ 洞村の北西にありて鶴飼郷也 御料 加納領とも 五百二十九石二斗四合 御望山 あり

上西郷村 ハ 御望の西にあり 御旗本領 二千四百九十六石九斗七合 中西郷村 阿彌陀寺村 廣海道村 犬塚村 明音寺村 ハ みな上西郷のうち也 土岐系圖に左京大夫頼益の弟 西郷上総介頼音方縣郡西郷住其子 西郷二郎光卿その子 西

郷小二郎益音と見えたり

則松村 の上西郷の北にあり 同 千二百五十八石八斗八升八合 山田孫四郎重

村 のこのの地頭にて 分脈系譜に山田次郎重忠四代の孫次郎重泰子孫 四郎重村 美

乃國則松郷地頭と見えたり

東秋澤村 の則松の北にあり 同 三百七十六石九斗八升八合

雜倉村 の東秋澤の北にあり 御料 五百八十八石九斗二升九合 雨池 下雜倉

にあり 夫婦石 たなし高き石二ツ並ひたてるをいふ

佐野村 の雜倉の東南の方にあり 御旗本領 四百二十石二斗二升九合

芦鋪村 の佐野の南にあり 御料 七百五十五石五斗三升

岩利村 の芦鋪の東にあり 同 八百十九石四升八合 大岡氏宅跡 村内にあり

大岡左馬助此あたりを 領知 し 岩利に住みしといひ傳へたり

彦坂村 の岩利の南にあり 御旗本領 六百四十四石六斗三升

村山村 の芦鋪の南にあり 同 二百五十七石八斗四合 古城趾 の土岐の一族

村山芦敷等住し 村山越中守も住めり此外 彦坂石谷等も住すと 名細記に見えたり

土岐系圖に左京大夫頼基の長男 土岐宮内少輔頼秀 參河守幼名猪法師母の佐々木定頼女也織

田備後守信秀讓二秀字一稱二頼秀二逆臣齋藤秀龍が讒により父頼基の勘氣を蒙り當村に盤居し

村山宮内少輔頼家と名乗る天文十一年秀龍謀叛の時兵を起して軍功ありければ父の勘氣

ゆり 武儀郡吉田 に住みて 參河守と稱す其子土岐越後守光義二男土岐織部正昭頼

その弟稻葉勲負佐頼永の養子 頼一の弟土岐掃部助榮興など將軍義昭に仕へしよしゑるせり

石谷村 の村山の南東にあり 御料 八百二十八石七斗七升四合

椿洞村 の彦坂の南にあり 文明八年因幡社本縁起に 厚見縣椿原 今號とあるのこのな

るへし 同 四百八十九石四斗四合

上城田寺村 の石谷の南にあり 同 六百七十二石八斗八合 美濃神名記に方縣郡正

六位上城田明神とあるのこのに在まし神なるへし 舍衛寺 の 船田後記に旁縣郡城田山

舍衛教寺むかし一流の 旗空中 に飛騨りてこのに落むとし南の方をさして尾張の熱田の神

地に到りまた歸 翻て此地に墮とまるとそのはたのれもてに舍衛國の三字ありよりて此伽藍

をいとなみ 舍衛寺 と名づけ 旗墮寺 ともいひしよしゑるせりやがてその寺の號が村

名となりしをのちに城田寺村とかき改む厚見郡河手主城 土岐美濃守成頼堂宇と修造

し明應五年池田郡小寺村安國寺にて 成頼剃髮し 法名を宗 此舍衛寺にうつりて隱栖

す土岐の執權 齋藤利國か家士 石丸玄蕃利光船田合戦に利を得ずして去々年近江國に

走ししが 今年明應五年五月廿九日 近江より歸りて二族當寺に會合す 成頼入道
 宗安の 六月廿日 院中を出て 加納の城 につり二男 元頼の當院に留まりあり
 しが寺の四面に櫓をあげ防戦の支度す 齋藤利國が軍襲ひて相戦ひ惣方火箭を放つ 元頼
 方打負け 元頼自殺し 利光また一族三十四人火を放ちて 自害す 其時寺開ことく
 く焼失すといふ猶くしく厚見郡菟部村の條にしろす合せ見るべし 梅華元盡藏 に 明應五
 年丙辰今茲夏石丸出江假道於伊陽過尾之津島屯竹鼻二十日曉入濃之旗墮寺とかけるも
 其時の事なり又此諍論の事文龜年中沙門宗澤が當寺にて法華讀誦をたりし記文に見えたり
 古城 舍衛寺の境地其あとなり 土岐成頼入道宗安明應五年 につりすみ 其
 子美濃守政房も河手の城よりこゝにつれり 政房の弟 佐良木三郎尙頼もその弟
 土岐四郎元頼と共に 明應五年城田 にて 生害す 其のち天正の頃 山内掃
 部助實通 山内對馬守一 大桑より城田地の地の城につり當村また西庄村を領知してありし
 といふ
 下城田寺村 上城田寺の南にあり 同 八百十二石一斗一升八合
 上土居村 城田寺の南東にあり 御旗本領 七百十九石七斗四升五合 土居駿河
 守頼繼の土岐隱岐守光定の曾孫原彌二郎師實の長男にてこゝに住みし人なり

下土居村 上土居の南にあり 加納領 五百十八石六斗三升
 鷺山村 下土居の南にあり 尾張御領 加納領とも 六百十三石三斗七升三合
 名古屋まで十里あり 天神社 以幡社 白山社 ともに村民まつれり 法光寺
 浄土真宗西派今泉の願誓寺の末寺なり 古城趾 村の西の山の頂にあり峯より西に正木
 村の地にて城跡其村にもかゝりたれど南門の趾鷺山の地なれり世に鷺山の城と喚べり 文治
 の頃 佐竹常陸介秀義居 名細記に見えたり秀義の分脈系圖に新羅三郎義
 光四代孫佐竹常陸介隆義の子佐竹別當秀義美乃國山田郷地頭職始而拜領とあるせり 又土
 岐頼藝園司にならざる以前にこゝに住みしといふ 天文の末齋藤道三隱居のち
 此城に居り弘治二年四月廿日戦死す 賤の小手巻に鷺山の城に昔枝廣左衛門と云人
 あり家の流るゝ程の水を給りれと龍神に祈る其比の大水に舟戸の石に舟をつなぐと云 舟戸
 上城田寺の山にあり立石と云枝廣左衛門何代の人と云事を不知と見えたり 本朝語園に
 美濃國に石谷と云ふ土あり齋藤山城守道三と同心にて鷺山城に籠れり寄手齋藤新九郎取圍み漸
 を落城に及りむとす彼石谷文武に心懸の功あるを惜み矢文を射使者を立是非共に城を出られよ
 未練に成ましき旨理り有りしが其時歌をよみ置て終に討死す人皆惜みあへり 命やはうき名
 にかへじ世の中になかぢらへはつる習ありともとあり 蟬土手 村の東にあり四面に封

疆のかたちのこり西を出入の口とす舊宅のあとなるべく何人の住みしか今傳説なしせみごとと名つけしゆゑよしもゑる人なし

中福光村

鷺山の東にありて 長良莊

なり中福光上福光眞福寺をもて長良三郷といふ

尾張御領 千二百三十七石三斗

濃陽志畧に千二百四石三斗とあり

支村 三所ありて 八代

大田 天神

といふ名古屋まで九里あり

縣明神社

八代にあり 延喜神名式に

方縣郡方縣津神社とゑるし 美濃國神名記 に從二位方縣津明神と見えたる古社なり當郡本貫の縣氏の人等が祖神を祀りし社なるへし縣氏の事 日本靈異記 に美乃國方縣郡水野郷楠見村有、二女人、姓縣氏也 と見えたりくはしく岐阜の因幡大神の條にしるす合せ見るへし 新撰姓氏錄 の橘朝臣の條に贈從二位栗隈王男治部卿從四位下美努王下、美努、娶、從四位下縣犬養宿禰東人女正一位縣犬養橘宿禰三千代大夫人、生、左大臣諸兄中宮大夫佐爲宿禰贈從二位年漏女王、云云 とある縣犬養氏の何れの郡の人か今知りかたし又三代實錄にのせたる縣萬歲麻呂の惠奈郡の人なれ、其郡のくだりにゑるす 神明社 も村内にあり 崇福寺 の神護山といひて臨濟宗京都妙心寺の末寺なり文明元、己年土岐家の長臣 齋藤越前守利長、又號帶刀、左衛門、入道宗甫の建立 にて 翌二年、寅 四月十五日開堂の時 山神擁護 の靈瑞あり依て 山號 とす其のち 長井藤左衛門長弘、池田郡白樫の人のち居を本巢、境内に

天神の社と創建し享祿三、庚 年正月十三日死去す 其夫婦の位牌當寺にあり

寺領御朱印三十三石 紫衣免許の靈刹なり 塔頭一字楊屋軒 といふ此寺はじめ造

立の地の中古洪水に崩れて川となりしゆゑ今の地にうつして再建したりしとて栢堂和尚仁軸和尚等の大徳當寺にありし事書畫二覽などの俗書に見えたり 妙徳寺 の淨土眞宗西本願寺の直末也 明嚴寺 と同じ宗にて越中國開名寺の末寺なり 齋藤道三塚の 濃陽志畧 に

在、長良古川岸下、河決岸崩、今移、千崇福寺中、と見えたり 長良川合戦の 齋藤道三父子の軍なり齋藤山城守秀龍の子 義龍實の 土岐頼藝の 胤子にて其母 二芳といひける

いたくひなき美婦なれば 頼藝の 愛妾 にて 懷妊 しありけるころ 秀龍頼藝に昵

近し彼妾を所望申けるが傍に人なき折にて否といは主人なれど 刺殺 すへき程の氣ざし

見えければ左程に思は、具し參れど 頼藝いはれる故 則賜 りりて 秀龍が妾 と

す 彼懷妊 の子 秀龍が家にて生れし故 嫡子 とし 義龍と名のらせ稻葉山の城を

譲り秀龍の鷺山に 隱居 す後 秀龍の 實子多 くうまれければその實の子のうちを

惣領 に立むと思ふ心起りて 義龍を疎み隔る色顯れけり 義龍の近臣日根野備

中守弘就 武井肥後守助直等申ける、君 全く 道三と 御父子 にあらず其上

御實父頼藝君道三に國を奪われ給へば御父の 讐 なり速に御誅伐あるべしと諫めけ

るに、義龍そのむねを心得、長井隼人佐道利をかたらひ、日根野に申付けて、道三が實子の弟二人を討果させ、道三と父子を斷て齋藤を改め、一色左京大夫義龍を名乗りけるか、りけり、道三に怒り、弘治元年義龍を討たむとて、國中の勢を催しければ、元來不義の道三に與するものすくなく、鷲山へり參らす、義龍の勢に加ふるもの多し、まづ、義竜の味方にて宗徒のものには、揖斐因幡守、原紀伊守、船木大學助、石谷近江守、明智十兵衛、田原式部、衣斐與三右衛門、高山伊賀守、同右近、土居右京、本莊民部少輔、遠山刑部、鷲巢六郎左衛門、曾我部内藏助、池田又太郎、芦敷右京、山縣三郎、蜂屋兵庫頭、金山二郎左衛門、相庭掃部助、八居修理亮、池田修理、小里出羽守、大桑二郎兵衛、萩原孫三郎、郡家七郎、猿子主計、牛牧右京、外山修理、今峯源八、落合掃部、林主水、其外他家の輩には、伊賀伊賀守、氏家常陸介、不破河内守、山内兵庫頭、竹腰攝津守、武井肥後守、稻葉伊與守、岩田民部、井戸齋助、近藤新五左衛門、齋藤八郎左衛門、同石見、同大和守、石丸主殿、長井將監、小塩四郎左衛門、堀將監、鷲巢九郎兵衛、栗原右衛門尉、跡部將監、鷲見大學、深尾下野、武藤淡路、宇佐美左衛門尉、上田加賀

右衛門、筑間左衛門、石井駿河守、大墳飛騨、中條左近入道、内藤市作、那波上野入道、久昌軒、同内匠助、松山刑部、佐合修理、松市太郎左衛門、野村越中、平井宮内、羽賀五郎左衛門、日比野下野、長屋信濃、下村丹後、梶原平九郎、立田大藏、高屋大炊助、松井刑部、臼井加賀、兼松右京、臼田宮内、宮田左衛門、青木新左衛門、佐藤和泉、岸勘解由、豊田民部、大倉右京、石井遠江守、林兵庫助、同主税、淺岡新八、玉井二郎左衛門、國枝八郎、四ッ松景左衛門、後藤右京、關谷兵庫、岡主馬、高井加賀右衛門、松原源五郎、奥田内記、矢代左衛門、堀部新左衛門、古田右近、和田主馬、輕海平左衛門、各務右近、河合織部等我もくと、駈付稻葉山の上下に充滿したり、道三方へ來る人々には、川島掃部助、惟重、神山内記、義鑑、林駿河守、正道入道、道慶、道家助、六郎定重、同彦八、黒田監物、堀池備中守、河田隼人、同新左衛門、内藤新十郎、松原二郎左衛門、奥田造酒、高橋修理、岩手彈正、竹中遠江守、牧村兵庫、改田大學、同圖書、大澤治郎左衛門、瀨瀬右京、中村惣助、河村圖書入道、務元、井上加賀右衛門、木田掃部、箕浦市郎兵衛、渡部源内、市橋正九郎、遠藤修理、守屋中書、安東刑

部 原中務 片桐縫殿 大西太郎左衛門 多田新左衛門 中島石見 一柳
 右近 加藤右馬助 篠田新左衛門 民田平左衛門 長山新助 眞鍋外記
 今井修理 大塚藤三郎 近藤壹岐 加納兵部 鶴飼外記 國枝三河守 毛
 利宮内 森彌四郎 田村將監 山内傳兵衛 桑原十郎左衛門 廣瀬主税
 松浦民部 大野主水 堀江掃部 栗本内藏 所新左衛門 山田九藏 早
 川藤治 鷺見新藤治 梶川彌三郎 水野民部 飯沼木工之助 世斐修理入
 道 三上内藏助等なり 秀龍入道道三の小勢にて 義龍の大軍に迎ひ戦ひなれば必利
 あらしめて 長良川 を隔て相戦ふ 川島掃部 神山内記 林道慶 道家助六
 郎などはげしく働けり敵も味方も 同家 の者共にて 道三の旗大将林道慶と 義龍
 の旗大将林主水との 伯父甥 の中なるか如く 父子兄弟 其外見知りたる人く敵
 味方とわかれたれば後日の嘲りをや耻たりけむたがひに命を輕して戦ひけり 道三方敗北
 して引退き 鷺山 を捨て 山縣郡北野村鷺見美作守が明城に 楯籠り 林道
 慶へ 鶴ヶ峰 に向ひ城を構へてたてこもる 翌弘治二年道三北野 より 城田地
 へ移り岐阜の景氣を窺ひ 四月十八日 再び長良川の中流に打出たり義龍方よりも出迎
 ひ 同廿日 まで息をも繼がず攻戦ふ 道三かた討負けむねと頼みたる 竹腰攝津守

尙元 今井外記 石川六右衛門 乾内記 樋口忠右衛門を始め五十余人討とら
 れ 道三も廿日の暮方城田 の城をさして落ゆく所を 小牧源太の人なり 長井
 忠左衛門 林主水等追かけて終に 討捕 りけるよし 名細記 にあるせりその 道
 三の骸 を土中にうづみ 則齋藤塚 と喚べり
 岩崎村 中福光の北にあり 御旗本領 七百八十四石四斗八升四合 諏訪明
 神社 町の南の入口に鳥居あり 鶴ヶ峯 町の東の方にあり道三の兵士 林駿河守入
 道道慶か 弘治元年長良川の軍 に築さし 砦 の跡あり又麓に まま子か淵
 といふありて風景よく まま子か餅 と名づけし石あり其外大岩多たてるが見事なりま
 た岩崎の要害の齋藤道三か砦の跡也といふ 靈松院 臨濟宗にて京都妙心寺の派なり
 打越村 岩崎の北西にあり 同領 四百五十九石二斗五合 瑞昌寺 妙心寺末
 西栗野村 岩崎の北にあり 御料 七百五十七石九斗一升九合 大龍寺 臨濟
 宗にて 一石七斗七升四合 の除地あり 船田乱記 當寺の住僧淳岩の作にて前記の
 奥書に予頃寓雲門粗叙其所見聞者以傳干後明應建卯之秋既望と見え後記の終に栗野大
 龍寺淳岩和尙之記也とあるせり 栗野二郎國光の 分胤系圖 に美濃源氏飛騨瀬太郎國成
 の二男なるよし見えたりこの人なるべし

りて見物すをほよそ此河ののぼりくだりやみになれば徹船敷を知らぬといふを聞て ゆふやみに八十とものをのかりさしのほるうぶねの敷もまられず 鵜の魚をさるすがた鵜かひの手繩をあつかふ躰なごけふはじめて見るなれこのはにもへかたく哀とも覺え又興を催す物也
 うかひ舟くるやたなの短夜もむすほくれなはとく明しを すなはち鵜のはきたる鮎をか
 りり火に焼て賞斷すこれをかくりやきといひならしたるとなむ とりあへぬ夜河の鮎のか
 りやきめづらとも見つあれとも見つ と見え 老の木曾越に岐阜川の鵜舟の光かすかに見
 え侍れば あまつ星くもり行かといさり火の影消そむる遠の夜川に とまるせり 近きころに
 は 鈴屋集にみの、國のなから川の鵜舟の繪に 本居宣長 うかひ舟今のほかにはなから川
 ひかしを見する篠火のかげ、又桂園一枝に 名所鵜川 香川景樹 かなしくもうぶねさすな
 りなから川なからへはてぬ此世と思ふにとよめり 鵜舟も十二艘ありしが今の減りて七艘と
 なる鵜匠一人にて鵜を十二三羽ほどづゝつかふ手繩をくりさばき鵜の呑たる魚を吐かせて又水
 に放ち入るゝその手業の物なれたる事あやしく見事なり 鵜も又その辛苦を勤めなす誠にめ
 づらしく不思議といふべし 本草正論に濃州岐阜の人飼置きて年魚を捕らするの鳥鵜鵜なり
 常の鵜より大にして羽色薄黒しこれを捕るに知多師崎邊の海中の石に鵜繩を張て捕之若
 捕されば北海出雲の海濱に到ると云々とまるせり 茨菰の長良の三郷にて鵜に作るもの其

形細長く三尺四尺もありて他所の大根に異なり世に長良大根といひて名物とす 八幡社
 俗に鵜飼八幡と稱す 神明社 山王社 ともに村内にあり 法久寺 浄土真宗京都西
 本願寺の直末寺なり 古城 濃陽志畧に在村東北一敗塚猶存然不知何人所住里老云
 枝廣左衛門尉居此而失其傳と見えたり 土岐系圖に伯耆守頼員の子福光左衛門尉頼直從五位下
 始土岐住方縣郡福光とあるは同じ人ならむか土岐氏連枝の多ければ枝廣と稱し又此地に住み
 小太郎住方縣郡福光とあるは同じ人ならむか土岐氏連枝の多ければ枝廣と稱し又此地に住み
 し故福光とも名のりしなるべし

雄 尾総村 上福光の東にあり 御旗本領 八十九石三斗八升三合 尾総橋 村

内大臣 かりそめに見しはかりなるはしたかのをふさの橋を懸やわたらむ 此歌名寄と見え 藤川
 記に美濃國の哥枕の名所その所いづくともえらねと心にうかふ事ともを筆の次に書あつめ
 侍るべし云云 七夕のあふせの遠きかきさのをぶさのはしを先やわたらむ とまるせり

枕草子にふさの市とあるはこの事にあや 大和物語にむかひ在中將のあつまにいた
 るけにやあらむ此子とも人の國かよひをなん時くしける心ある物にてひさのくにのあはれに心ほそき所くにてはうた
 はかてかきつげなどなむしけるふさのむまやさいふ所は海邊になんありけるうれにのみてかきつげたりける われつみ
 と人や見るらんふ事のなみだをふさになきつづればとあるをふさのむまやは海鳥のよしなればこゝにはあらじ同じ地
 名なれば後の考のた 千手院 眞言宗の古儀にて雄総山護國之寺と號す 聖武天皇銅像の大佛
 を鑄むとたほしめし行基法師に勅して治工を諸國に尋ね給ひしに當國厚見郡日野の郷に金王丸

らねいまかりてとはんとおもふにまか〜このよしをかたれば世の中をひといいの
 峯にかふるまつやなか〜はかなかるらむとまるとしたるも此所の事なり 尾張御領 慶長
 より 東照宮御料所となり元和 元高二百三十三石二斗九升九合 寛永二十年の究め
 五年の秋尾張の源敬公御拜領 高也 名古屋まで九里 加納の城へ一里 大垣の城へ五里 高須へ七里 郡上八幡の城へ十三
 里 苗木の城へ二十里余 岩村の城へ十九里 尾張の犬山の城へ五里 あり 町、各本町 搦
 うちの中央なる横筋なり東西へ通りたる町を横筋 釜石町 本町の西のついで 鍛冶屋町
 とし南北へ通りたる町を堅筋としてこれをしるす 釜石町の西のついで 七曲町 車町の西のついで 上ヶ門町 七曲
 釜石町の西のついで 車町 鍛冶屋町の西のついで 七曲町 車町の西のついで 上ヶ門町 七曲
 西のついで 横筋にて忠 加和屋町 革屋町ともかきて本町東のついで 横筋なり末の東
 節村の方よりの入口なり 御登山道 鞆屋町 本町よりはじまり 米屋町 鞆屋町の南のついで 白木町 米屋町の南
 といふ 鞆屋町 南への堅筋なり 米屋町 鞆屋町の南のついで 白木町 米屋町の南
 堅筋 上篠土居町 笹土居とも書て白木町の南のついで 惣搦堀の外なる堅筋 下篠土居
 町 上篠土居町の南のついで 横筋 魚屋町 本町よりはじまり 久屋町 魚屋町の北の
 町 にて加納の方よりの入口なり 西材木町 久屋町の北のついで 東材木町 西材木町の東なる堅筋にて北の 上今町
 な 西材木町 久屋町の北のついで 東材木町 西材木町の東なる堅筋にて北の 上今町
 東材木町の東の堅筋にて是も中 中今町 上今町の南のついで 下今町 中今町の南のついで
 河原新田より南へ入口の町なり 上新町 中今町下今町の間より 上新町の西のついで 大工町 中今
 方革屋町に 上新町 はじまり西への横筋也 中新町 上新町の西のついで 大工町 中新
 てとまる

西のついで 下新町 大工町の西のついで 上大久和町 上新町の北なる横筋なり山縣郡大
 の横筋なり 桑町とも 中大久和町 上大久和町の西のついで 下大久和町 筋なり下大久和町下新町の二
 かけり 筋の西北の方田面に通 上竹屋町 鞆屋町の西な 中竹屋町 上竹屋町の南のついで 下竹
 ふ出口也末の舟渡あり 屋町 惣搦堀に橋ありて今泉村の方よりの入口なり 布屋町 上竹屋町の北のついで 蜂屋町
 屋町 中竹屋町の南のついで 上矢島町 上竹屋町の西 中矢島町 上矢島町の南のついで 下矢島
 布屋町の北のついで 上矢島町 なる堅筋なり 甚右横町 上矢島町の北のついで
 町の南に惣搦堀の橋ありて今泉村の方よりの入口なり 甚右横町 上矢島町の北のついで
 町 東御横町 西御横町 鞆屋町の南の方より上矢島町の南 米屋横町 米屋町の南の方
 なる横筋 矢島横町 米屋横町の西のついで 横筋なり岡田將監郡代のころま 東土居原
 なる横筋 西土居原 惣搦土居のうち白木町の南の方より 木造町 中矢島町より西へ 當所町通り
 の木戸の左右の柱の上に木を横に渡したれば屋根ある門の如くにて他所の町木戸のさまにたが
 へり是岐阜中納言秀信のつくられしよしひ傳へたり 惣搦の外村方に属たる町〜南の方に
 は 小熊村 の町屋また 今泉村の布屋町 七軒町 大田町 等 上加納の方よりの
 入口なり 西の方 忠節村 の町屋の 四ッ屋 上ヶ門などをへて釜石町に入る是を 上
 ケ門口 といふ 東の方上大久和町のついで 横筋の 古屋敷新田の町屋也 その東

のいさきと 山口横町 といふ末の城山にのぼる 百曲口 なり 東北の方 上茶屋町
 下茶屋町 また 木挽町 かや屋町 なり 古屋敷新田の地うち也 その北
 の方 中河原新田の町屋 長良川の南の岸にありて福光村の方より入る 北口 なり
 以上岐阜属邑の町 みな構の外也といへども家つゞきなる故に なべて岐阜の町を喚べる
 事 名古屋の府内についたる古渡村日置村前津村等 の外敷村に亘りし府外の町 をも差
 別なく みな名古屋の町といふ例に同じ 美江寺大門 といふ所に飯盛女ありて賑合しか黒田文右衛
 門岐阜奉行の時遊所らしき事を さひしくやめさせしか 飯盛女 も追拂われたり
 稲葉山 川の東にありて因幡山とも書き 又金花山 破鏡山 石山 なり も喚べり 山の峯 別なる
 故南の方 権現のましますをい なば山といひ 北の方 古城跡なるを 金華山 と喚べる のわらじ 幾
 峯 ありて もみ な は 山 一 名 金 花 山 也 北の方の丸山にも も権現の鎮座ありしを
 ち 今の地に遷座ありしにて丸山がい なば山の本所なるよしを知るへし 古今和歌集に題しらす
 在源行平朝臣 立別れい なば山の嶺にかふるまつとし きは今歸りて とあるをその集
 の古人の註 も に 此 山 の 歌 と し ある ひ の 因 幡 の 國 の 山 と する も あり て 願 註 密 勘 奥 儀 抄 等 に 因 幡
 の國の山 なりといひ 八雲御抄 範兼抄 なり に 美 乃 の 山 と する よ 見 見
 死 り 又 紹 巴 法師 が 註 解 したる 建 保 名 所 三 百 首 抄 にも 因 幡 山 美 濃 と 記 し 其 外 夫 末 抄 の

古寫本にいなは山因幡又美濃と見え井蛙抄にもいなは山美濃因幡兩國に
 ありみのり稲葉と云所皆松あり とまゐりて今何れをよしとも定めがたけれ 實方朝
 臣が頃よりのちの歌人の多く此美濃のいなは山をよめり 藤原實方朝臣家集に小一條殿のする
 がにふみやりたるにかへりといせでたいいなはの山といへるに むすぶなるたやまの山もある
 物を何にいなはの峯にかくらむ と見えたるむすぶなる御山の山みみの地名をよみ合せたる
 かとも聞へ津守國基家集に 美濃の國へまかりきたるにある女の許にまかりていとまこひてた
 つにいふ事の侍らさりしかり まはしともなとかとめぬ不破の關いなはの山のいなはいねと
 や かへし 旅の空行へき君と知りぬれば なにかとめむ關の名たてに とよみしはまさしく
 美濃の稲葉山の歌なり 抑いなは山の歌の多にあれとこには美濃に確實なる縁由のある歌の
 みを撰出して猶又左にかへり 文和二年六月 後光嚴天皇美濃國池田郡白樺村小島の頓宮へ臨
 幸ありし時同年七月 二條關白基良公御跡より小島へ參着其節をのせられた
 る小島のくちすさひに 内裏 小島の行 宮をいふ の庭もさなから四面につくさてい
 なはの山も遠からぬ 又かへり とむ都のたのみならて の待事もなし 思ひ
 さや思ひぬよらぬ かりねして いなはの月を庭に見むとは 詞林意行集の印本に
 よらぬ かりね い な は の 月 を 庭 に 見 む とは いたもひきや思ひも
 庭にながめて と見えたり 藤川記 文明五年五月一條禪問兼良公美濃國 に 江 口 よ

のふねに乗て二里ばかり河傳ひにさかのほるいは山めふもととすぐる
 道也此山の奥州より金の化來せるよし稻葉社の縁起に有とかなみねに
 おふる松とはむるゑいなは山こかね花さく御代のさかへる早苗とるふも
 との小田にいそくなりそよくいなはのみねの秋風
 古城趾（山の上の北の方にありて天守臺の石垣）二入門（二ツ門）裏門（太鼓櫓）米藏
 井四（水ナリ）千疊敷の臺（厩）長屋等のおとのこれり
 歴代の城主の二階堂山城守藤原行政建仁年中はじめて城を築きて住めり分脈系譜
 に行政の參議乙麻呂（左大臣武智 麻呂四男）十四代の裔孫白尾三郎行遠の長男母の大宮司季範の妹なり鎌倉
 右大將家の政所執事にて從五位下山城守主計允また生毘沙門と號じけるよしとせりその次
 の城主伊賀守藤原朝光の大系圖武家評林の系圖等に鎮守府將軍秀郷の後胤刑部丞光郷の
 子にて伊賀守從五位上のち佐藤伊賀前司と稱し建保三年鎌倉に在りて九十四歳にて順死せしよし
 とるせり（濃陽志略名細記等に朝光を二階堂行政の子と見るよしあるはあやまりなるべし）その次伊賀式部太輔藤原光宗（伊賀前
 司朝光の二男なる故二郎左衛門尉とも稱す濃陽志略に朝光子次郎左衛門光宗相繼住子此で
 とるし名細記に稻葉二郎左衛門光宗朝光二男云云と見えたり關東評定傳の寛元二年
 評定衆のうち伊賀式部大夫藤原光宗法師（名）とあるし正嘉元年の同じ條に式部大夫藤原光

宗法師法名光西正月卒伊賀守朝光男任式部丞元仁元年六月坐事隱岐入道行西預之止政所
 執事所帶五十二ヶ所收公嘉祿元年免許所帶八ヶ所被返之正嘉元年正月廿三日卒年八十と
 見えたり（名細記に承久の頃鎌倉政所執事とかけりたるはあやまりなるべし）稲葉伊賀二郎左衛門尉光資朝光の
 三男にて光宗の弟なり名細記に元仁の頃居りしよしとるせり兄光宗も此人も苗字の上は稻
 葉を名乗りし稻葉山の城主なりし故なるべし佐々木直治何某土岐今峯何某など名のりし人と
 同じ例なりその後の城主二階堂出羽守行藤（名細記）に正元の頃に當城にすみて
 乾元元年卒しよしとるせり行藤の分脈系譜に山城守行政の二男圖書頭行村の孫備中守
 行有の長男にて從五位上出羽守左衛門尉正安三年八月出家し乾元元年八月廿七日卒五十七と
 見え關東評定傳の弘安五年同六年同七年の條引付衆のうち二階堂左衛門少尉藤原行藤云
 云とあるせり以上の城主數人のみな鎌倉將軍家の執事にて世に歴々たる高家なり齋藤
 帶刀左衛門藤原利永（濃陽志略に 利長とす）應永年中古城を修理して居住す是左大臣魚名公の裔孫
 齋藤越前守利政（土岐左京大夫 利益の執權也）の子にてのちに越前守と稱す此人神道を尊崇し稻葉神社の他地に
 ありしを今の所にうつし加納の天神の社を創建し又禪學に歸依して武儀郡谷口村の紛陽寺を建
 立す土岐持益の執權にて寛正元年四月廿七日卒（濃陽志略に 廿四日とす）法號を大功宗輔居士といふ齋藤系
 圖に利永文安二年乙巳八月築上加納城居之とあるは此城の事か又のこよりの出城

なるべし 其子 帶刀左衛門利藤の幼名四郎二郎のち越前守と稱す土岐美濃守成頼の執權にて退隱の後 持是院權大僧都法印大年あるひ 妙椿と號す河手の持是院のその隱居の地なり此人文學を好みよく歌をよみて 一條禪閣兼良公にもまたしく彼藤川記に美濃の國にむさし野の艸のゆかりをかこつへきゆるあるのみならず 高砂の松のゑる人なきふしもあらざればさみだれかみのかまきくらぬさきにとれもひたつ事有けり とあるされし 松の知る人とは此妙椿の事也 又東下野守常縁が家集に齋藤入道意念と贈答せし歌をのせ文明四年に當所因幡神社の縁起を書寫して寄進しあるひ 小島の口すさみの奥書に依持是院法印權大僧 見索 不省春蚓秋蛇之嘲 終書功矣 とあるしたるたぐひ風流にとみて雅人の名を得し事あけてかそへがたく 其上佛乘をも捨す主君成頼の菩提の爲に瑞龍寺を建立して悟溪和尚を招きて開山住持とし善業を修しけるこそ其ころ將軍義政ありて妙椿を征伐せむとせられしが和尚もとより將軍の歸依僧なれば左右方ヤウホウ和義をこひとのへしかば事故なかりけり文明十二年庚子二月廿二日病卒その位牌の瑞龍寺の中の開善院にあり其次 越前守利國トシクニ名細記に新四の妙椿僧都の猶子にて實の甥なり藤川記に川手の持是院にかくくだり候よしを告ぐ三位の大僧都妙椿すなりち來りて思ひよらざるよしをいふ云云齋藤新四郎利國 僧都の姪ながら猶子にせり云云 を見えたり 土岐成頼

政房二代の執權にて忠功あり故養父利藤の寵臣石丸立番利光武功あるにより職祿を進め齋藤の苗字をも授けて齋藤立番利光と名のらせ近郷舟田に住せ置けるが大守成頼の繼室逆意を企て成頼の前室のうめる嫡子政房を廢したのれがうめる四男元頼を惣領に立むと謀りけるに立番與して事を行んとす 明應三年利國大寶禪寺を建立し十二月十一日開堂の時立番はかつて利國を擊むとしけるが事ならずして隱謀發覺し舟田の合戦に及び同四年六月十四日立番利光が蘇合戦にうちまけ舟田を退き近江國に走りければ同年の秋政房家督をつき美濃の守護となり川手に在城す同五年四月立番利光その子利高等兵を發して近江より立歸り元頼を大將として城田地に屯す利國政房を援けて國中隣國の勢を催し立番利光等とたかひ終にうち勝ければ元頼利光等皆自殺す 同し年の冬利國軍兵を卒て近江國に打出蒲生左衛門大夫貞秀入道知閑と合戦し十二月七日蒲生郡日野の中野村のたかひにうちまけ利國以下戦死す法名持是院權大僧都法印一超妙純 江北記に明應二年九月廿三日環山寺殿佐佐木を持是院合力申濃州より御入國云云明應四年齋藤丹波石丸本苗爲合力南衆南近江蒲生罷立宮都合戦に失勝利一環山寺殿の多良へ御入人候十八日の間御座て頼而被對御本意一候明應五年に持是院南へ被取掛一候事の前齋藤丹波を合力の儀無念之由にて被掛候得とも失利無正躰一落居候樋口陣と申へ此時の事也 とあるしたるも日野合戦の事なり 利國の室の一條兼良公の女細姫なり利國戦死のち尼となり方縣郡小野村

に隱栖し天文七年八月三日八十二歳にて卒す。その子 齋藤左衛門尉利親の幼名を大納言といふ父利國とともに明應五年十二月七日近江の日野にて戦死年廿四法號權律師大猷紹興あるひの妙親とも號す。利親の弟又四郎利茂も當郡に住し十八歳にて天死法名悦岩信公といふ以上利藤利國利親の二代を濃陽志零に稻葉山の城主とし名細記に利藤利國の二代を上加納の城主とす。今按するに上加納は此地の南の方に並びたる地つゞきにて齋藤氏の領邑なれば稻葉山上加納の兩城とも主維したりし故かく二様にいひ傳へしなるべし。その子 新四郎利良幼名を勝千代といふ父利親戦死の時利良幼少なりければ一族白樫の城主長井藤左衛門利安の城にうつりて輔佐す土岐政房政頼二代の執權なり天文七年九月朔日病死法號禪隆寺あるひは持是院權大僧都法印岱宗妙全。齋藤山城守秀龍入道道三ははじめ京都の人にて法蓮坊といひし日蓮宗の僧なりしが還俗して松波庄五郎と名のり油を賣るを家業とすかくて美濃に來りて商賣しけるが土岐家の執權長井が家にきたしみて出入す庄五郎謠曲の乱舞をよくして風流の男なりければ長井藤左衛門利安あるひは長弘殊に愛してこれを吹擧し永正の末大守土岐政房に謁せしむ政房の嫡子政頼は庄五郎が奸佞にして逆謀を企るの相あるをしりて彼を近づけ給ふまじきよしかねて父に申しさめけるとぞかくて長井が家老西村三郎左衛門が遺跡を繼て名を西村勘九郎と改む主人藤左衛門長弘の行狀よろしからずと稱し享祿三年正月十三日勘九郎謀りて長弘夫婦を稻葉山にて弑殺す長井齋藤の二族等これを怒り

大勢を催し西村を攻撃ければ勘九郎竊に圍をのがれ出て政頼の弟頼藏の許に至りすくひをぞこひ頼みける頼藏詰ひ和談を盡むとし常在寺の住僧日蓮ははじめ勘九郎が法蓮坊たりし時の法眷なりければ彼僧に命せられれが扱ひして和儀といひぬさて長井豊後守利隆の養子となり長井新九郎利政と名のれり政頼もと山が新九郎が元道なるをに信みければ出仕を止めて昵近をゆるさず利政憤りて主君政頼を退け其弟頼藏を惣領にたてむ謀り急に革手の城を攻む政頼幕下士卒遠路の者など來らず小勢にて禦き得ず政頼城を退き越前國に走れり利政たもひのまゝに政頼を退け頼藏を土岐の惣領とし革手大桑等の城に居置其身の上加納の城より稻葉山の城にうつり齋藤左近大夫秀龍と名のりまた山城守と改む天文十一年大恩のある主君頼藏を追ひ退け美濃一國を奪ひて押領す隱居の後道三と號して鷲山の城に居り弘治三年四月廿日戦死す。あるひ山城の西の岡より來りて立身したりし道三の父にて永井豊後守といひし人なり豊後守死してのち其子利政のち道三と名のりしとまゝいへり其よし江濃記に齋藤家の家僕永井藤左衛門同豊後守等也豊後守の山城國西の岡より卒入して齋藤家に來り藤左衛門が與力と成て度々合戦に勞功をつみ永井豊後守と號して彼家の家僕となる齋藤の家督斷絶の時彼の家領を兩人して知行す其頃公方義尹と細川高國より齋藤をめされけるに上らざりければ公方より勢を向られ永正十七年に近江勢向ひける時革手の城のあまりに要害あしきとて稻葉山を取立是城となす其後藤

左衛門と豊後守と不和に成て豊後守の病死して其子山城守利政が代に成てやがて藤左衛門を討
 取齋藤を名乗り自ら美濃半國を知行し入道して道三と號す元祿の頃と見えたり又堂洞軍記らひし書也
 には齋藤山城守の其むかし都の傘張にてありしかあられ名ある侍にもなりなれと思ひ立清水寺
 の觀音に籠りて祈りけるに七日滿ける夜の夢に妻をよまへて傘はれとの御告ありければ急ぎ美
 濃に下り時の守護土岐時益にたより中間奉公よりしてかく立身せしよしとせり道三子七八
 人あり長男の一色左京大夫義龍實の土岐頼藝の胤子なりその次の右京亮始め勳九郎又孫四郎といふその弟玄蕃
始名喜平治の弟僧日曉岐早常在寺五世の住持其弟日覺同寺六世の住持也女子三人土岐七郎頼充室土岐八郎頼香室織田信長公
 室みな當城にて生まれし入りなり一色左京大夫義龍の秀龍の長子にて實の土岐頼藝
 の胤子なり繼父秀龍の家をつき美濃守護となり稻葉山に在城すのちに秀龍その實子右京亮を家
 嫡として義龍を退けむと謀りければ義龍叔父長井隼人佐とがたらひ計りて弟右京亮玄蕃二人を
 當城に招き日根野備中守に命じて殺さしむ道三大に怒り弘治元年の秋軍兵を發し長良川を隔て
 義龍と戦ひけるが道三打負退きて山縣郡北野城に居る同二年道三又城田より兵を催し四月十
 八日中波今の崇福寺の前のあたりにて川を隔て合戦す道三が兵利あらずして同廿日の暮方城
 田に落行く小牧源太長井忠左衛門林主水等追擊終に道三を討とりの義龍の永祿四年辛酉五月
 十一日卒年三十五辞世の偈あり三十餘年守護人天剎那一句佛祖不傳堂洞軍記には義龍父の

素姓のいやしきを愁へ居けるかある時めのどの告に土岐殿の落胤なる事を知りいかにもして實
 父の仇山城守を討とらむと思ひ立後見の日根野彌右衛門とがたらひ合せ時を得得て弟二人を殺
 害し道三入道をも亡しけるよしとせり彌右衛門のちに備中守弘就と名乗る幼名を徳太郎とい
 ひてはしめ道三仕へ後信長公秀吉公に仕ふ日根懸の鉢此人の作なり祖父を加賀守父を長左衛
 門と云弟彌次右衛門も又武功の士なりその子 齋藤右京大夫あるひの右 龍興の幼名
 を喜太郎といふ永祿四年家をつきて美濃守護となり當城に住す父義龍卒去のち織田信長軍兵
 を帥ひてこゝに押寄せ合戦し信長の兵多く戦死し和談をなす同七年また信長大軍を催し放火し
 て攻入けるが齋藤が宗徒不破河内守稻葉伊與守氏家常陸介安藤伊賀守等龍興の行狀あしきを疎
 みて信長に通す依之龍興たかひ得ず退きて近江に走り妻室の父淺井備前守長政に寄居し
 ち朝倉義景に屬して軍功あり天正元年癸酉八月十四日越前國刀禰山合戦に戦死して家断絶す其
 墓の越前の國足檜村にありて法號を瑞雲龍興居士といふ當町の常在寺にも位牌あり 搦尻に信
 長公古渡の城に在して或時毎夜北の方なる樓に上り久しくありての歸り給ふ御室の齋藤道三が
 女なりしがあやしみて問ひ給へともいこつましげ也いよ疑ひせめて問ひければ其時公ま
 ゆをひそめ努く此事がたく色にも出し給ふな齋藤の家老と謀ありて岐阜を亡し申なり彼家
 老等兼て主城を攻め必く火を擧ぐべし其時火を見て與力せんと約せし故今もや火の氣見ゆ

るかど伺ふなりとまことしやかにの給ふ御室むねなきしが打ぶつめあらぬ体なりしが翌日文
 かきてこましく告しかり龍興再聞に及ばずやがて家老等を有無なく殺したりありてのち信
 長公岐阜を心安く攻められしとなり其頃の夫婦の中にもかゝるたゞるしき事多かりしと考
 るせり 織田上總介平信長の永祿七年齋藤龍興を近江に追ひ退け九月尾張の清須より當
 城にうつり十三年のうち居住ありて天正四年二月近江の安土の城にうつらるると稻葉山の城と
 いひしを信長澤彦和尚と議り周の岐山の故事に據りて岐阜と改められし事安土創業録塩尻等に
 見えたり 美濃明細記附録に土岐齋藤織田三代軍記(一名美濃古記又濃陽諸士傳記とも云)
 引用して曰く山を岐山と云ひ里を岐阜と申すとい昔よりの儀なり明應より永正の頃までの舊記
 に多く見えたり往昔に加納を沓井吉田と申しさふを今泉忠節井ノ口と申ける信長岐阜入城の後
 沓井吉田を合せて加納と號し忠節今泉井ノ口早田を岐阜と定めけるさふと云ふとい古き名にし
 て信長の名つくる所に非ずと記し又明應年の頃の刊行せる少林無孔笛集(漆桶万里居士の文
 集にして一名梅花無盡藏集とも云ふ)の文中に岐阜岐山岐陽等の文字ありて證憑とするに足れ
 り然るときは安土創業録塩尻等の説信を置きがたし 信長の織田備後守 また彈正 忠と稱す 信秀
 の長男 公卿補任に故彈正忠信秀男と見え分 母の土田下總守源政久の女なり 名古屋 合戦記
 また塩尻等に御母儀の土田氏の女也と見えたり 雍州府志の陵墓門に花屋壽永尼塔在 大徳寺
 信長公、母公也と考ふるしたれど其姓氏をのせず 公卿補任織田真紀等に母の姓氏をのせざりし

の正しく傳へらざりし故なるへし 江源武鑑その外俗軍書大系圖等に母の六角 天文三年正月
 大膳大夫高頼の女とあるの定かならず何れも俗書にて實録にあらざればなり
 尾張の愛智郡那古野の城にて誕生し幼名を吉法師殿と申す 那古野の古城の駿河の今川家の特にて義元の弟 攻め取り同國勝頼の城よりうつりて在り信長其 城にて誕生ありよ一名古屋合戦記に見へたり 天文二十年の頃より上總介と稱しまた彈正忠とも名乗
 らる當城にうつられしのもち天正二年 三位の昇殿 ありし也公卿補任また公卿傳 名古屋 府の秘書
 りて天正二年甲戌三月十八日 任參議 年四十一 同日 叙從三位 公卿傳に前官位正四位 下彈正忠と見えたり
 と見え歴名士代にも平信長織田彈正忠從五位下より天正三年三月十八日昇殿せしよしと考ふるせり
 また公卿補任に同三年乙亥十一月四日 任權大納言 四十二 同七日 任右大將 陣宣公卿 傳に陣
 宣と見えたり以上は當城主の時の昇進なり同書に同四年丙子十一月十三日 叙正三位
 同廿二日 任内大臣 右大將如元公卿傳に 陣宣下 歳四十三 同五年丁巳十一月十六日 叙從二位
 十一月廿日 轉右大將如元 同六年戊寅正月六日 叙正三位 同四月九日 辭兩職
 とあるの安土にうつられし後の轉任なり 公卿傳に同十年六月二日爲明智光秀於洛陽本
 能寺自殺 年四十九 是日 勅贈太政大臣從一位 道號泰岩號天徳院 改惣見院 見えたり
 り 信長岐阜在城のうち永祿八年當國苗木の城主遠山勘太郎の娘を養女として甲斐の武田勝頼
 に嫁せしめ其のち信玄の女を嫡子信忠に継祖し同十年五月信長の女を岡崎三郎信康主の家室と
 し同年八月より伊勢國を攻撃同十二年二月北伊勢を攻從へ和睦ありて三男三七信孝を神戸藏人

が養子に遣ひし同年四月信長の妹を近江の淺井備前守長政に婚姻しまた義昭將軍御教書を賜ふによりて將軍を當國に迎へ七月廿七日西庄の立政寺に着陣ありければ廿九日に信長彼寺に至りて軍のもやうを議り九月七日岐阜を出陣きて近江に攻入り佐佐木承禎父子等を退治し十年義昭將軍宣下ありし時信長從五位下彈正忠に叙任し同十二年八月南伊勢を攻撃國司北畠と和談ありて二男茶筌丸信雄を國司の養子として十一月飯陣し元龜元年東照宮當城に來臨し給ひ信長と共に二月廿五日こゝを立給ひて都に登り信長正四位下に叙し兩將越前に發向し朝倉淺井等と合戦し六月廿八日姉川のたゝかひ勝利を得同年八月攝津國に出陣し三好か黨また大坂の本願寺と合戦し同十二月より朝倉淺井等とまはくたゝかひ同三年天正元年甲斐の武田信玄父子と合戦しまた義昭將軍別心をさしはさみ不快の事ありて三月七月兩度上京ありて合戦ありしか義昭降参し八月より朝倉淺井武田三好等とまはくたゝかひ又西尾張長島の一揆を退治し同二年三月南都東大寺の園奢待を勅許ありて舊例のとく一寸八分切取同三年十一月廿八日當城に尾張美濃を属けて嫡男信忠に譲り翌四年二月近江の安土山に城を築きてうつられし事實くはしく信長記

惣見記一名織田平記と云 織田真紀 安土創業錄 甲陽軍鑑 將軍家譜等にのせたり事繁くしてこゝにの萬ヶ一をだにしるし得すまして安土へわたましの後の事のことくこれを書す

從三位左近衛中將平信忠の信長公の嫡子にて幼名を奇妙丸また秋田城介と稱す弘治三

年尾張にて生れ永祿七年父に隨ひて當城にうつる幼年より智勇備はり折く軍功あり天正三年十一月廿八日父の讓りを受けて當城主となり美濃尾張を領す同十年六月二日京都本能寺にて父同時に自殺年二十六法號大雲院殿仙岩 織田侍從信孝の信忠の弟なり永祿十一年十一歳にて神戸藏人友盛の養子となり伊勢の神戸の城に住す天正十年父兄戰死のち當城主となり三年居住す幼名より三七といひし故世に織田三七信孝とのみ稱して無官の人と思へるのあやまりなりまさしく從五位下にて侍從に任したる人にて歷名土代に織田信孝從五位下天正五年十月七日侍從と見えたり織田軍記に永祿元年戊午一ヶ月の内に故大臣家二人の公達生れ給ふ先一人の三助殿信雄卿なり是も生駒氏の女の腹にて故三位中將殿と御同母にまします故に皆人は是を崇敬し御出生の事を早速故大臣家の台聽に達する故是を二男に相定められ訖ぬ 今二人の坂氏の娘の腹にて三七殿信孝なり此母儀凡下の人なる程に熱田の神司岡本が宅にて生れ給ふ信雄卿より信孝の廿余日先立て生れ給ふといへども元來母儀賤しき人なる故に即時に大臣家の御耳に達せず久しく披露する者なく遙に程經て後岡本が子太郎右衛門清洲に参りて此由を言上す故大臣家遅く聞召れしゆゑに其時是をば三男にと御定あり是に依て信孝常に鬱憤を挾み我大臣の二男たりといへども不幸にして信雄に越され三男と成りし事無念の最一なるものなりあられ變異もあれかし我信雄に指越すべしと思召れたる事久し云云としるせりかゝる鬱憤によりてかはげしく勇猛の氣象をなは

り父兄弑逆の變に遭れし時も丹羽長秀とばかりていちはやく明智が輩織田七兵衛信澄を討果し
 こよなき手柄なりしかども秀吉公をねみて其心ざしをはたさせざりしぞかし 祖父物語 に七
 兵衛殿と申へ織田勘十郎殿の惣領明智が爲に聲也大坂天王寺の千貫矢倉に居給へり信孝と長秀に
 て明智逆圖を七兵衛を太坂へ五郎左の玉造三七の京橋口乾の角矢倉に御座ます夜中に三七殿小性一
 人にて五郎左宅へ往給ひ七兵衛内々の支度の我と其方明日吊合戦に出る所を討取らむとの謀に
 て京橋へ人数を出したりと聞かひせんと言ふ五郎左其時奇特成御出哉只今我等參り候て御
 意を得べくと存候所也明日吊合戦に御出有らむと御人数を揃へ待給へ我鎮炮二ツ打べし其時采
 を御取千貫矢倉へ御掛り有るべし七兵衛か人数京橋へ出したるこそ幸ひなれ七兵衛身の廻りに
 は士二百ばかりあらむと申す案のどく翌日朝相圖の鉄炮五郎左二ツ打ければ三七どの采をとり
 千貫矢倉へ攻かけ即時に七兵衛が頭を取てサカイにさらされけり味方の者共信長の變に氣を失
 ひたる間先此首をさらし味方の勢に氣を付給はんか爲也とぞ申ける三七殿吊合戦に出給ひし時
 七兵衛が首を板に打付馬印のごとくして持せ給ふ池田勝入羽柴築前守是を見て御手柄と申御吉
 左右也定而明智力を落すべし明智子なし天下をり此人へ譲るべしと存すべし御手柄とてこと
 の外譽め奉ると見え 勢州四家記 に明智日向守光秀の信孝をうたため攻のほる所を羽柴
 築前守秀吉池田紀伊守信輝信孝の魁をせられ遂に明智を退治せり云云信雄信孝兄弟天下の争出

來依之信雄の尾州清須の城にうつり松ヶ島の城の津川玄蕃頭に預けられ信孝の濃州岐阜にうつ
 り神戸の城の小島兵部少輔に預けられ北方の押へとする也 天正記 の柴田
 田勝家と同時に秀吉公に攻られ終に當城を討取られぬ是を岐阜の大乱といふ 天正記 の柴田
 勝家滅亡の條に三七のふ孝一玄の詠哥をつらね たらちねの名をいきたさしあつさ弓いなば
 の山の露とさゆとも 彼山にて髪あらひ身を淨め焼香し將軍より下さるゝ所の太刀を以てみづ
 からくびをはねて死す云云 とあるし 豊鑑 には秀吉北國をりかく仕置て美濃國に至りぎふ
 の城をかこまる三七信孝の柴田を頼み給ひしに亡びにしかば草木の根をたれし様にて郎從ご
 も皆落うせ日頃めくみ深かりしもの計り残り留れり三介信雄尾張の勢を具して城をかこみ給ひ
 ぬ使をはしらかし尾張のかたに御座よとたばかり給へば城を出川舟に乗りて知多の宇津美に御
 座せしなり信雄のすさ中川勘右衛門主をつかひし自害し給へとありしかば兼てかくこそと思ひ
 してしてしづかに事ごもしたゝめ置手づから刀のやいばかき合自害ありけり と見えたり 天正
 記 に稻葉山にて自害ありしよしえたるは誤り也 豊鑑 のむねに従ふべし智多郡内海の

大御堂寺に墓ありて 惺窩文集 に 經織田信孝墓
 大御堂中持善寺 曾聞信孝避 雛來 寫懷歌詠思猶雅 辭別封書情欲
 摧 自割肝腸三尺刃 獨留骸骨一堆灰 行人今日問遺跡 竹雨

松風聲帯哀

池田紀伊守之助の垣の城主信輝入道勝入の長男なり。太閤記の天正十一年城主定の
ちに濃州大柿城池田紀伊守輝同岐阜之城同息勝九郎助と見えたり。信孝退城の後秀吉公の命に
よりて守れり翌十二年四月九日尾張の長久手の軍に戦死す年二十一。池田侍從輝政の信輝
入道の二男にて兄之助討死のち當城主となる。太閤記の秀吉公關白職の宣旨ありて參内せ
られし供奉の人々にも任官を賜ひしうちに岐阜侍從豊臣照政とあるは此人なり。甲申戰鬪記
寶曆十三年八月尾張の小牧の田中平左衛門が著作にて所に古傳の残りたるを掛したる寶錄なり。輝政は永祿七甲子十二月晦日小牧に於ひて一身の半を
生ず翌乙巳正月朔日に至りて全く安産す故に稚名を古新丸と云其時生年の論ありて子年にやせ
ん巳年にやせんと評議卒に不決して八幡宮へ御園を令乞則社司木全藤太夫子年の御園を取て
ぞ定めけるのち輝政備前を給て岡山に居住し玉ふ慶長十七壬子年輝政異例に依て氏神へ祈禱を
可致とて銀子十五枚小牧へ送らる小牧の長往古を不知して小牧神明の社司清洲新助へ遣す藤
太夫聞之實否を糾さむとて新助と共に備前に赴き互に事をいひ暮るといへとも眞偽不明の處
に岡山の中に老嫗二人あり其論を聞て言我小牧に在て御誕生の御忌日に御供仕て詣たる神社
よく覺えたり其神八幡宮にて小牧山の西北に當て南へ臺門有八月十五日競馬の神事有る御社
を殿の氏神にてましませと申にて藤太夫が申條に決せり其時の證文今に藤太夫所持す云云

とあるし。播磨國の池田家系勝入父子討死の事をいへる條に輝政手の兵散々に討なされ信輝
之助討るハ時一所にこそ討死すべけれど取て返す輝政の家人伴大膳其頃いまだ瓶の舍人な
りけるが唯一人追つきて馬の口にすがり引返して二鞭あつ輝政いかつてあつばれ不覺の奴かな
と云まゝに鎧の鼻にてかうべくだけよと蹴たり蹴られてちつともひるますや若殿こそ不覺なれ
とて片手に轡をまかと執て片手の鞭をあてはす馬の足すがに逸物也鞭のまきりにあてられぬ
飛が如くに馳行の輝政はらにすへかねてつゞけさまに蹴し程にかうべく蹴られて流る
血遍身朱に染れども猶はなちやらされぬ力及ばずして其場を退きぬかくて輝政岐阜を給ひ豊
臣の姓をゆるされ羽柴三左衛門尉と名乗る秀吉關白に任し給ひし時侍從にこそなされけれ天正
十八年の秋三河内吉田の城にうつる石を領す。太閤の御謀にて文祿三年九月徳川殿第三の御女輝
政の家に入らせ給慶長五年十一月播磨國を賜る石五十二同八年正月六日備前國を加へられ五十二
月十二日少將に進み十五年淡路國を加へらる石六万三千。十七年九月十七日上洛して參議に任し明る
十九年正月廿五日五十歳にて卒す。と見えたり。三好少將秀俊の長尾武藏守吉房入道三位
法印二路の子にて秀次關白の弟なり秀吉公の異父の弟秀長の養子となる祖父物語に美濃國少將
殿是の孫七殿三番目の御舍弟也利發にて太閤御秘藏に思召内々の養子になされ位を讓らむと
日頃の仰ける。とある人也天正十八年此城を賜ひて岐阜少將と稱す文祿元年高麗征伐の大軍に

従ひ肥前の名護屋の陣中此病卒す八岐尊中納言秀信の秋田城介信忠の子元信長公の嫡孫
 源幼名を三法師殿と申す文祿元年大岡の計りひかれて當城主となり十三万石餘を領す慶長五年
 の乱に石田三成に與力此城を守る八月廿三日關東の軍兵に攻落され秀信降参して城中を退
 き高野山に盤居し幾程なつて彼山にて卒去す其後慶長七年七月當城を壊して加納に移る三城
 郭すたれせのちまた七岐尊御山に稱心岐尊奉行の預りたて俗人などみだりに入る事を禁しめら
 る御山の四方の間敷大畧左の如し西の邊は九百八十間北の邊は二百六十七間東の邊は
 三百三十四間南の邊は千八百四十八間總計四千四百三十三間町敷に積りて七十三町四十
 三間其うち舊跡多し三赤川洞の麓の西北の方にはあり中納言秀信の別業の趾にて九
 山のあたりにまで廣く遊山おろし地なり千疊臺の赤川洞丸山の南にありむかひ城主の住み
 千疊臺の跡也榎谷の千疊臺のある所の谷に則御山西の麓にて下千疊敷といふ城主常
 の住所也平地廣く東の方に細き瀧ありもこの石垣の加納の城築時引移して今其形のみ残れ
 り七曲坂の革屋町より入る大手口なり坂路屈曲して多々まかれりよき名とす天正記
 には齋藤山城入道道三無道にしてとき殿の御子二人を篋にとりてくがひし又切腹させ其居
 城をのり取りけり誰やらかまをさりむをさるすのみをいふむかひしねた今山しる
 とといふ落書を七まがりに立しむとせむ古曲坂の山口町まのほる城の裏門口なり

其路險阻にしてまがりがめ甚多し坂の口に老松ありて手平松といふ源敬公名つけ給
 ひし名木なりしが享保年中枯はて今この植つきの若木也達智洞の天守臺の東南の方に
 ありて今の達目洞といふ中若日坊氏の火聖開して田畑とし子孫そこに住みて此御山を守り
 榎原岩文瑞龍寺山の麓ともいふ稻葉山の西南にあり慶長五年石田三成が家士榎原彦
 右衛門守りしが八月廿三日淺野右京大夫に攻破られて彦右衛門また其子内膳等戦死したる地
 也武藤峠の天守臺の南にありて武藤のぶらともいふは方角に武藤助十
 郎が守りし砦の跡なり落城の時助十郎砦を棄て逃亡す松田砦の武藤峠の西南にありて
 松田尾の松田矢倉ともいふ慶長五年松田十太夫守りしが八月廿三日の落城に戦死
 す此地また榎原砦の邊險峻にして高く木曾川をはじめ四方遠近の山川村里等見え渡り名古屋大
 垣桑名津島の渡りまで見えて絶景たぐひなし鷹巢山の達智洞の南の方にありて七曲峠の
 高根より辰の方に見ゆる南の方は陸奥の岩城領西に此金華山に属たる御領也むかし度々鷹をこ
 りて源敬公に獻りしといふ藤衛洞の七曲坂の下の南にあり津田藤右衛門尉が屋敷
 跡なり鏡岩の天守臺の北東の山下長良川の南岸にありむかしの石面鏡のごく光りしよし
 いへ今いさる光澤もなく只普通の大岩也其下川深くして水色藍の如し元和元年台徳院
 君其淵にて水遊さし給ひしといへり大坂御征伐終り御歸陣の時七月廿二日大樹君岐阜

に至り給ひ翌廿三日名古屋に入御のよし、慶長創業録、家忠日記追加等にまゐりたる時の御事なり、戦國のものも幾程なしとはいへど御勇猛の程たしはかり尊びへし、田氏文集島田忠臣の集なりに

過鵜沼

河源出處幾雀鬼、路次層盤望眼廻、短晷一朝行過電、長流萬里傍聞雷、嵐寒山業排紅壁、浪濺石林聳漆臺、惆悵老慵田別駕、年餘知命不看來

を作りし鵜沼の今の長良川にて浪濺石林聳漆臺といひ此鏡岩の光れるをいへるなるべし、岐阜道草、鏡岩といふあたりにものする程、箭の火かけうつりて岩のさまいとよく見ゆ、大館高門か、岩にうふねのか、りうつるより水底のみか山さへもてる、その外御山うちに、長尾、中尾、小山、十六峠、小椎峠、檜峠、馬酔木峠、淨立洞、からうと洞、觀音洞、笹洞、瓢谷、井戸谷、階子谷、尼谷、山楨谷、砂利谷、岩舟、岩穴、屏風岩、鼻高岩、切通、西條、東條、馬冷場、水之手、鞍懸、米藏、日野垣、など地名あり又、雨池、御手洗池、といふもあり、稻葉權現社、の南の山西の麓の高き所町よりの東の方にあり、祭神の五十瓊敷入彦命と日葉酢媛命、淳良斗媛命、物部神とを祀せ奉り、延喜神名式に厚見郡物部神社とまゐりし、美濃神名記に正一位伊奈波大神また

從五位下物部明神とある、此社の事也といふ、日本書紀に、垂仁天皇十五年秋八月壬午朔立日葉酢媛命爲皇后、云云皇后日葉酢命生三男二女、第一曰五十瓊敷命、第二曰大足彦尊、云云二十年春正月己未朔甲子天皇詔五十瓊敷命大足彦尊曰汝等各言情願之物也、兄王諮欲得弓矢、弟王諮欲得皇位、於是天皇詔之曰各宜隨情則弓矢賜五十瓊敷命、仍詔大足彦尊曰汝必繼朕位、と見え、同紀の二十九年十月の記の細註に、一云五十瓊敷皇子居干茅渚、菟砥河上、而喚鍛冶名河上、作大刀一千口、是時楯部倭文部神弓削部神矢作部大穴磯部泊羅部玉作部神刑部日置部大刀佩部並十箇品部賜五十瓊敷皇子其一千口大刀者藏于忍坂邑、然後從忍坂移之藏于石上神宮、是時神乞之言春日臣族名市河、令治、因以命市河、令治、是今物部首之始祖也、とまゐりて此五十瓊敷命、天帝より弓矢を賜ひ又鍛冶に命して多くの大刀を作らしめ給ひし故世に武神と仰かれ給ひて、延喜式にかく物部神社とまゐりたる物なるへしはじめに、椿原、といふ地にありしを、天文八年齋藤秀龍城と築く、時今の地に遷座なし奉るといへり、濃陽御行記に、いひかしの本社、北の方丸山に鎮座、峰、權現の天守臺の所に鎮座あり

しが土岐の家臣永井豊後守始めて城を築き時今の山に遷座す又前太平記に源國房城を推しとあり丸山の根に今深淵とありて御手洗と稱すむかしは七千貫の社領ありしと云々
 奈波神奉授從五位下依國司等解狀也とあるは三代實錄に大貞觀十一年七月五日戊子授美濃國從五位上伊奈波神正五位下類聚國史史同し元慶三年九月十六日戊申授美濃國正五位下否間神正五位上元慶四年十一月九日己未授美濃國正三位上板刻本三代實錄に正五位下伊那波神從四位下と見えたり
 其後の進位の古書に見えず美濃神名記と文永二年乙巳活洗二日從三位藤原朝臣經朝の書に當社の額に正一位とあるしたれば其以往に正一位まで進階ありしなり
 攝社 峰本宮峰權現と申す伊奈波神の御母日葉酢媛命を祭れり金大明神伊奈波神の御妃淳與斗媛命をまつる是景行天皇の皇女なり類聚國史又三代實錄に貞觀十一年十二月廿五日戊申授美濃國正六位上金神從五位下と見え美濃神名記に原見郡正三位金大神とあるしたる社なり當社本縁起に原見郡正三位金大神とあるしたる社なり金石の御縁起に原見郡正三位金大神とあるしたる社なり金石を伊奈波の神の本社と申す事古
 言傳にや前日本靈異記にも美乃國方縣郡水野郷補見村有一女人姓藤氏也年造三千廿有餘

歳不嫁未通而身懷妊運之三年山都天皇世延暦元年癸亥春二月下旬産生一石方丈五寸一色青白藤原色其育育年増長有比郡名曰淨見是郡部内有大神名曰伊奈婆託ト者言其産三石是我子因其女家内立忌籙而齋往古令來未都見聞是亦我聖朝奇異事矣ト者那支離可齋部
 往古ト見えたり山都天皇公祖武天皇御事ナリ古本行事に伊奈波神の御子市集雄命を祀る伊奈波神の御子母後御前なり高山の毛里倫滿の乳父毛里權守倫滿なり兒御前の伊奈波神の御子母の后御前なり曾祖路宮の當社本縁起に室后御前の母なり野々宮の倫滿の子毛里小次郎國滿なり曾祖路宮の當社本縁起にのせたる下筵博士なり八王子の當山の守護神なり惣社の本縁起に見えたる五十瓊敷命因幡國より歸路し給ひし時供奉せし五百余騎の兵を祀れり楯縫部倭文部弓削部矢作部大穴磯部泊檀部玉造部神刑部日置部大刀佩部の十神の御本書紀の二書また當社本縁起にのせたる伊奈波大神に縁あるみやつこの神なり
 社傳に齋藤道三また織田信長公より社領二百貫寄附ありし其證文累年の兵火に紛失也豊臣秀吉公檢地の時社領を沒收して傳へらすと云又濃陽志畧に則台徳公正妃崇源院太夫人者淺井備前守長政女也其母爲織田右丞姊長政自殺時信長姊逃來岐阜産一女是崇源院夫人也故以此祠爲生土神殊信仰之

屢賜^レ白銀^一と見えたり 例祭三月三日車樂二輛を出すむかし車樂二十四輛ありしといふ今廢れて此二輛のみ残り 神主 鹽谷氏 社僧 満願寺 當社本縁起の古寫本あり 修正者曰此縁起の伊奈波神社を務所にあり然れども兩部神道盛に行はるゝの時世本地垂跡の説を主として作り且其文冗長に亘れるを以てこゝには之をばふさぬ

岐阜御殿跡 山の下御屋町^{ウツキヤ}の裏にあり 慶長五年 大久保石見守 御殿をいとなみ 同七年東照宮 此地に成らせられし時當御殿へ入らせ給ひぬ 又元和元卯年 大坂御退治畢りて御凱陣の時 七月廿二日台徳院君も當所に至らせられ此御殿に入らせ給ひしとぞ其のち廢れて今の御殿なく惣構のかたちのみ残り其地を 北御屋敷 と云其南の方に 大久保石見守 が陣屋ありて 慶長五年の冬より十四年の間 そこにありしか石見守を御改易ありしのち 岡田將監御郡代 としてあづかりすみしとぞ其のち 元和五巳未年の秋尾張御領地 となり其時より 藤田民部支配 せりさて石見守將監等がすみし陣屋の地に新殿を御營建ありて名古屋御代への君上岐阜に成らせ給へる時御止宿遊のされしが其新殿も今の廢して南御屋敷とのみ呼べりそのうち 官舎 をいとなみ 御代官支配 たりしが 元祿八亥年六月 より 岐阜奉行 仰付られ町内御山等の所務をつかさどる 櫻井基佐宅址 西材木町にあり宗祇の門人にて連歌をよくし

和歌をよむ後宗祇と中あしくなり師弟を絶ちてこゝに來り住みしといふ和歌の家集一卷ありて 羣書類從 のうちに印行すみな京都にてよみし歌にて此地にてよみたる歌の一首もなし

蜂屋兵庫宅跡 蜂屋町 にあり兵庫のはしめ織田家に仕へのち豊臣太閤の臣となる 林甚右衛門宅址 甚右横町 にありて今の 普賢寺 となる 春日丹後守宅墟 中新町 にあり 齋藤玄蕃宅跡 革屋町 の南にあり 木造左衛門具康宅墟 矢島横町 の西にありてそこを 木造町 といふ今 蓮生寺 の境内となる 氏家常陸介入道卜全宅址 中矢島町 の西にありて今の 法華寺 となる 百百越前守安輝宅址 木造町 にありて今の 即徳寺 となる 梶川彌三郎宅墟 革屋町 の東にありて今の 常在寺 の境内となる其傍なる土橋を 梶川橋 といひ町裏の溝を 梶川堀 といへり 齋藤齋宮宅址 西材木町 の西の方にありて今の 眞光寺 の境内となる 美濃後藤宅址 上新町にあり彫物師なり 道與宅址 革屋町にあり詩繪師なり

の瑞泉寺に會集し書を妙心寺に呈して別傳の奸邪を數へ其籍を削らむ事を請ひ既に妙心寺第二座の籍を除き畢りぬ義龍理に伏して和を講し諸僧をして其寺々に還らしめしが別傳又密かに奸謀の事ありしかば諸僧再び退散せり於此義龍京都に詔へ將軍家に請ふて朝廷に奏し傳灯寺をして五山の列とし紫衣を下し給ふべき事を謀る永祿四年四月義龍が所請とく勅許ありて將軍家御教書をさへ草せしめ給ひし然處に五月義龍病死す依之繪旨御教書下し給ひらざりし義龍が家臣等相議し別傳が望を破り諸禪徒をなだめて各々其寺に還住せしむ此際織田信長稻葉山を攻給ひしに傳灯寺に放火の賊を隠し置事ありて齋藤氏の家人寺を圍て賊を求む故に別傳難をさけて出奔せしが一宗の惡を得て乞食の如く成りて其終る所を知らずと見へたるは此護國寺の事にあらざる早田の庚申堂東傳寺なり混すべからずはしく早田村の條にしるす 栽松寺 稻葉社の下北裏にありて同宗京都妙心寺の末寺なり 岐陽院 木挽町の北にあり萬松山と號し同宗長良の崇福寺の末寺なり 覺林寺 古屋敷にあり松久山と號し同宗上加納の瑞龍寺の末寺なり 片岡庵 同宗加納の光國寺の末寺なり 正法寺 山口横町にあり金峯山と號し堂内大佛の坐像を安置す其像四十五尺顔二十二尺耳七尺鼻高さ一尺二寸あり黃葉宗山城宇治の萬福寺の末寺なり 勝林寺 矢島横町にあり青岩山と號し曹洞宗尾張の三淵の正眼寺の末寺なり 本誓寺 矢島町下之切にあり易行山と

號し淨土宗鎮西派京都智恩院の末寺なり此寺の鐘はもと尾張の甚目寺の鐘なりしを信長公時の鐘にせんとて取寄られのち當寺に寄附ありしよし寺僧いひ傳へり 銘は尾州甚目寺推鐘諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂長錄二年戊子九月十七日大檀那竹田

勢阿彌
久阿彌
德阿彌
佛

法印園海

法圓寺

智恩院の末寺なり

誓願寺

稻葉社の下北側にあり大雄山と號し淨土宗西山派西莊村立

政寺の末寺なり

誓安寺

同所の南側にあり松龜山と號し同し宗西莊村立政寺の末寺なり

善澄寺

同所にありて普照山と號し同し宗西莊村立政寺の末寺なり

極樂寺

同所北側にあり法東山と號し同し

宗西莊村立政寺の末寺なり

大泉寺

白木町の東にあり本龍山と號し同し宗西莊村立政

寺の末寺なり

安樂寺

稻葉社の下北側にありて同し宗西莊村立政寺の末寺なり

寺

下笹土居町にあり大功山舍利院と號し淨土真宗京都東本願寺の直末なり 濃陽志畧

に寺僧傳云慶長中住僧某受東照神祖寵遇賜佛舍利三顆唐磁香爐及制札慶長五年關原之役東軍奏捷時神祖賜名大功山云と見へたり當寺に信長の賜ひし證狀あり其文左の如し 貴坊

儀者爲清和天皇之直傳多田滿仲之末孫依爲當國之舊蹟今度斷宗追院之障聊無之候間可被心易候其外郡中五十年以來之新地坊主共當月十五日來月迄從其方悉可令追拂候若及異儀敵對候者急度可令成敗者也依下知如件 二月八日 信長 書判 濃州厚見郡井之口善行寺 即得寺 木造町にありて同じ宗京都西本願寺直末なり 淨安寺 蜂屋横町の北にありて同じ宗同じ直末なり 普賢寺 甚右横町にありて同じ宗同じ直末なり 法運寺 西材木町の西にありて同じ宗同じ直末なり 蓮生寺 木造町にありて同じ宗同じ直末なり 眞光寺 西材木町の西の方にありて同じ宗名古屋の聖徳寺の末寺なり 法華寺 島町の西にあり啓運山と號し日蓮宗京都本國寺の末寺なりもと 尾張の清須にありて織田家の祈願所なりとせ 永祿年中信長公此地にうつし 八ッ椀作りの堂を建らる公安土へ移られしのち住僧日陽ある日遊清須に歸り此地の寺を通ひ所とす日陽が又清須に建し寺の今名古屋にうつりて法華寺町の法華寺なり 妙照寺 革屋町の東にあり三光山と號し同じ宗京都妙顯寺末寺なり 常在寺 同所にありて鷲林山と號し同じ宗京都妙覺寺の末寺也此寺に 齋藤道三 一色義龍父子 の 畫像 あり 又賤小手卷に常在寺の什物齋藤道三が書狀をのせたる左の如し 雖未申承候以書之次啓走候家來の者那古

野往へ還付而種々御馳走之由候誠不寄存知子細快然候自今以後切々可申述事本望に候際弓廿張進之候聊爾之儀候恐々謹言 四月七日 佐々隼人佐殿 道三 書判 美濃名細記に 當寺の寶徳二 明徳元 年庚午土岐家之長臣齋藤利藤建立開山僧日範二世の日審 なる山號の額 一條禪閣の御筆 なるよしあるせりまた文殊村にありし文殊の古像も此寺にありといふ 現正寺 中矢島町の西にありて興隆山と號し京都妙顯寺の末寺なり 長照寺 も同所にありて法光山と號し同じ宗京都妙顯寺の末寺なり 阿彌陀堂 稻葉社の下にあり 天正 の頃 信長公信濃の善光寺如來 をここに 遷し堂閣と建立 ありしが 薨去 の後 豊臣太閤如來 を 京都に遷し大佛殿 のうちに 安置 せられしかば 當所の 善光寺の堂宇 ハ廢頽し其跡に 小堂一字とたて 如來堂 また 善光寺大門 と喚べりのち 大佛 に安置の如來元の如く 信濃の善光寺に歸されしとぞ 十王堂 同し所にあり 藥師堂 同所滿願寺の傍にあり 土産 の 鮎鮓 を第一とすあゆり我國の古書に 細鱗魚 また 年魚 ともかき 外國の書にも 香魚 あるひり 溪鱸 などかける魚にて 鮎 の字を用ふるのあやまりなりされども 鮎 を あゆ とよむ事千年以往よりの傳習なれば今遽に改めがた

し 天正年中國守土岐氏長良川の年魚にて鮎アサギを製りて遠く公候に
 送りし是岐阜鮎アサギのはじめなりといふ 元和のはじめより將軍家に獻り
 そめ 源敬公此地御拜領 あらせられしもの 御家より 御献上の定
 式 となり 毎年中夏より 中秋の末までに 東海道宿次をもて 江戸
 へ十九びの御進獻 なり 小鮎アサギの初夏の頃の 若鮎アサギにて作りて 獻らせ
 給ふ 當町古屋敷に 御鮎所といへるありて 河崎氏の人代く其事をつ
 かさざる 香魚アサギ鮎アサギ 年魚の賜また子をとりて鹽に藏めて四方にうる 長良川の年魚の天
 下第一の名物なりと松平秀雲いへり 酒の長良川の水にて醸す其水清冽なる 故酒味醇厚
 他製に勝れり諸國に岐阜酒と稱して賞美す 信長公の時 大野祐和といふ者よく酒
 をつくる其子孫今に酒造家とす 又河村若挾といふ者もよく製醸す其造れる酒品くあ
 りて名を異にすこの名物なり 酢の性美はげしく久しく日をへて味變せず他所の製に超
 たり 枝柿の本草綱目にいへる 柿餅なり 天正年中信濃の善光寺よ
 り 神部道屋といふ者こゝに來り中新町のあたりに住みしが 或時伊勢に參宮し
 神前にて 頭巾一ツと枝柿三ツ 拾ひ得て下向す 翌年 ばじめて 乾柿を製し
 試けるに 桑名城主本多忠勝主 是を賞斷し 將軍家に獻進ありしとぞそれより

岐阜の名産 となると里老いひつたへたりも當國の柿の上品なれば味きのめてよし
 乾糖葡萄の長良近邊の諸邑に産する大根の細長く味美し村々にても岐阜にてもほし乾かし
 諸方へうるついにこの名物となる 刀劔の織田信長 尾張の清須より當國に移ら
 れ鍛冶數人を尾張また當國の關より呼び寄せ刀劔を作らせられし 兼道 成道 大道
 金高 兼高 等子孫今にありて代々刀劔をつくる 剪裁刀 鍛冶數家皆製造有
 宗利 最好 濃陽志畧に見へたり 剃刀の信長公の時治工 兼船製造
 す子孫今に傳へて名を 宗船と改む 鋸の織田信長の時 坪内といふ者 永
 祿八年 岐阜に來りすみてはしめて 鋸をつくる子孫今に傳へて 南方と號す
 尾張名古屋古渡の 鋸工南方の 足利義教將軍富士御覽の時熱田の旅館にて
 鋸を牽りければ なんほうよまきけぬき也と仰られしより南方と名のりしよし 摺尻に
 ざるせりとの南方も其餘流なるべし 剪刀の濃陽志畧に 成道者最好と見えたり
 眼藥の同書に織田信長命尾州馬島大智坊律師尊範 移居岐阜爾後子孫相繼爲
 眼科專門家四方患眼者輻湊滿門とあるせり 保童圓の同書に織田信長命尾州津
 島堀田仙意者移居岐阜爲小兒科調合保童圓之四方其家至今有之と見えたり
 赤龍丹の同書に今川家所傳方劑也而今川伊豆守者客食于岐阜黃門家岐阜城陷後

流落三州其子一庵再來岐阜調合赤龍丹之四方子孫至今有之遠近賞之とあるせり俗に今川赤龍丹を稱す薄絹の俗にすし絹といひて性よき生絹也慶長年中北伊勢長島の川内村の人加藤氏太田氏伊藤氏三人の一族當地に引移りはじめて薄絹を織出し諸國にうるそれよりすし絹を以岐阜の名産とす近ごろの紗綾縮緬綾錦に至るまでも織出して京都大坂などへ送る藤原明衡の新猿樂記に美濃八丈と見え庭訓往來に尾張八丈とあるしたる如く長絹八丈絹を長絹といふ丈絹を短絹とするより古書に見たりかしより美濃尾張の名産にて尾張の海西郡の村より又其隣邑伊勢の長島のあたりにて専ら織りし故今も八丈氏といふもの其邊に住めり其織工ともが中むかしの頃こゝにうつりて織をめしよしいへりされども美濃絹の往古よりの産物にてもとより當國より出せる品なれば伊勢尾張よりうつりてこゝの名産なりしといひかたかるべしその美濃絹の事をかきたるの園太曆貞和四年十月廿七日の記東宮御元服事に下内藏寮請奏先例美濃國廣絹解文續日本紀に養老三

年五月辛亥制定諸國貢調短絹挾絶魚挾絹美濃挾絶之法各長六丈濶一尺九寸天平十二年正月甲午賜勅海郡王美濃絶三十疋副使已珍葉美濃絶二十疋と見え廣絹も出せり新撰六帖にはた爲家朝臣山みちやみのひろさぬたるはたのたよひくるしき戀もする哉と見たり山みちとい東山道の事なり南都東大寺所藏の古證文天曆四年十二月廿日都維那法師の文書に

美濃國錢九十壹貫七百六文調絹廿八疋二丈二尺五寸云云とあるし宇津保物語の藤原君の巻に大臣の位をかへし奉りて美濃國給ひたりし人のたほきなる衣笠ふたつにうるはしきさぬたみわたなきいれて是の給れる國の物なりとてあて宮へさしげられしよし見たりその外延喜式等にえるせる甚多し油胡麻荏菜種綿實等にてしぼる團扇岐阜うちはと稱す破魔弓破子板菖蒲刀檜笠指足袋その外竹皮細工の物等あげて盡しがたし薪より當所に薪座といふ者を置れ船木商賣を免許ありし其時の證狀左のごとし當所船木之事如前々爲三十二人之者一可令賣買並下川下候船木一切令停止訖新規諸役等免除之事不可有相違者也天正九年極月十九日織田信忠判今度船木商賣之儀拾貳人被仰付御判被下候然殿様は上木千本木五拾宛末代進上可申候商賣之儀任御判之旨一切不可有相違之次孫一拾貳人之内之可被入由心得終左候得の拾三人分に候也天正九年十二月廿二日船木拾貳人え氏菅七郎判市濃陽御行記に南口の御園に市立あり今の加納領なり西口の岩倉町と云市立あり今の川を隔て早田村の内なり北口の中河原と云市立あり此三所に市神積あり中河原に有りし天文年中の洪水に流れしとぞと見えたり

岐阜城懷古

木下實聞

殘壘荒隍積水阿、運傾後主若悲何、雲霞偏訝降幡下、山谷猶餘折戟
多、臺廢千門空石礎、阪回百曲醫藤蘿、晚風忽起松濤湧、絶似昔年
奏凱歌

と日本詩選に見たり

今泉村 岐阜の属邑にて町の南のついきなり 尾張御領 千三十石八斗一升 濃陽志畧

に八千五十六石五斗六升六合とあり 布屋町 七軒町 大田町 岐阜よりついきの町家なり 美

江寺 天台宗にて大日山觀昌院と号す 本尊十一面觀音 伊賀國名張

郡坐光寺にありと 養老元年六月 本巢郡十六條村にうつし 伽藍を建立し

勤操和尚を開山とし 勅願所 となし給へり 當國守笠朝臣麻呂の時にて彼朝臣の發願にて創建ありなるべし かくて 中納言

定家卿舟木の山莊にありて日毎に此寺にまうて左兵衛尉則重といふ人に

命して堂宇の修補を加へ 殊に十六條一村を 寺領に寄附ありと故十六

條と船木莊美江寺村と號す 美濃守源國房 莊園を寄附し其裔孫 土岐氏代

々當國に在りて當寺を崇敬し 土岐賴員齋田村と寄進す 左京大夫持益の文明

二年二月當寺にて 剃髮し 法名を 道堅 と號す 梅華無尽藏 に明應

五稔本堂上尊化縁序美濃州本巢郡船木郷十六條大日山船積寺 江寺 伏惟觀自在菩薩者往古之

正法明如來或曰法性如來也爲化度羣生現三十三身而影向微塵刹土定一切功德慈眼觀視
衆生開拔苦之花結與樂之果冀以當山之本尊十一面薩埵彼分身之二而善光精舍之彌陀同弘
其化件件之威神力詳見千緣起故不及枚舉とある其頃の修造上尊の文なりまた 土
岐美濃守成頼 永正二年和田佐渡守に命じて美江寺の諸堂を修補し塔頭廿
四院を再興すと云ふ そのうち 天文十一年和田將監が家滅亡し他國の賊徒美江
寺に屯し集る永祿年中義龍これを退治し寺もまた破壊したりしを 信長公の時彼本尊と
此地にうつし堂宇を建立して舊の號と呼べり 本巢郡美江寺驛の舊地今の權
現の社地となる 藤川記 に美江寺といふのかいしまより五十町はかりを隔てたるといへ
る本尊の十一面觀音斗帳などのうちにもまします打あらはれて人にたがまれさせ給ふ利生を
かうふるものをくごなん往來のたよりに二たびまうて禮物をいたす縁起なごくはしく尋
ぬるに違まあらず たのもしな佛の人に見え寺のこぼりをたれぬちかひ思へば と見えてもど
の寺にてのあらに安置したりしよしなれど今の斗帳をたれ三十二年目に一度づゝ開帳ありと
なん例年正月晦日寺の門前に車二輛をかざり車上に兒子獅子などを置て田樂を奏す又田植田耕
等の俳優をなして 修正會 と名づく此式往古ありて中絶せしを 文祿年中今泉氏の
人再興して今に退轉なし 寺領十石 慶長十五年庚戌八月大久保石見守の證狀

今にあり 美濃三十三所第十八番の札所なり 土御門宮内卿の歌に みね寺の入相告るか
 ねの音に寐ぐらあらそふ聲の一むら とあるを 美濃九景集 といふ物につらねて 三三
 晚鐘 と題をつけたり 本覺寺 實徳山と號し曹洞宗尾張の三淵村正眼寺の末寺なり
 西本坊 淨土眞宗西派本山の懸所にて 慶長八卯年本願寺十二世准如上人
 の開基 なり寺號なく俗に西御堂と稱し境内に 願正寺 ありて寺務を掌る觸下の末寺
 二百余寺あり 一切經藏 竹屋町の横山七衛門俳名嶺秀軒一松西本坊の境内に建立せしよ
 し 函部孝子傳 の跋に見えたり 圓經寺 三融山といひて日蓮宗京都本國寺の末寺な
 り 一柳氏宅跡 西本坊の境内の地なり伊豫國河野刑部太輔越智通直の子太郎右衛門宣
 高あるひは通直 當國に移り土岐頼藝に屬すかくて鞠を蹴る庭のかゝりの許にて頼藝の命をうけ苗
 字を改め一柳とし刑部太輔と名のれり あるひは從五位下 方縣郡のうち乗竹村厚見郡のうち日
 野村今泉村合て 三百貫 の地を領してこゝに居り頼藝大桑退去の後池田郡に移るといふ
 卒去の年月定かならず法名淨伯と號す其子 一柳又右衛門直高 一色義龍齋藤龍興ま
 た織田信長に仕へてこゝに住めり 天正八庚辰年七月十日死去歳六十二法號香林宗梅その子
 伊豆守直末 始名 當所に生れ織田信忠豊臣秀吉に仕ふくはしく大垣の條にしろす直末の弟
 監物直盛 從五位下始名 當地に生れ秀吉に仕ふ天正十八年尾張の葉栗郡黒田の城にうつ

り 三万五千石 を領す あるひは天正八庚辰年當國經海より尾張の黒田にうつり本知三万石に五千石加増ありといへり 慶長五年東照宮に
 從ひ奉り戦功ありて 一万五千石 を加へ賜ひ伊勢の神戸の城にうつるのち伊豫の小松に
 移り 六万八千石 を領す 直高の 加藤遠江守光泰の室なり直盛の嫡男丹後
 守直重 三万石 を領す其子監物直興 伊豫四條 故ありて領知を沒收せられ加賀に御預とな
 りのち召出されて 七千石 を賜ふ直盛の二男美作守直家の播磨の小野の領主の祖 三男藏
 人直頼の伊豫の小松の領主の祖にてともに諸侯に列して繁榮す 當村八梅天神の一柳氏の産土
 神にて小野侯小松侯等關東往還の時使をもて奉幣ありその社の東南の陸田を監物誕生の地とい
 ふ宅を西本坊の地とせし慶長七年なり 加藤遠江守光泰 今泉村のこち橋瓜より出て
 はじめの作内と名のり信長秀吉に仕へて軍功あり天正の中末の頃大垣に在城しのち甲斐の谷村
 に移り 二十四万石 を領し文祿二癸巳年朝鮮にたゐて卒す法号曹源院その位牌の乙津寺
 にありその子左衛門尉貞泰の事の方縣郡黒野村の條にしるす ありひの一柳監物直盛の弟法泉
 坊を光泰養育して加藤圖書と名づけ今泉に住しよし 名細記 に見えたり
 小 熊 村 今泉の東南に並ひて岐阜の屬邑也 同御領 百四十八石一斗 郷帳高附に
 大寶寺 臨濟山といひて臨濟宗京都妙心寺の末寺なり 明應三年齋藤新四郎
 利國建立 十二月十一日開 して悟溪和尚を開基とす 瀧州志略には興宗和尚を開基とす 船田前記 に 明

應甲寅冬今持是院公性僧都勅大寶精刹於州之吉田村延瑞龍悟溪禪師爲開山焉特消蠟月十一日尼開堂之儀僧都預於九日味草將行視之大風俄起而雲蜚颺西尾直教叩馬曰今日之行不可也僧都領之次早欲更行天氣彌惡竟不行也石丸利光竊闖其行欲道害之而不能也內自悔怒其夕起兵於舟田欲襲加納伐之云云とある其時の事なりもと郡上郡吉田村にありしを後年この地にうつしなり梅華無盡藏にのする當寺の鐘銘に濃州路郡上郡下田郷吉田村臨濟山大寶寺僧堂前鐘銘叙惟開山祖迺悟溪大和尚伏以榮檀迺持是院權少僧都今茲甲寅之秋云云と見えたり甲寅の明應三年なり境内四至各四町織田信孝池田輝政中納言秀信大久保石見守等の證狀あり書畫一覽に泰秀名宗韓興宗宗松法嗣後住濃州大寶寺天文中叙と見えたり塔頭二區ありて瑞峯院長慶菴といふ慈恩寺の景德山といひて臨濟宗栗野村大龍寺の末寺なり東本坊の淨土眞宗東派本山の懸所にて俗に東御堂と稱す寺号なく境内なる上宮寺願誓寺ともに寺務をつかさどり觸下の末寺七拾余ヶ寺あり慶長年中御旗本坪内氏新加納に建立したりしをのち今の所にうつせり淨土寺の田中山といひて淨土眞宗東派の内陣一家京都本山の眞末寺なり地藏堂の町内にあり信長公の

時 葉栗郡小熊村 よりこゝにうつして小熊の地藏と稱す古佛なりこゝを 小熊村

と名づけし此地藏 より呼びそめしなるべし

古屋敷新田 岐阜の屬邑にて町の東北山の下にあり岐阜城主の家士等が屋敷の跡を畑に墾りたる地ゆゑかく名づけしとぞ 尾張御領 十四町二反十八歩 の地なり

忠節村 岐阜の屬邑にて町の西のつゝきなり 濃陽志畧 に里老傳云昔織田右丞居岐阜征伐四方以下死千事者子孫養育千此名曰忠節町是古代旌表之意乃岐阜西口也 と見えたり

同御領 百七十七石八斗六升六合 中渡廢跡 むかしの長良川の筋岐阜山の西北を東より西へ流れ早田村の裏を通り崇福寺領の界を繞り流る此所に中渡りあり是岐阜通路の舟渡り也其後洪水にて中渡り川口の所を押ぬき鷺山村正木村の方へ川筋つきて早田の裏の方と二瀬となり渡し場廢すと 岐阜舊記 に見えたり 俗軍書ごもに長良川の中の渡りとせるむかしの舟渡りなり

中河原新田 岐阜の屬邑にて町の北の方にあり 同御領 一町五反七畝八歩 の地なり

明屋敷村 岐阜の屬邑にて忠節の北東に並へり 濃陽志畧 に是古城治盛時諸士宅址今皆開墾呼曰明屋敷散在城阜巷陌中と見えたり 同御領 二十五石五斗六升五合 井

口近江守直頼 の 土岐系圖 に 彈正少弼頼遠の末男にて厚見郡住と見えたり今の
岐阜舊名井口 なればそのあたりに 住みし人なるへけれど今知りがたし明屋敷といふ名に
すがりて此所に住みし人かとも思はるれぬまばらくしるすのみ猶考ふべし

新撰美濃志十六之卷

尾張文園岡田 啓編輯

美濃簡齋神谷道一修正

厚見郡下

加

納 の 岐阜の一里南にありて東山道の宿驛なり西の方合渡へ一里半東
の方鶺沼へ四里十町 町の長十八町程ありて賑はしき城下なり 此地にも
と沓井吉田といひしを信長岐阜の城へ入られし後加納と改められしよしへりされども加納と
いふ名の諸國に例多くすでに吾妻鏡文治六年四月十九日の條に美濃國推加納と見へ神風抄に美
濃國推加納七十六丁
三段余とあるせり椎ツヅの今この川の名にのこれり 下加納 の 九百三十三
石三斗四升の地なり 城 の 町の南にあり文安二乙巳年八月 齋藤左衛門尉利長ある
利此沓井郷に築き革手の城のおさへとし子孫繼て居住し あるひの家老などに
も守らせ又長井豊後守も城主たりしが天文の頃より斷絶廢城となりしを關ヶ原御陣の後慶長六
年慶長創業録には七年七月朔日濃州加納の城普請
始あり是岐阜の城を彼地に移し給ふとせり 東照宮岐阜の城を廢して當城を築き給ひ

或の方縣郡黒野の城 **奥平美作守信昌** はじめの名は九八郎貞昌長祿合戦の戦功に賜ひしを移すともいへり により信長の一字を賜り信昌と改む

かば上野の國宮崎よりうつり八万石の御加増を得て十萬石を領知す 藩翰譜に慶長六年二月美濃國加納の城を賜ふてうつる此時十萬石を領す岐阜の城を移し築かる當家天下をまろしめして

第二番目に築かれし所の城なりとあり **室は東照宮の御女龜姫君と申す** 寛永二乙巳年五月廿七日卒法號 **信昌** 元和元年乙卯三月十四日 あるひは三月四日卒法名を久昌院殿前作州大守泰雲道安大禪定門盛徳院殿 號し其墓久昌山盛徳寺にあり **松平攝津守忠昌** あるひは忠政 美作守信昌の三男母は龜姫君 東照宮の御女號加納殿 松平の御號また台徳院殿の御諱の一字を賜ひ信昌の隠居領加納十萬石を相續す **兄大膳大夫家昌** 從四位下待從幼名九八郎 信昌の家督をうけて下野の宇都宮の城主なり忠昌始め忠七郎と稱し管沼大膳定廣の養子となりて小大膳定利と名のり三河國設樂郡田峯の龍の城に住しよし三河國二葉松にまゐるせりのち上野の吉井にありしが慶長七年父の隠居領を繼て當城にうつり同十九年十月二日卒す年三十法號光國院雄山宗英 職府政事録に慶長十九年十月六日 大坂冬 松平攝津守自去朔日 御陣 俄腹痛翌日二日午刻死去之由上野介 本言 上仰曰加納人數舍弟勢州龜山城主松平下總守清正召連大坂可參向之由被仰出父作州定可爲 多 愁傷加納能可相守之由被仰付 と見へたりその子 **飛驒守忠隆** 家督を續き元和元年より在城し寛永九年正月五日卒年二十五法名實相院大林宗功嗣子なくして家名斷絶す 諸家没収記といふ物に飛驒守勝松平左京樂加納十萬石寛永五年三月二日右無三男子一跡式

浪とあるはいかかあるらむ年月等たがへり **大久保加賀守忠秀** あるひは忠職 寛永九年壬申相摸の小田原よりうつりて五萬石を領同し十六年 あるひは 播磨の明石に轉し二萬石を加へ賜ふ **松平丹波守光重** 播磨の明石より 寛永十六年當城にうつりて七萬石を領し寛文八年卒 其子 **丹波守光永** 寛文八年九月より城主となり弟戸田孫十郎光澄戸田孫七郎光賢へ五萬石つゝ配分し殘る六萬石を領知す その子 **丹波守光熙** 寶永二年より城主となり六萬石を領し同八年山城の淀にうつる **安藤對馬守信友** 初名右京亮從四位下侍從 寶永八年備中國松山より移り六萬五千石を領す **同對馬守信尹** 初名右京亮從四位下侍從 寶永八年備中國松山より移り六萬五千石を領す **同對馬守信成** 初名勝藏 寶曆五乙亥年二月家督し同六年陸奥の岩城平享保十七年より城主となり六萬石を領す寶曆五年二月五日隱居す 泰平年表に寶曆五年二月四日安藤對馬守信尹 濹州加納六身持放蕩其上家來仕置依三不埒一隱居被仰付嫡子勝藏わ五萬石賜家來大勢死罪追放等被仰付 **同對馬守信成** 初名勝藏 寶曆五乙亥年二月家督し同六年陸奥の岩城平にうつり五萬石を領知す **永井伊賀守直陳** 寶曆六丙子年武藏の岩槻より うつりて三萬二千石を領す 其子 **伊賀守直備** 家嗣ぎそれよりうつりて いさだ くの居城となる

天満宮社 の宿内にあり文安年中齋藤帶刀左衛門尉利永の建立なり齋藤富樫井口などの輩のみな菅神を氏神と崇敬し梅鉢を家の紋とすさるにより齋藤の一族がすみし地には必天神の社を勸請して祀れり此社も其一所なり

盛徳寺 の町内にありて久昌山と號し臨濟宗京都妙心寺の派下なりはじめ増瑞寺といひて奥

平家の菩提所なりしを慶長八年あるは六年上野國より此地にうつし元和元年三月十四日信昌卒去ありしかば當寺に葬め又其室加納殿の墓をも築きて香花の地とす承應三甲午年今の寺號に改む山號の信昌の法名に據り寺號の室家の法名によれり泰平年表に永祿三年三月十八日龜姫若生御母の今川治部太輔養女實の關口刑部少輔氏廣の娘築山殿と稱すとあり崇廟祭名錄に盛徳院殿香林慈雲大姉神祖御長女與平大膳大夫信昌室寛永二年五月廿七日加納盛徳寺と見えたり久蓮寺の曹洞宗の古刹なり因果物語に濃州加納久雲寺に何とも無く鶏二ツ来る十日程過兒島平太夫來て是を見て住持に此鶏の何方より参りたるやと問住持知すと仰せければ扱の我等が鶏也十日以前に夕去の料理にすべしと云しかの其儘逃たりと云住持これを見て扱の宥し給へと仰せけるを尤也と請合ければ其儘平太夫より先に鶏二ツともに家に販るなりとまゐるせり寛永の頃の事なり良善寺の淨土宗にて前城主安藤家の菩提寺なり光國寺の當城主永井家の菩提所なり

往來松の町の西南にあり前の城主松平丹波守光永朝臣これを愛してゆきの松と名づけられしが子息丹波守光熙寶永の末山城の淀にうつられしもの彼地にて陪從人あけられながめし松を故郷の人の往來の便りにぞきとよみけれの靈元院法皇きこしめし寂感ましくけるより名木となりて世の人もてはやせりさて其歌の類題にのせたり其頃の公卿殿上人以下名高

き御かたこの此松を賞して詩歌を作られし一卷ありて往來の松の詠と名づく其序に濃州加納有二株老松樹一身大四圍餘腰高五尺計而三分東南南亭々立地上可二七八丈一也元祿六癸酉年三四月之頃前城主松平丹州刺史藤原朝臣光永遊觀之日名往來松爾後武者小路參議右近衛權中將藤原朝臣有勅旅野之下州日光山之時始有詠六條參議右近衛權中將源朝臣亦有和歌有森氏某者予未レ面然使水田長隣需詩歌於予辭不レ免因漫賦之與之

冷泉正二位中納言藤原爲經卿

蒼垂三面舊髯叟幾歲盤回秋復春想像濃州加納地送迎日日往來人武者小路從二位中納言藤原實蔭卿あかすみし誰通路の松ひとさわきてゆきとの名とどめけむとかきそめ詩七篇和歌六十首を撰みのせたり森永孝俗稱七左衛門加納の人假名序また水田長隣不遠齋と號す京都の人のかける跋あり實蔭卿の歌の題林抄にもものせたりこの松寶曆の頃枯果て今の植繼の若木なり

六條村 下加納の南西にあり 加納領 千五百石七斗三升 船戸村 六條の内なり

清村 六條の西にありて郡村記には清水村とまゐるせり 同領 五百石五斗
下川手村 加納の南にあり 同領 千百二十九石三斗五升 河手古城 土岐大

膳大夫頼康當郡長森の城に在りしが其地狭くして要害あしかりければこゝに城を築きてうつれり。頼康土岐系圖に伊豫守頼清の子にて從四位下大膳大夫刑部少輔左近將監屬尊氏。康永元年伯父頼遠生害之後依尊氏命向信州菅生寺。又向豫州征之軍功若干也。賞之爲管領職美濃尾張伊勢三國守護。濃州厚見郡河手城築居之。文和二年六月。後光嚴院帝因山名乱自江州坂本至濃州垂井。臨幸自垂井至小島。臨幸此時從千義詮而頼康供奉小島頼宮垂井頼宮頼康奉之而遣營同九月還幸時又供奉也。延文二年四月晦日尊氏逝去時剃髮號善忠。嘉慶元卯年十二月廿五日卒七十歲。法號建德寺叟善忠居士。菩提所河手正法寺。頼康建立永祿四年放火斷絶。と見へたり。池田郡白檉村の條に常樂記の文をしるす合せ見るべし。其子大膳大夫康行實の一族。揖斐出羽守頼雄の子にて頼康の養子となる。近國三ヶ國の守護に補し河手に在城す。分脈系譜に大膳大夫康行本名義行刑部太輔と見え。南方記傳に嘉慶元年十二月廿五日美濃國土岐大膳大夫入道頼康朝臣卒去七十歲。息刑部太輔康行に美濃尾張伊勢の守護を給ふとあるし。鎌倉大草紙に康曆元年美濃國の土岐大膳大夫島田が讒言にて御退治あり云云。美濃國の土岐も没落して公方の思召まゝに成行と見え。明德記の明德二年山名陸奥守氏清が内野口の合戦の條に去々々美濃國の凶徒御退治の合戦も上意の如く成し云云。土岐大膳大夫康行の御免を蒙て上洛し今度の内野の合戦にも勳功を抽けることが抑此土岐の八々御退治有ける。澄解

も康行の舍弟伊豫守兼貞が故とぞ聞えし。此伊豫守舍兄大膳大夫の代官に在京し美濃尾張兩國の事共伺申ける時内々一家の惣領を心懸て兎やせん角やあらましと案じ居たりしが所詮いこの宮内少輔を讒し失ふべし。諱なれば定て康行是を扶持すべし。其時同罪に申沈て家嫡に立んとすると思ひ立てる。淺猿けれ先宮内少輔不儀の由連々に讒し申けるに宮内少輔傳へ聞て上意として御不審を蒙らぬ力なし。島田が讒に依て地渥を失ひむ事。元念の至極也如何にもして伊豫守と一合戦せんずる物をと案じ屈したる處に尾張國守護職を申行て下向したりしかば尾張國黒田口に於て既に合戦に及ぶ其より以來度々の軍に毎度豫州打負て逃たりと而耳聞し云云と見えたり。又仁木右京大夫義長延文の末義詮將軍に背きて伊勢國長野に精籠りければ佐佐木大夫判官入道土岐大膳大夫入道討手を承て七千餘騎にて伊勢國に發向し二年はかり對陣したりしよし。太平記にのせたる。此康行の事なり。その外應安七年義滿將軍長門の菊池肥後守を退治ありし時も康行戰功ありしとそ法名を法雲院咲岩善喜居士といふその子。右馬助康政。膳大夫伊勢守とも稱す。土岐系圖に美濃伊勢の守護をかねて當城に在りしが義滿將軍の命に叛きければ。土岐頼益將軍の命をうけて討討し。應永十三年。康政ついに生害に及ひしよし。まるせり法號心禪院善昌居士。康政の弟壽生丸朝行も當城にてうまれしよし。土岐美濃守頼益。田二郎從四位下。に叙し。菅津左京の分脈系圖に池田美濃守源頼忠子頼益於尾州古井濃州高桑並牧城等數ヶ度大夫とも名のる。

亡敵將軍家大將拜賀之時供奉後陣一號一法名常保道號壽岳號一與善寺一と見えたり 祖
 父左馬頭頼清よりこのかた池田郡にすみし故池田を家號とす頼益尾張の萱津にうつり住みて萱
 津をも名乗る應永二年從四位下に叙し左京大夫に任す同六年大内義弘隱謀の時これを鎮めまた
 兄頼康の子康行その子康政將軍の命に背しを討果したる賞により土岐の惣領となり美濃守護に
 補し河手に在城す南方紀傳に南朝元中五年北朝ノ嘉慶二年八月 島田伊豫守満貞兄土岐の康行
 か代官として都にありて兄康行をほろぼしみつから惣領にたむ事をのそむにより謀をめぐら
 し從弟の宮内少補詮直の康行か諍たるにより先詮直逆意あるのむねを將軍よしみつに訴ふ事延
 引せば康行詮直一味し満貞と必合戦有べし去からの満貞たなしつみたらむ事をうれへ申其故に
 詮直勘氣せられ満貞に尾張の守護を給ふ是により満貞尾張にたむむく然る間詮直黒田口にて満
 貞と合戦に及ぶ康行も人をつかはして満貞をうたんとす將軍このよしを聞たまひて土岐左
 京大夫頼益に命して康行を征す元中六年北朝康應元年二月美濃國土岐の康行退治として軍勢あまた
 さしつかひすにより康行たちゆくすなはち土岐頼益にみの國守護職を給ふとまるせり應永
 二十二年甲午四月四日卒其子 左京大夫持益幼名法師丸のち右馬允美濃守從 四位下將軍義持の一字を賜ふ 應永十七年
 足利持氏に關東管領職を賜ひし時右馬允持益將軍の使として關東に下向す同廿一年家督を繼美
 濃守護となり河手の城主となる 南方紀傳に應永廿一年九月伊勢の國司北畠満雅卿御即位の事

につひてむほん關左馬の助ならびに關一黨神戸峯國府鹿伏兎等その外大和伊賀志摩の軍兵こと
 くはせあつまる北畠俊康ひとり京都にくみす 同廿二年春伊勢の國司乱を起し先北畠俊康
 京都と一味により俊康の城坂内をせめたる俊康其頃京都油の小路の館にあり國司滿雅卿つは
 ものをわけて 木造 阿射賀 多氣 大河内 坂内 玉丸 の城を守らしむ弟少將雅俊の木造
 の城をまもる顯雅の大河内の城をまもる國司は阿射賀の城を守り給ふならびに北伊勢の關 神
 戶 峯 國府 鹿伏 兎 等 拜野 の城をまもる是により將軍義持土岐左京大夫持益を大將
 として北畠中納言俊康世保大膳大夫康政仁木右馬のかみ滿長長野雲林院等をして勢州を征
 す土岐持益拜野の城をせめたり又木造の城をもせめたりす雅俊木造の城をのきて坂内の城を守
 る俊康木造の城に至りてこれを守る夏四月諸軍伊勢の國司をせめ阿射賀の城をかこむ城堅固に
 してたちす國司先垂水鳥屋尾方穂朴木等を岩田川雲出川につかひして是をふせぐ垂水藤方今
 德柳原八田天花寺會原船江波瀬岩内大流玉丸等の城をまもりてこれをふせぐ此城阿射賀の城高山
 にしてのほりがたしをりく不意に出て夜討す此城北に天花寺が城あり東に出城二南に地獄谷
 ありこれにより京勢そこはくうたれぬ大將持益はかりことをめくらし四方の水の手をとむる此
 故に城水乏して漸渴にのぞむ時に國司たてをなし櫓の前に馬を立柄杓にて白米をくみかけ馬
 を洗ふごとくにす寄手是を見退屈して水をたつことをやむ此後此城を世俗白米の城と名づく

とまるとせり此合戦の事を名細記の土岐系圖に正長元年十二月の事とするのあやまりなり 後龜
 山天皇の皇子寛成親王小倉殿と稱して嵯峨にははしけるが帝位の御のそみにより御謀叛ありて
 正長元年伊勢國に行啓し給ひ國司滿雅と共に兵を催し給ひしかば將軍の命を請て討手にむかひ
 しの此持益にあらで土岐世保刑部少輔持頼なりその事くしく山縣郡世保村の條にしるす合
 せ見るへし 扱持益の其後も在國のせずして京都にのみ在りしにや同し南方紀傳に應永二十九
 年五月將軍土岐持益かたちにいりそのうち院參と見えたり 永享十一年關東管領持氏追討の時
 將軍義教の命を請て持益三千余騎を帥て攻戦ひ軍功をあらはす隱居のち文明六年甲午九月七
 日卒法號承國寺大助常祐居士 其子 左京大夫成頼從五位下 美濃守 實の土岐の一族遷庭備中守
コヒト 義枚の子なるが持益の嫡子土岐太郎持兼早世により成親養子となり土岐の惣領美濃の守護職に
 補し河手に在城す義政將軍義成と名乗られし時一字を給ひて成頼と稱す 齋藤親基日記の寛正
 六年八月廿二日の條に義政將軍右京兆細川 勝元の馬場にて犬追物興行ありし御相伴大名各犬を奉り
 しうち土岐美濃守成頼四疋 とまるとし文正元年十一月大嘗會に土岐美濃守成頼面付万疋上綾六
 十三丈代卅貫文奉しよし見え同二年 正月二日 梶飯土岐美濃守成親とまるとせり 應仁元年五
 月より細川勝元と山名宗全と合戦す成頼美濃の兵八千余騎を帥ひ宗全を援けて軍功あり文明九
 年諸國の大名各京を去りて國に歸りしかば成頼も兵を引て美濃に歸りしよし應仁記應仁別記應

仁零記等に見えたりそれよりのちの在國して上洛せずあるひは延徳元年成頼 政房上洛すといへり明應四年隱居池田郡小
 寺村安國寺にて剃髮し宗安と號す同六年四月三日方縣郡城田にて卒す法號瑞龍寺國文宗安居士
 其子 美濃守政房トヤフははじめ左京大夫頼綱と云しを義政將軍の一字を賜りて政房と改む幼
 名を美伊法師ミイホウシといふ藤川記に 美伊法師といふは土岐美濃守源成頼の息男生年九歳なり回雪の
 袖をひるかへす生ながらにして骨を得たりむかし長保の比東三條女院の御賀の試樂に御堂の關
 白の長男宇治御 白也十歳の童にて陵王を舞ひ次男細河右 大臣也九歳にして納蘇利を舞し事たもひ出され侍り
 いにしへの舞と今の舞と手つかひ足ぶみなごかゝるべけれとも少年の人の其骨を得て人を感歎
 せしむる事ハ異曲同工といふへきにや十二日猿樂あり彦松と云さるかくなり一場はてのち美
 伊法師又舞臺にて袖をかへす猿樂にははるかにまされるよし人みな感しけり とあるハ此人な
 り明應四年乙卯家督をつぎ美濃の守護となり河手に在城す 永正十四年家事を嫡子政頼にゆつ
 りて城田の城にうつる同十六年巳卯あるひは大永五年また 天文四年ともいへり六月十八日あるひは 十六日卒五十四歳法號承隆寺
 海雲宗壽居士其子 美濃守政頼あるひは盛頼 盤居の後 右衛門尉頼純と改む 永正十四丁巳年家督をつぎ美濃
 の守護となりて河手の城に居る政頼聰明にして家臣長井新九郎政利のちに齋藤山 城守入道道三が奸佞殘害の氣
 象あるを知りて昵近をゆるさず政利うらみて天文のはじめ叛て急に河手の城を攻む政頼こらへ
 得ずして城を退從弟朝倉左衛門督義景をたのみ越前の國に趣く其のちの事ハ山縣郡大桑村の條

にしろす合せ見るへしその弟 左京大夫頼藝 はじめ鷺山の城に在りしが永井政利謀叛し天文のはじめ兄政頼を追ひしかり頼藝土岐の惣領となり美濃守護に補し河手の城にうつるのち山縣郡大桑の城にうつりて當城を長井豊後守利隆に守らしめ其のち廢城となる 船田後記に新府主政房去歲九月五日成頼於池田安國寺起其姓名宗安以國郡風政房云云義兵自革手進馬於加納刑部少輔揖斐某兵部少輔大桑某右京亮原氏頼直越後前司齋藤宗珍右衛門多治見貞藤掃部助伊藤某皆扈從之云云齋藤利安基朝等馳馬向因幡神祠神祠之後強長良河與賊軍相距一里余利綱利實亦自墨誤遂及木田江州大守佐佐木政高進師干彌高山預傳淺井氏三田村氏兩軍來省陣千鶴飼二十四日明應丙庚辰五月庚甲僧都泊齋藤利爲長門前司典明齋藤駿州太守基廣藤兵衛尉利因熒率同盟之師軍二千長良諸兵排陣於早沙者不知其幾千萬數也次早因幡絕頂舉燧凱歌三疊以示木鶴兩軍也時久無雨河水不費舟行貳貳二萬余人直截流濟之村山爲前鋒基廣爲殿木鶴之師見山燧進師於城田之西南南則鷺山利綱利實陣之東則鶴山利安基朝云云陣之西則江兵暴露于野僧都及利爲屯于鷺山之東北基廣利因等又比其北與富家際漏河交箭とある石丸利光を誅伐せんとての陣備へなり 靈藥山正法寺 の跡の村内にあり 當城主土岐大膳大夫頼康の建立にて守護代くの菩提所なりしが永祿四年信長公放火に燒失して斷絶す 季瓊日錄に長祿二戊寅四月十三日美濃國正法寺壽兆首座不知行領在所伺之 寛正二辛巳三月廿四日美濃國正

法寺禪初首座公文御判被遊也 と見え寛正五甲申九月廿六日美濃國正法寺元承首座公文御判被遊也 藤川記に七日川での持是院にかくたり候よしを告ぐ三位の大僧都妙椿すなはち來りてたもひよらさるよしを云さらばあすより正法寺に休所をかまふべきよしを告めす旅のつかれなごねん頃に下知をくいふくしけれいもらしつ八日正法寺にうつりぬ此寺の禪刹の諸山なり由良門徒にして山號を靈藥山といへり國中最初の禪林なりかたへらに新造の一寮のあるを休所にかまへてうつりすましむ朝夕のまうけなとくくしけれいあるすに及いす風のあぶり物隣のはしじくのなきはかりにやありけん 十日連歌の百韵あり 十一日正法寺のむかひに城をつき池をふかくして軍壘のかまへをなせり則舟をうかへて堀のうちに至る僧都つねに居る庵有山居のすまゐをまなび後園なご有侍佛堂の淨土の三昧を催せりと見たり名作の本尊ごもたほし此度庵號をもとめしかば法城といふ二字を書つかわし侍り云云 十三日正法寺にて短尺の禪あり詩の題の龍尾硯也此硯の東坡が詩集に見えたるにやさる硯の有し故也抑作文の書ひさしく筆をさし置てあとかたちもなく韵聲なども忘れはてぬれ僧都まきりにすめ待れば二十八字やうく書つらねたるばかりなり又方丈の前に二株の松を植て三度の鋤をくたす事ありき 鷺峰正法遍塵々靈藥毒入還活人五祖山下誰作主 栽松道者是前身 十四日かいしまへ歸ると見えたり

茜部村 下手川の西南にあり 加納領 二千二百九十石三斗六升 中茜部村 下

茜部村 大野村 新庄村 更屋敷村 茜部のうちなり南都東大寺所藏の大治元年の

古証狀に厚見郡茜部莊と見えたり其全文を鶴村の條にしるす合せ見るべし 飛田守明神社

の上茜部にあり延喜神名式に厚見郡比奈守神社と見え美濃神名記に従五位下比奈守明神とある

官社なり 八幡宮 下茜部にありもこの微々としたる小祠なりしが加納城の主松平飛

彈守忠隆修造のち大社となる 縣明神社 下茜部にあり延喜神名式に厚見郡茜部神社美

濃神名記に従五位下茜部明神とあるやしるなるべし 堀氏城跡 上茜部にあり 堀太郎

左衛門秀重の祖父掃部太夫當所に住し齋藤秀龍に屬し軍功ありて朱具足を賜ふ其子六之助

のち掃部太夫といふも齋藤に従ひこゝに住す秀重の六之助の子なり信長公に仕へ此地また近江の坂田郡の

うちにて五千石を領し常城に居すのち秀吉公に屬し五千石を加賜ありて一万石を領す秀重の子

久太郎秀政のち侍從羽柴左衛門督此地に生れ織田豊臣の兩公に仕へて軍功あり越前國三十万石を

領し天正十八年卒三十八歳其子 堀侍從秀治はじめの名久太郎のち左衛門督と改たむ當所にて生れ秀吉公に

仕ふ慶長三年侍從に任じ越後一國四十五万石を賜ひて高田の城にうつり居る三十二歳にて卒去

秀治の弟 美作守親良始名彌太郎も此地の生れなり慶長十二年一万二千石を賜ひのち御加

増ありて三万石を領し下野の鳥山の城にうつるともに諸侯に列なりて繁榮す 船田、古戰場

上茜部の近きあたりにあり 土岐四郎元頼の美濃守成頼の四男にて政房の弟なり其母異心

をさしはさみ嫡兄政房を廢し我をめる子元頼を惣領に立むと思ひ家老齋藤利國が陪臣石丸玄蕃

利光とかならひ謀叛を起す 明應三年の冬利國入道持是院公性大寶寺を創建し臘月十一日開堂

の儀を修しけるが利光其折りを得てまづ主君公性を弑害せむと謀りしに西尾直教に告られて其

事ならざりしかば玄蕃舟田に城を構へて桶籠りければ利國これを攻めて合戦に及ぶ玄蕃打負て

近江國に走り同五年玄蕃又近江より兵を起して立歸り方縣郡城田に屯すこゝに於て利國と再び

たゝかひ猶敗軍し土岐元頼石丸玄蕃等生害してまづまりしよし船田乱記に見えたり

村 下川手の西にあり 加納領 二千二百二十七石七斗 中鶴村 西鶴村

の鶴のうちなり 南都の東大寺の古証狀に 左辨官下美濃國 應道宣使に任じ延久三年宣符

令亂定東大寺領管厚見郡茜部庄西堺事 右得彼寺今月十日解狀一備謹檢案内一件庄數百歳

間四至隣爾更無改變而近來光國朝臣彼西堺隣爾内東西貳町南北拾餘町横以押妨去永久五年奏

聞之事由之處被下宣旨備宣件光國早停止四至隣爾年籠且禁斷鶴郷住人等濫行者件年籠

子細並繪旨趣等載宣旨狀而前別當大僧都 辭退等務之間無其沙汰空以去住國一因茲其

妨遂日彌益以二件隣爾内一號光國私領鶴郷之別府偏所押領也昔古今官符宣旨等之條無違勅

之科哉但光國前日陳狀備件茜部庄往古寺領也四至隣爾初以不可有年籠事也者如陳申者

若し是光國不知案内之處鴉郷司等所押妨軟早任永次宣旨被遣官使停止件四至勝爾等
 籠者權中納言藤原朝臣實行奉勅詔遣官使任延久三年官符令紀定西堺者國宜承知依
 宣行大治元年六月廿日大史小槻宿禰判少辨藤原朝臣判檢註言上東大寺領美
 濃國管西部庄西堺子細事西堺内相論田島桑在家等田島拾捌町參佰步田伍町捌貳拾步見
 作島拾貳町伍畝佰捌拾步見作八町八畝步荒三町七畝百八拾步桑參佰貳拾本大二百本在家拾貳
 家右去六月廿日宣旨備東大寺領美濃國管厚見郡西部庄西堺宜遣官使任延久三年官符令
 紀定去延久三年六月卅日官符所注載西堺高牒也而前出初守源朝臣光國以社領鴉郷四地寄
 進故二位家領平田庄加納之割界限四至之日折勝爾一畢背件勝爾一所押妨西部庄西堺田島
 十八町餘也仍任宣旨狀國使並寺家使相共加實檢如舊令紀定畢仍官上如件大治元年八
 月庄司散位中原成季國使大判官代藤原盛道官使左史生安都重之と見たり牛頭天
 王社の中嶋にあり明歴の頃驗ありて大社なる彫物多しうるはしき社なり
 佐波村の鶴の西南にあり同領二千百十三石中佐波村下佐波村坂牧村
 い佐波のうちなり稱蓮寺の淨土真宗東派本山直末の地なり
 次木村の並木ともかく佐波の西にあり同領四百二十石九斗八升
 高河原村の次木の西にあり同領三百七十四石八斗

日置江村高河原の南にあり同領千三百六十石二斗九升七合大脇村中島
 村の日置江のうちに也
 御茶屋新田の日置江の西に並ひて其枝郷也同領六百九十四石二斗三合
 高桑村の次木の南にあり分脈系譜の萱津左京大夫頼益の條に濃州高桑と見たる舊地なり
 同領九百三十三石八斗一升領家村の高桑のうちなり
 鳥屋村の加納の西北にありて本庄鳥屋村といふ郡村記には市橋庄とあり同
 領千六百七十五石六斗六升七合親音寺村三股村森屋村荒屋村
 中村島田村鎰屋村千手堂村の鳥屋のうちなり頼朝卿富士の牧狩の着到に
 美濃國の御家人戸屋とあるこの人なるべし
 宇佐村の鳥屋の西にありて本庄宇佐村といふ同領五百四十二石六斗六合
 瀬瀬源五守康或盛安また盛泰ともありの本庄宇佐村の人といひ傳へたり平治物語の頼朝遠流の條
 に今の御出家の事を申されて御下向候の御心安候ひなん池殿も能思召平家の人にも然るへ
 しとこそ存せられ候のめと人へ申勸めけるに瀬瀬源五盛安計を耳に私語申けるの如何申候
 共御髮惜ませたりしませ君の助からせ給ふ事直事に非ず八幡大菩薩の御計と覺え候と申せり打
 領給けり云云盛安も大津迄とて馬鞍尋常にして供したりける云云建久三年三月十三日聽て

盛安鎌倉へぞ参ける頼朝對面し給ひ小所なれども先馬飼へて多記莊半分をの給りける由緒の由申けるにや美濃國上中村と云所をも同賜てけり見之同じ物語の京師本駿河本に守康が妻も尾張野間の者の女也故義朝討れし時討死したりける鷲尾玄光が後家也而年後に守康に嫁したり夫婦ともに奉公の忠節なればとて美濃の上中村を賜ふと記せり宮崎重伴いはく頼朝右京といふ人も道三の部將の内にもみゆ按するに可兒郡久々利村書記に泳宮また万葉集に八十二隣とありて舊き地也依て頼朝ハク、リにて盛康右京もともに久々利村生土の人か
脩正者曰頼朝のさくことよみ又頼朝染く、りそめと云へ宮崎氏の説無理ならぬ考へなれどさにあらず可兒郡久々利村の北に中村と云あり此村内に頼朝源五の子孫今猶現存し古系譜も所載せり美濃循行記可兒郡中村の段にて、の良地にて村立よき處なり小百姓多けれともさして貧戸もなし中以上の百姓も余程あり此村にて頼朝氏の百姓古き家柄の者なりとあるのみにて頼朝源五のと言ひさるの遺傳と云へし

西庄村 清村の西にあり 康正二年造内裏段錢並國役引付に山下孫三郎殿美濃國 西庄、内惣領段錢と見えたり 同領 立政寺領 とも 千百四十二石六斗七升五合
出雲村 西庄のうちなり 立政寺 龜甲山と号し淨土宗西山派なり文和三年の勅願にて智通和尚の開基境内に 開山の櫻の指木 あり此ゆるに俗に 櫻の寺 といふまた

小池ありて池中の蛙の鳴事なし是むか開山僧の讀經のさまたけといひて聲と封むける故今はさかひといひ傳へたり 寺領御朱印五十石 東照宮の御制札又下馬札等と免許と給へり 織田真紀に永祿十一年戊辰秋七月廿五日公使和田惟政不破河内守光治村井貞勝島田秀満迎義昭於越州義昭來居于濃州西庄立正寺公上太刀鎧馬兵具青錢千貫於義昭 饗相從諸臣一謀使義昭歸京 ともあるも此寺の事也 慶長五年九月關ヶ原の役此寺より東照宮へ大柿を献したる事あり其時大柿を盛りて出せし朱の大盆は今猶存せり其事實の證狀に墨俣村明臺寺の段に記せり合せ見るべし

爪 西庄の西にありて 西庄爪村 といふ 加納領 四百二十一石八斗二升五合
今嶺村 爪村の西にあり 同領 三百七十四石四斗五升 今峯左馬頭氏光の分派系譜に土岐彈正少弼頼遠子にて土岐系圖にの穂保修理亮氏光改保々於細目討死と見え其兄に今峯駿河守光政弟に今峯右馬頭氏直少輔 といふ人をのせたり皆此人なるべし氏光の事、太平記に去程に仁木右京大夫義長の三年が間大敵に取巻かれて伊勢の長野の城に籠たれり知行の地もなく兵糧乏しくなるに付て懇切たる一族郎從漸々に落失て僅に三百餘騎に成にけり土岐右馬頭氏光外山今峯兄弟三人始に仁木に屬して城に籠りたりけるが弟の外山今峯の忽ちに翻

て寄手に加り、兄の右馬頭の猶城に留て仁木か下に居たりける連枝の間なれば外山今峯何に
 もして右馬頭を助けばやと思て潜に人を遣ひし城のさのみ弱し候のぬ前に急ぎ御降参候へ將軍
 の御意も無子細候へ御本領なども相違有まじきにて候と申遣ひたりければ右馬頭使に向
 て兎角の返事をいせて其文を引返して一首の歌を書て返しける連なりし枝の木の葉の散
 りにさそふ嵐の音さへそうき外山今峯此返事を見て是程に思ひ切たる人なれば語らふ共甲
 斐あるまじけにも連枝の兄弟散々に成て後憂世を秋の霜の下に朽なん名こそ悲しけれと泪ぐみ
 たるを哀なると見へたり 分派系譜 今の今峯左馬頭とし 太平記 今の土岐右馬頭とすとも
 に此氏光にて兄弟に外山今峯を名の人多し 土岐系圖にのせたるいすこしたかひて定かな
 らず加茂郡の牧野村野上村等にいてひ傳へたる今峯氏の夫人の歌よみしに此氏光の妻女なるべ
 し猶其郡の條にくはしくまゐるす合せ見るべしまた慈照院准后八幡社参記の終り永享十年八幡宮
 放生會御参向の帶刀のうち土岐今峯三郎頼通といふ人見へたり是もその一族の子孫なるべし
 藪田村 今の爪村の南にあり 御旗本領 九百石 藪田明神社の 美濃神名記に厚見郡正
 六位上藪田明神と見へたり 羽田氏宅跡 今の村内にあり 羽田九郎兵衛 住みよし
 ひ傳へたりいつの頃の人が今知りかたし
 下奈良村 今の嶺の西にあり 加納領 二百七十九石五斗五升

江崎村 今の今峯の北にあり 同領 五百六十八石八斗 古城趾 今の林權内 住み
 しこひ傳へたり
 鏡島村 今の江崎の北東にありて 市橋莊 といふ 同領 乙津寺領とも 千四百九
 十石 八斗 河原畑村 湊村 今の鏡島の西なり 藤川記に七ツ打程に鏡島の小庵
 につく院主かたらく此程の庵はさる事有て此二日に爰にまつり侍りてをば長寧院といふ僧
 の所をかれるはなむ紫のゆかりともすたく所なれはよるつに心やすし云云廿日歸南せんすけ
 ふすなはち鏡島をたちてもこの路を経て垂井に至るとあり五月六日にかしまに著ありて同廿
 日迄十五日かほと當所にあられしよし也 古城趾 今の市場にあり 城主の 石川駿河守
 光清 法名 はじめてこゝに住す是多田滿仲の子大和守從四位下源頼親の末孫にて世々當國の住
 入也其子 石川某 法名 家を繼てこゝに住す其子 本兵衛光信 法名 養徳信長公に仕へて鏡
 心寺の中にあり その子 本兵衛光政 法名 玄桂秀 まで四代鏡島の城主なり その子伊豆守
 貞政の子孫また貞政の弟土佐守勝政の子孫とも今御旗本にて關東に奉仕す光政の弟伊賀守光
 重 法名 宗親 聖の子紀伊守光元 法名 宗親 秀吉公に仕へ 是名古屋の老臣石河家鏡島家の先祖なり 百並
 根 今の當城藤藤帶刃左衛門築きて土岐代々の長臣安藤氏の居城とし伊賀守守就なども住しよ
 しいへり 乙津寺 今の同所にあり瑞甲山と號し臨濟宗京都妙心寺の派下なりはじめ眞言宗に

て行基法師の開基の古刹なりしが廢絶したりしを中古再興して今の宗とす中興の開基は石川駿河守光清と
 大同年中空海法師此地に來り鏡を立て四十二歳の自像と彫みて堂中に安置すこれによりて郷名と鏡島と呼べり法師又一木の杖を庭上にさしはさみけるか活生イキニヒで繁茂と一株の梅樹となる其花八重にして賞するにたへたり其木枯槁ぬれば根より孽と生ひて數百年の今にたゆる事なり
 宗祇法師 此寺に來りて香がしまば異木も匂へ梅の寺と發句せしコトのち俗に梅の寺と呼べり 關叔和尚も當寺に住居ありしにや 酒茶論に岐陽乙津寺沙門關叔述とせるせり岐陽とい岐阜をいへるなるべし 羣書類從本の酒茶論には乙津寺とかけり境内の一堂に安置せし將軍地藏の像の弘法大師の彫める靈佛なり慶長五年の合戦に黒田筑前寺長政の軍勢河渡川の淺深不案内にして渡りかねしかば長政此地藏に祈念し安くと渡りしより世に河越の地藏と稱す 寺領御朱印 五十五石五斗 秀吉公の時より退轉なし
 江口村 江川を隔て鏡島の北にあり此村より北東の村へ長良川の中島なり貝原篤信か岐蘇路の記に岐阜の西の川を長良川と云川上に長良印行本長柄とかけり今これを改むといふ村ある故也岐阜の西の少上より河ふたつにわかれて流る岐阜の方になかる、の枝河にてはそく西の方を流る、の本河にて大なり岐阜の方への舟のぼらす兩方とも長良川と云合渡の十町ばかり川上梅が寺の少

上にて兩川に合てなかる故に合渡と云上のわかれしみなまたより下の流れ合所まで一里許あり其間の中島にて七村ありとかけけるが如し今の十一村程あり此末にしるす早田村までみな其島のうち也 同領 八十六石五升三合 藤川記に江口といふ攝津國にある同名也れと遊女などなくて夜なれ鴨飼のくだるといふをきいて 鴨かひふねよると契れこれ又いへ江口のおそひなりけり 云云月出る程江口に出て鴨かひを見るなどかかれしこの事也
 養生村 江口の東にあり 同領 百七十一石一斗二升 新屋敷村 養生のうちなり
 中島村 養生の北にありこれ此川中島の 本郷 といふべし此外にも 旦島 北島 西島 東島 近島 差出島 などよべる川中なる故なり 同領 百七十六石八斗四升
 旦島村 中島の北にあり 同領 四百八十石七升 宮前村 旦島のうち也
 萱場村 旦島の東にあり 御料 尾張御領 安藤領とも 二百一石一斗六合 名古屋まで十里あり 澁陽志略には四十二石七斗一升六合合城島二十二と見たり是は尾張御領のみの説なり 神社 當村の生土神なり 乾太根の此島うちの村へ又鏡島村の邊にてもつくりて四方にうる其うち取わきこの

産を名物とす

北島村 〆萱場の南にあり 加納領 二百三十石一斗一升

西島村 〆北島の南にあり 同領 二百四十四石四斗八升

東島村 〆西島の東北にあり 同領 五百五十四石三斗八升 差出島村 〆東島

池上村 〆東島の北にあり池之上ともかけり 尾張御領 百四十七石二斗 高帳に二斗を五斗とす

名古屋まで九里あり 縣大明神社 〆村内にあり 美濃神名記 〆厚見郡正六位下葛

縣明神とある〆此社なるへし

近島村 〆池上の西北にあり 加納領 五百四十九石

早田村 〆近島の東北にあり 尾張御領 七百七十八石六斗一升 高帳には千七十九石四斗一升とす

枝村 〆三所ありて 馬場 岩倉 町家 下河原 といふ名古屋まで九里あり 物部足

鷹 〆南都の東大寺所藏の天平勝寶三年四月廿四日美濃國司解文に婢乎久須賣年廿二石目 價稻

捌佰束右厚見郡草田郷戸主物部足麻呂之賤と見えたり〆この人なるへし 岩倉大膳宅跡

〆岩倉町にあり 傳燈寺廢墟 〆濃陽志畧 〆今爲庚申堂 〆名東傳寺 〆修驗道居之接

別傳亂記其略云別傳首座者爲齋藤義龍 〆見龍遇 〆義龍創建一寺 〆名少林山 〆傳燈護國寺 〆以別

傳爲開祖 〆別傳頗有森計 〆昭義龍 〆欲令濃州禪刹盡屬傳燈寺 〆自爲僧祿司 〆永祿三年國

禪徒相議集于大山瑞泉寺 〆呈書於妙心寺 〆告別傳邪謀 〆削妙心第一座 〆籍義龍屈伏講和諸僧

歸寺 〆其後別傳謀使諸僧退去 〆義龍遂請于朝廷 〆以傳燈寺爲五山列賜紫衣 〆四年四月勅許

之 〆不幾義龍下世 〆其事寢不行 〆其後織田信長攻稻葉山城 〆時匿放火賊於寺中 〆齋藤家人圍寺捕

賊 〆別傳出奔不知所終 〆終寺亦蕪廢云 〆と見えたり

上加納村 〆上加納の北にあり 加納領 二千四百五十一石 南加納村 東加納村

御園町 〆上加納のうらなり御園の大神宮の御園 〆の名の残れるにて 神風抄 〆に美濃國

椎加納七十六丁とあるしたる舊地なるへし 古城墟 〆文安二乙未年八月齋藤帶刀

左衛門尉利永 〆越前守利政の子にて 〆はしめて築き代々の居城とす 〆其子 越前守利藤

土岐成頼 〆其子 新四郎利國 〆同執權 〆その弟 長井豊後守利隆 〆まで數代に居る利

隆 〆土岐政房政頼頼盛の執權なり 〆利國の嫡孫新四郎利良 〆幼少なりし故 〆利隆補佐し

て 〆明應六年羽栗郡竹鼻の城 〆より當城にうつり住めり 〆其のち 〆天文年中頼藝大

桑の城 〆にうつりしかば其跡 〆川手の城の城代 〆となりてうつれり 〆光國寺 〆大應

山と號し臨濟宗京都妙心寺派下なり 〆奥平信昌の嫡子 〆松平攝津守忠昌 〆の母 〆東照宮

御長女 〆なり 〆忠昌慶長十九年十月二日卒去 〆の後其菩提の爲に 〆母公の上加納

五百七

五百七

五百七

五百七

の下屋敷を轉じて此寺を建立せられ忠昌の法名光國院を寺號とす忠昌の墓も
 た其母盛徳院殿の墓忠昌の子飛騨守忠隆法號實相院の墓ありて其葬埋の地なり瑞龍寺の岐
 阜山の南の方にありて金寶山と號し臨濟宗悟溪派なり 齋藤越前守利藤入道妙椿の
 主君土岐成頼の菩提のために 天台廢寺を興して 應仁元年此寺を建立し
 悟溪和尚をもて 開基とす美濃記には長井豐後守利隆入道悟溪和尚を歸敬して明瑞龍寺の成頼の法號
 應仁元年丁巳四月天宮御願に此寺を再興せしよしとあるせり瑞龍寺の成頼の法號
 なり其繪像今にあり 塔頭八箇寺ありて 雲龍院 瑞徵院 開善院 鶴栖院 臥雲
 院 龍震院 惠耕院 瑞雲院 といふ其うち開善院の利藤入道の位牌所なり此八院より本
 坊を輪番持にし 悟溪派の田舎本寺と稱す山内の景地のよき事なり江村北海が 濃北
 紀遊に瑞龍寺殿堂規制及距山近遠 酷肖乎洛下龍安寺但欠一鴛鴦池耳とがけるかこ
 とし 慶長五年中納言秀信石田が逆徒に與みし籠城ありしかば關東の軍勢岐阜を
 攻撃し時三成がたの部將 河瀬左馬助 大西善左衛門 等瑞龍寺山にのほり砦
 を設けてふせき戦ひしといふ其舊跡山の上にある 城尻に岐阜の瑞龍寺の上に姥が石といふ
 あり姥が座して居るに異ならず前にをこけ石とてちいさき石あり此所へ 源敬公あがらせら
 れて四方御眺望ありし其節菟の芋をあげし人ありしかば御發句おとばしの折から八月十五夜
 なりしかば 名月やいもつらかくすさぬかづきと見えたり 書畫二覽に信叙名紹允後任

濃州瑞龍寺と見えたり

上川手村

の上加納の南東にあり川手との川運上の事にてむかし長良川などの運上をこゝより出
 じけるがやがて地名となりし成し 吾妻鏡の建曆二年九月廿二日の條に諸國津料河手等事
 可被止由日來及御沙汰之處其事爲得分所々地頭依申子細今日如元可致沙汰之由
 面々被仰下云云と見えたり 同領 五百六十七石二斗八升

領下村

の上川手の東にあり 岩城領 七百九石九斗五升 堺川の當村また上下川手
 の南東の方を流るむかしの尾張美濃の國さかひなり 天正の中頃 此南なる 葉栗郡
 の地多く 美濃に 属きたれば今の 郡堺となれり

細畑村

の領下の東にあり 同領 七百五十五石五斗八升八合 長
 切通村の細畑の東にありて 長森庄なり 同領 六百九十四石八升四合 長
 森城跡の村のうちにある 文治の頃 澁谷の金王丸か住しといひ傳へその後土岐
 伯耆守頼員の子 彈正少彌頼遠はじめ土岐七郎從五位下左近將監 當國の守護となり 土岐郡大

富よりこゝにうつれり 大平記の曆應元年青野合戦の條に將軍方の先陣美濃の洲俣へ着
 ば土岐彈正少彌頼遠七百餘騎にて馳加ふる國司北畠の勢六十萬騎前を急て將軍を討奉らむと上
 洛すれば高上杉桃井が勢八万余騎國司を討むと跡に付て追て行く云云坂東よりの後攻の勢也

美濃國に著て評定しけるハ將軍の定て宇治勢多の橋を引て御支へあらむすらん去程ならば國司の勢河を渡しかねて徒に日を送るべし其時御方の勢勢兵の弊に乗て國司の勢を前後より攻めむに勝事を立所に得つべしと申合けるを土岐頼遠默然として耳を傾けるが抑目の前を通る敵の大勢なればとて矢の二をも射すして徒に後日の弊に乗む事を待ん事ハ只楚の宋義か蚊を殺には其馬を撃すと云ひしに似たるへし天下の人口只此一舉に有へし所詮自餘の御事ハ知らず頼遠に於ては命を際め一合戦して義にさらせる戸を九原の苔に留むへしと又餘儀もなく申されければ桃井播磨守某も如此存候面々いかにと申されければ諸大將皆理に服して悉く此儀にぞ同じける云云五番に桃井播磨守直常土岐彈正少弼頼遠能と銳卒をすぐつて一千餘騎渺々たる青野が原に打出て敵を西北に請てひかへたり是には奥州の國司鎮守府將軍顯家卿副將軍春日少將顯信出羽奥州の勢六萬餘騎を率して相向ふ敵に御方を見合すれば千騎に一騎を合すとも猶當るに足らずと見えける處に土岐と桃井と少も機を吞れず前に恐るへき敵なく後に退くべき心有とも見えざりけり時の聲を擧る程こそ有りけれ千餘騎只一手に成て大勢の中に颯と懸入半時計戰てつと懸ぬけて其勢を見れば三百餘騎の討れにけり相殘勢七百餘騎を又一手に束て副將軍春日少將のひかへたる二万餘騎が中へ懸入て東へ追靡南へ懸散し汗馬の足を休めず太刀の鏗音止時なくや聲を出してぞ戦合たる千騎が一騎に成までも引なくと互に氣を勵ましこゝを先途と

戦けれ共敵雲霞の如くなればこゝに圍まれかしこに取籠められて勢もつき氣も屈しければ七百餘騎の勢も機に二十三騎に打成され土岐は左の目の下より右の口脇鼻まで鋒深に切付られて長森の城へ引籠る云云と見え又 同記 の康永元年九月三日持明院上皇伏見殿へ行幸の條に松明を乗て還御なる夜のさしも深ざるに御車東洞院を登りに五條邊を過させ給ふ斯る所に土岐彈正少弼頼遠二階堂下野判官行春今比叡の馬場にて笠懸射て芝居の大酒に時尅を移し是も夜深て歸けるが無端堀口東洞院の辻にて御幸にぞ参り合ける召次御前に走散て何者を狼籍也下候へとぞ嘔りける下野判官行春の是を聞て御幸也けりと心得て自馬飛下傍に畏る土岐彈正少弼頼遠の御幸も不知けるにや此比時を得て世をも不恐心の儘に行跡ければ馬をかけ居て此比洛中にて頼遠などを下すべき者ハ懸ぬものをかく云ハ如何なる馬鹿者ぞ一々に奴原猿目貸せてくれよと伺りければ前駆御隨身馳散て聲々に如何なる田舎人なれば加様に狼籍をハ行跡を院の行幸にて有ぞと呼りければ頼遠醉狂の氣や萌しけん是を聞てからと打笑ひ何に院と云ふか犬と云か犬ならハ射て落さむと云儘に御車を真中に取籠て馬を懸寄せ追物射にこそ射たりけれ云云其比ハ直義朝臣尊氏卿の政務に代て天下の權柄を執給ひしかば此事を傳へ承て大に驚嘆申されけり頼遠も行春も角てハ事悪かりなんと思ければ皆己が本國へぞ逃下りける云云土岐頼遠ハ無罪科通るハ所無りければ美濃國に捕籠て謀叛を起さんと相議して便宜の知音一族共を招寄

と聞えしかば急き討手を差下し可被退治とて先甥の刑部太輔頼康を始として宗徒の一族共に御教書を被成下しかば頼遠謀叛も不事行角て如何と思案して潜に都へ上り夢窓國師をぞ憑ける夢窓の此比天下の大善知識にて公家武家崇敬類ひ無りしかばさりと被憑仰しかとも左兵衛督朝臣是程の大逆を繰く聞かば向後の積習たるべしとされ共御口入歇止がたければ無力其身をば被誅て子孫の安堵を可全と返事被申頼遠をば侍所細川陸奥守顯氏に被渡て六條河原にて終に被刎首けり其弟に周濟房とて有をも既に可被切と評定有けるか其時の人數にて無りける由證據分明也けれの死刑の罪を免て纏て本國へそ下ける夢窓和尚の武家に出てさりとも口入し給ひし事不叶しを欺く者や仕たりけむ狂歌を一首天龍寺の脇壁の上に書たりけるいしかりしとさる夢窓にくらひれて周濟計を皿に残れるとさるせり同年十二月朔日の事なり其次の城主土岐八郎頼明入道周濟房の頼遠の弟なり土岐系圖に頼良の五男にて頼清此周濟房を憑八郎とも土岐八郎ともいひにて兄弟の序へまられたり剃髮して兵部卿律師頼遠また周崔坊とも號す江濃記に頼遠狼藉して身を失ひしかば其弟周崔坊入道頼明に美濃守護を給る此人打死の後頼世家督を繼云云と見えまた頼國執行日記に貞和六年七月廿六日濃州御敵責來近江界山中宿邊之間洛中騒動鎌倉殿執事等可有發向由風聞今夜先佐渡判官入道發向廿八日今曉寅刻鎌倉左馬頭殿並執事高武州發向濃州云云八月十八日鎌倉左馬頭殿自濃州

御上洛云云執事武州其勢不知其數一生捕大將周勢殿土岐乘與佐佐木六角判官江州預召具上洛云云廿七日土岐周清同舍弟左衛門太夫入道於樋口河原六波羅地藏堂燒野今夜戌刻被討了とさるし南方紀傳に曆應三年秋七月新田義助信濃國に越く九月一日義助退治のため土岐頼明入道周濟房を大將として信濃國にいたる同十八日義助美濃國へ落ちそれより伊勢の國を経て吉野の宮に来るとありその時軍功ありしよし也頼遠戮せられしのうち土岐の惣領となり當城に居る貞和五年正月五日四條驛にて戰死すその後土岐宮内少輔詮直兵庫頭頼忠の弟伊豫守直氏の二男にて加茂郡肥田瀬に任し肥田瀬宮内少輔とも稱すも此城に橋籠りしなり南方紀傳に應永六年十一月廿一日大内義弘左京堺にたゐて野心のきこえ有云云廿九日諸軍堺の城をせむ土岐宮内少輔詮直池田周防のかみ大内にくみし尾張の國より美濃の國にいたる土岐美濃のかみ頼益是をせむ詮直はいぐんして長森の城にたてこもると見えたり臥雲日伴錄に土岐宮内少輔自殺其婦人剪髮改衣詠和歌二首曰 われとわかたもひもたしこのころのうき世のさする墨染の袖 すみぞめの衣の色はうすくともかへらじこころうきよへまた 皆可威人也とあり

藏前村 切通の東北にあり 同領 六百七十石六斗六合 手力雄明神社 近

代正一位を進む美濃神名記に厚見郡從五位下手力雄明神とある此社なるへし 近隣十余ヶ村の生土神なり例祭九月十四日花火を興行す遠近の諸人見物に来る比類なき壯觀なり

高田村 ハカ 蔵前の東にあり 同領 五百二十六石五斗五升四合 西高田村 北
 高田村 ハカ 高田のうち也 高田要害趾 ハカ 山田兵庫 芦敷又太郎などが住
 し地といふのち 稻葉一鉄の砦なり 往古の土岐左近藏人頼員の居城も此地なり頼員の
 土岐の惣領左兵衛尉光定の子母の北條相摸守時貞の女なりはしめ孫三郎といひ從五位下伯耆守
 に叙任す弓馬の達人にて尊氏將軍に屬し戦功あり 當國守護 となりて高田に在城す可兒
 郡兼山にもすみし故 金山頼員とも稱す曆應二己卯年二月廿三日卒法號を定林寺雲石存考
 といふ石碑の土岐郡半原村にあり定林寺村に今の寺なし 太平記 に土岐左近藏人頼員の六波
 羅の奉行齋藤太郎左衛門尉利行が女をめとり一族の土岐頼貞多治見國長等にかたられれて天皇
 がたに與せしか妻の縁にひかされて六波羅方に回忠をたりしよしとせり

芋島村 イモ 高田の南にありて 長森庄 なり 尾張御領 二百二十六石九斗一升
 名古屋より八里あり 八劍大明神社 八王子社 ともに村内にあり

中島村 ナカ 芋島の南にありて當郡東南の隅なる里なり 長森庄 といふ 同御領 二百
 九十石一斗五升三合 名古屋まで七里あり 境川 サカ 水源各務郡各務村麻絲池より出
 て其郡中をつらぬきて西に流る芋島中島等の地をへて西南の方安八郡の境にいたり長良川に入
 るむかし尾張美濃のさかひ今のこにて厚見各務羽栗三郡の堺川也川上に橋ありて 伽藍

橋 といふ 皂莢川 サウ むかし大河なりしか今の小渠となりて當郡と羽栗郡のさかひにあ
 り 熊野權現社 また 縣明神社 ともに村内にあり

岩地村 イハ 蔵前の北にあり 岩城領 百八十二石一斗一合
 野一色村 ノ 岩地の北にあり 同領 百四十三石六升二合 新田町の野一色のうち也
 水海道村 ミ 野一色の東にあり 同領 二百八十二石五斗六升五合
 前一色村 マ 岩地の西の方にあり 同領 二百四十石八斗三升
 北一色村 キ 前一色の西にあり 同領 五百六十一石一斗三升三合
 岩戸村 イハ 稻葉山の東南の麓にあり 同領 二百八十二石五斗一升五合 觀音洞
ハ 金華山のついき鷹巢山にあり紫樹鬱々ともりたる中に三面屏風を建たる如き巨巖あり石
 燈數十級をのほり岩窟の中に小堂を構へ觀音の像を安置す其景の絶勝なる事のべつくしがたし
 村名も此岩洞より起れり

日野村 ヒ 金華山の東北の麓にあり 同領 五百二十一石四斗三升五合 大日村
 中河原村 ナカ 日野のうち也 方縣郡雄總村千手院の縁起に聖武天皇東大寺を建立し給ひ
 し時厚見郡日野郷なる 金王丸 といふ小童を都にめして毘廬舍那の大像を鑄さしめ給ひし
 よしいへるこの事也 枝村 を 大日 といへるもその佛像によれる名が此近き切通

村の長森の城にも澁谷の金王丸がすみよしひつたへ金王丸といふ人の多きも珍らしき風土の跡也 鳳河山 誓源寺 浄土真宗にして東本願寺の末寺なり 天神社 諏訪社 等あり例祭七月廿七日なり

日野新田 同領 四十六石三斗五升三合 の地にて日野村の枝郷なり

古津村 日野新田の北の方長良川の向にありて郡のうち東北の隅なる里なり當郡のすべて長

良川をさかひにて南の地なるに此一村のみ川の北にありて方縣郡の地につらなれりされり しかし方縣郡に属きたる里にて 延喜神名式 美濃神名記 等に 方縣津神 をの

せたるの事の事にあらず猶考ふべし 尾張御領 百二十六石一斗二升九合 名古屋まで十里あり

白山社 神明社 ともに村内にあり 銚子峯 百々峯の東にあり其かたち酒器の銚子を覆たるが如し 観音堂 銚子峯の麓にあり佛工春日の刻める十二面觀音の像また脇侍

に不動毘沙門の二像を安置すむかし歴然たる伽藍なりしが乱世に廢絶して此小堂のみ残り とも里民いひ傳へたり 小島峯 長良川の岸にあり孤峯空秀で樹木繁茂したり 土佛岩

も川の西岸にあり 濃陽志畧に巨岩屹立形如立佛像故名是地也石磴業廻下俯長川南見金華山發舟山可謂形勝矣岩中有洞有石釋迦像其上有石曰鏡石其面可三尺甚平

可_レ以_レ鑿_レ人物_ニ而今雖_レ晦猶可_レ照_レ着人面_ニと見えたり 棧岩 も川の岸にあり石徑をびへ

棧道高くめぐれり 鰯淵 棧岩の下の深潭をいふ往古海船鰯をつみてこゝに來り着岸して

四方にうる故に名づく古津の地名もこれによると里人いひ傳へたり 匿椀洞 一名 坊

洞 ともいふ 濃陽志畧に坊洞在_レ村後山下_ニ有_レ小洞_ニ名曰_レ匿椀洞_ト傳云往古村民所_レ河伯

借_レ家具_ニ皆如意_ト其後有_レ黠夫_ニ窺見_レ大呼_レ水神没_レ水其後不_レ復見_レ亦風土之說也 と見えたり

高橋氏宅趾 村内にあり 高橋但馬守 がすみよしひつたへ

新撰美濃志十七の卷

尾張文園岡田 啓編輯

美濃簡齋神谷道一修正

山 縣 郡

加野村 郡のうち南西のはてなる里なり 御料 七百十四石二升一合 村社 八

幡神社 及真言宗 西光寺 淨土宗 日王寺 曹洞宗 洞泉寺 黄蘗宗 正法

寺 等あり 加野二郎この人なるへし 分派系譜 の美濃源氏山縣先生國政の孫清

水頼高の條に承久合戦之時京方爲大井戸渡大將被討了討手栗野二郎國光加野二郎也皆以

家也 と見たり

岩井村 加野の北西にあり 同 二百四十七石三斗七升三合 康正二年遣内裡段

錢並國役引付に三貫文山縣左近將監殿濃州井郷段錢とあるの岩文字脱したるなるへし又平井村

か井往戸洞か考へ訂すべし 延算寺 の美濃名蹟志に岩屋村の山上にありて昔し天台宗の

巨剎なりしがこゝに廢れて僅かに本坊のみ残り本尊藥師如來の比叡山根本中堂の像また

當國大野郡横倉樂師の像を同木にて彫刻し三ヶ寺に安置せし其一也傍に山門等の齋跡ありて西より山に登る事もある由記せり是則ち當寺の事也又三代實錄及び類聚國史に貞觀六年五月十四日己亥以美濃國山縣郡延算寺預之定頼とあり今の村を岩井と唱へ延算の文字或は延贊と書し宗旨は眞言宗なり村社 天神社 及淨土宗 普善庵 同宗 一樂庵 あり

福富村 加野の東北にあり 同 千三百十九石一斗五升三合 村社 三嶽神社

天滿神社 白山社 綾羽神社 淨土宗西山派 淨土寺 臨濟宗妙心寺派 少林寺 村うちにあはれ二領あり

森 村 岩井の東にあり 同 百九十二石八斗六升七合 眞宗本派 光明寺

溝口村 森の南にあり 同 二百九十二石九斗六升七合 村社 神明神社

淨土宗西山派 慈恩寺 同宗 西福寺 同宗 佛光寺 等あり

世保村 溝口の東南にあり 同 四百九石八斗九升二合 一ッ屋村 世保のうち也 村社 八幡神社 同 天滿神社 淨土宗西山派 清閑寺 同宗 華藏寺

あり 郡上川 村の南を流る武儀川北の方より流れ来てこゝにて落合ふ 美濃源氏に世保と名乗る武士のなごの人のなるべし 世保孫次郎貞頼の 分脈系譜 に佐渡源太重

實の五代の孫小島二郎重俊の孫の孫五郎重連方末子世保孫次郎貞頼と見えたり貞頼の曾祖父重俊は美乃國岩瀧郷本主承久京方被討了と 同系譜 にあるせり 世保刑部少輔持頼

の南方紀傳に永享元年己酉七月十四日伊勢の國司滿雅蜂起仁木持長一色義貫長野雲林院北畠中將持康これをふせぐ土岐世保刑部少輔持頼大將として岩田にたいて合戦國司滿雅打退すな

はら打死世保其首をとりみやごにのほり寶檢して四塚にかくる云云 十年戊午五月大和一揆蜂起吉野の官軍所々に出張す越智伊奥のかみい猶高鳥の城にたてこもる將軍一色左京大夫義貫世保刑部少輔持頼を大將として大和につかはし合戦にかよふ云云 十二年庚申五月十六日伊勢の守

護土岐世保持頼退治として將軍細川續岐の守に仰て大和の國多武の峯にたゐて合戦持頼うちま

け自害 土岐系圖に河手の子刑部少輔持頼鎌倉管領足利持氏に属しける故持氏生害のち義教將軍の命により永享十二年五月十八日利州にたゐて生害法親王龍源寺春岩居士と名づけしとある 南方紀傳に南朝に御方申けるよ見えたりと見えたり 江濃記 に伊勢の世保と申の伯耆十郎頼藤の子息頼康の持氏に属するよ見えたりと見えたり

末葉也ともあるしてこの住人なりしか伊勢の守護職をうけ給ひりて彼國にありしなるへし 椿葉記 に正長元年のまはずに南方の御叛反伊勢の國司打出て土岐の與安と合戦すとあるし 應仁別記 に伊勢國への土岐之世保五郎政康打入ぬ云云 とあるは皆此持頼の事なり 應仁別記に政康とがけるは傳聞のあやまりなるべし

中屋村 世保の北西にあり 尾張御領 百九十一石一升七合 美濃高帳には 一斗一合とす 名

古屋まで十二里半あり郡上川武儀川の落合の當村と世保村との間なり其所河原廣く民家の二ツの川の曲り目のあたりにあり 八王子社 熊野社 島宮社 ともに村内にあり

古市場村 中屋の西にあり 御旗本領 百七十二石八斗七升五合 村社 古位

神社 同 神明神社 あり

石原村 古市場の西にあり 御料 六百七十六石一斗八升六合 村社 津島神

社 同 天神々社 同 入幡神社 同 保食神社 浄土宗西山派 醍醐寺 眞

宗本派 光明寺 あり

落村 中屋の西北にあり 同 百七十六石三斗七升

門屋村 落村の西北にあり 同 二百二十七石八斗六升四合 村社 神明神

社 浄土宗 光明寺 あり

太郎丸村 門屋の西にあり 御旗本領 千六百八十二石八斗八升三合 村社 諏

訪神社 白山社 眞言宗 船國寺 あり 古城趾 深尾和泉守 がすみし

まじ名細記に見えたりのうち松平土佐守に仕へ土佐國佐川の城主深尾若狹守なりとを堂洞軍

記に見えたり

高富村 太郎丸の北西にあり 御料 本庄侯領とも 千百六十七石五斗四升

本庄氏の丹後の宮津侯の連枝にて高一万石七千石ハ當國方縣山縣各務の三郡の内にて領三千石餘ハ下野國にありを領してに屋敷ありて在所とし常に江戸に住居あり此地岐阜よりの道路通し東北の武儀西の本巢所々への道路

あるを以て大に運送の便ありて市街賑やかなり 七宮神社 津島神社 神明神社

等あり 寺院 廣嚴寺 洞泉寺 耕元院 和合庵 皆臨濟宗にて妙心寺派なり

圓照寺 浄光寺 共に眞宗本願寺派なり

天王町 高富の枝郷にて 同 十一石四斗九升二合 の地なり 高富と川を隔て、

町屋つらなれり

佐賀村 天王町の北西にあり 御料 百九十五石二斗二升六合 子守神社 村

うちにある

高木村 佐賀の北にあり 同 八百五十八石七斗八合 白山權現社 村内に

あり 美濃神名記に山縣郡正六位上高木明神とある此社なるべし 多福寺 あり臨濟

宗妙心寺派なり

梅原村 高木の北西にありて山口庄なり 御料 尾張御領とも 千五百六十四石

六斗六升二合 六百一十二石三升二合御領 名古屋まで十二里あり此村八郷にわかれて山く

の間にある其名を 塚洞 田口 常洞 上洞 猿子 小田 七日市場 高田

中村 賀茂明神社 修験道堂りて此地の氏神とす 松林房 天台宗

にて深瀬村慈明院 湯陽志界には 慈命院とす の末寺にてその隠居所なり 善福寺 國定寺 普救寺

普門寺 大林寺 あり臨濟宗妙心寺派なり

西深瀬村 梅原の東にあり 御料 又慈明院領とも 千四百石七斗一升六合 村社

乙御前神社 隼人神社 白山神社 春日神社 あり 慈明院 天台宗に

て神宮山大圓禪寺と號す 寺領十石御朱印 あり 疊表 東西深瀬近村よりも出す

名産なり 堅相寺 定法庵 臨濟宗妙心寺派 吉祥寺 黄檗宗なり

東深瀬村 西深瀬の東にあり 御料 千四百四十石九斗三合 白山神社 及 觀

音寺 大慈山と號し三井寺派の天台宗なり本尊の十一面の靈像當國三十三所のうちにて第

十九番に配す佛の右に宮殿ありて地蔵尊を安置す脇侍は日光月光なり此寺の近きあたり山の尾

崎に景まさ岩あり道なかに石地藏藥師佛などありと 美濃巡禮記 に見えたり 全照寺

天台宗 桑福寺 眞言宗 多養寺 臨濟宗 大洞寺 曹洞宗なり

岩 村 東深瀬の東にあり 御旗本領 六百九十六石三斗三升六合 入幡神

社 熊野神社 及臨濟宗 大定惠寺 同宗 知足庵 及 福田庵 等あり

北野村 岩村の東にあり 御料 御旗本領とも 千四百八十六石三斗五升五

合西山村の北野のうら也 古城趾 鷲巢 名細記に 美作守 が居りしと

い弘治元年の秋齋藤秀龍入道道三長子義龍と長良川にて合戦し道三利あらずして引退き此美

作守の明城に取籠り翌二年春城田の城にうつれり 江濃記 に道三四方の町の末より火をかけ

稻葉山の城をはたか城になし川を打越し山方と云山中に引籠り父子の合戦初まりける とある

山方とはこの事なり 村社 津島神社 白鬚神社 北野神社 白山神社 曹洞

宗 悟空庵 眞宗本派 丸山寺 あり 大智寺 萬松山と號し臨濟宗なり 寺領

御朱印十八石八斗 あり 聞性庵 臨濟宗京都妙心寺派なり本尊十一面觀音の行基

菩薩の作にて當國三十三所の廿一番なり俳諧師支考 渡邊の當村の生れにて芭蕉の門人也中頃伊

勢の山田に菴を結び老てのち美濃に歸りて隠棲し俳諧の書數部を著す芭蕉の風を一變して一家

をたつ是を人美濃風と呼べり 風俗文選 といふ書に支考字盤子號東花西花亦號獅子菴濃

州之産也入蒸門業風雅一方門人也 見えたり

三輪村 北野の北東の方にあり 御料 四百三十八石三斗七升五合 三輪明神

社 美濃神名記 に山縣郡正二位美和明神とある社にて山縣郡のうち十四ヶ村の惣社な

り例祭の四月八日袋草紙の希代歌のうちにとさのいたるをりをまらぬもあはれなりつとめて

も見よくる、日やなき。是こもりたる修行者詠之。食とするこのは、かせにちりはてぬつゆのいのちをなにかけまし。此御歌御返答又或云此歌のみ、國山形郡三輪社神歌云。野御歌と成は此三輪社の神歌とす。と見えたり。八幡神社。も村うちにあリ。圓智寺。浄土宗にて清水山と號す本尊十一面觀音の立像の當國三十三所の廿二番なり。眞長寺。眞言宗。淨音寺。浄土宗。正運寺。眞宗本派。妙文寺。日蓮宗等あり。神直大庭。いこの人なり。南都東大寺の古證文に。美濃國司解。日進上交易賤事。合陸人。奴三。價稻肆仟玖伯束。二人充各一千束。二人各八百束。奴小勝。年廿九左。目下黒子。價稻壹仟束。右山縣郡大神、郷戸主神直大庭之賤。奴豊麻呂。年廿一。右類。價稻壹仟束。右牟義郡揖可郷。戸主武義造宮之賤。奴益羽。年十五左。目下黒子。價稻漆伯束。右加茂郡小山郷戸主上連稻實之賤。婢乎久須實。年廿二右。目下黒子。價稻捌伯束。右厚見郡草田郷戸主物部足麻呂之賤。婢石都賣。年廿右。類黒子。價稻捌伯束。右惠奈郡繪下郷戸主縣主之戸口縣主守之賤。婢糠賣。年十五左。類純黒子。價稻陸伯束。右可兒郡驛家郷戸主守部麻呂之賤。以前被民部省去天平勝寶元年九月廿日符。爾被太政官同月十七日符。爾被大納言正三位藤原朝臣仲麻呂宣爾。

奉勅奴婢年卅已下十五已上容貌端正用稅充價宜知買貢進者省宜承知。依前件數仰下諸國令買貢上但不論奴婢隨得者謹依符旨交易進上如件仍具錄事狀附朝集使正四位上大伴宿禰大麻呂申上以解。天平勝寶二年四月廿四日。正七位下大目志斐連猪養。參議兼紫微大弼正四位上守勳十等大伴宿禰。朝集使。正六位上行大掾阿部朝臣。稅帳。從四位上行紫微少弼兼中衛少將員外介臣朝葛朝臣京。正七位上行少掾佐伯宿禰久良萬侶。從五位下行介勳十二等津島朝臣男。從七位上行少目栗栖大成。と見へたり。宮之上村。三輪の東にあり。御料。眞長寺領とも。二百三十三石七升六合。眞長寺。眞言宗の古儀にて三輪山と號す。寺領御朱印十七石。あり神龜年中の勅願にて行基菩薩の開基印阿法師の再興なり本尊の釋迦如來鎮守の三輪明神にて僧坊禪室其數十六あり。しよし文龜年中宗澤沙門が。法華讀誦記。に見へたり。椎倉村。北野の北の方にあり。御料。四百二十六石二斗。弘誓寺。臨濟宗にて椎倉山と號す本尊聖觀音の聖德太子の作佛脇立の地藏毘沙門天なり當國三十三所の廿番に配す。側島村。武儀川のむかふにありて當郡の南のはてなる里也。同。二百二十九石五斗八。

升五合

戸田村 〓 側島の東北に並へり 同 百十四石八斗六升

千疋村 〓 武儀川を隔て、戸田の北にあり 同 六百七十七石一斗一升六合

上野村 〓 郷帳また郡村記等に植野とす今尾張の石河 〓 千疋の北にあり 尾張御領 〓 百七

十五石八斗一升七合 〓 高帳に百九十五石九斗五升四合とあるは石見 〓 尾張御領 〓 百七

り 武儀川 〓 水源神崎村よりいつ故に神崎川共いふ川下の中屋村に至る 〓 山縣三郎國

直 〓 分脈系譜 〓 清和天皇の末孫多田左衛門尉頼綱の三男にて美濃三郎國直また山縣三郎共

いふ山縣郡に住しのうち出家し安藝國に配流のよしあるせり其妹源大納言能俊に嫁して參議俊雅

をうむ國直こゝに住みて子孫山縣を家統とす源三位頼政の子 〓 山縣先生 〓 齋院 〓 國政 〓

實 〓 山縣三郎國直の子なり治承四年頼政山城の宇治にて戦死し家人等其首をこゝに持來り葬し

〓 此國政の住地なりし故也國政の二男 〓 山縣二郎頼清もこゝにすみしなるへしその外 〓 分

脈系譜 〓 に落合三郎國時の子 〓 山縣藏人國盛その子 〓 山縣判官代國綱その子 〓 山縣

太郎次郎人國氏その二男修理亮國經の子 〓 山縣掃部助 〓 中務 〓 經持また國氏の三男 〓 山

縣大炊助國兼 〓 曆應康永頃引 〓 なごまるとしたるのみな美濃源氏の一族にて此あたりに住

みし人々なるべし 〓 扶桑零記 〓 に長元四年辛未六月十六日甲斐守源頼信が於平忠常首參洛

云云忠常請降伏來頼信隨身參上之處於美濃國山縣 〓 即忠常受病死去仍只斷其首傳于京

師云云とあるしたるも頼信同し源氏の一族なれば忠常をこゝに率て來りしなるべし 〓 稻荷

社 〓 神明社 〓 井社 〓 ともに村内にあり 〓 美濃神名記 〓 に武儀郡正三位埴野明神とある埴

〓 植の誤字にて是等の社ならむか此地武儀郡へ近ければむかし其郡のうちなりしも知りかた

し 〓 蓮華寺 〓 〓 金光山密嚴院と號し眞言宗新儀名古屋の大須眞福寺の末寺なりむかし源頼政

を葬し古刹なりしが乱世久しくして跡なく廢絶したりしを寛文中當所の領主石河伊賀

守正光再興し信海法印を開山とし舊號たよめて蓮華寺と名づくむかし頼政の畫像ありしに

や頼政家集の奥書に讚詞をのせたり其長篇左の如し 〓 清和一派源家祖 〓 産得頼圓天下奇 〓 歌詠直

登三位任 〓 射聲親結九重知 〓 文經武緯並於此 〓 義膽忠肝更有誰 〓 成敗論功同婦女 〓 死生義處是

男兒欲除巨蠱身先殞 〓 長使英雄泪更垂 〓 歲在治承 〓 凶焰盛宇河 〓 衰々幾億戶 〓 時臻壽永舊宛

復 〓 泉下欣々想展眉 〓 不啻皇恩酬戰沒 〓 兼修佛事助冥資 〓 蓮華儼爾東濃地 〓 古栢依然蜀相

祠 〓 石馬鉄衣生氣凜 〓 黃鸝碧草后人悲 〓 四絃演史談陳跡 〓 三尺成童激壯思 〓 有客謁予題畫像

長吟代贊卷遺之 〓 右蓮華寺殿正三位源氏頼圓大禪定門省儀置于密嚴院常住 〓 永享三年三月

廿有四日 〓 前南禪比丘惟肖得嚴書とあるし其末に 〓 右二帖爲濃州山縣郡蓮華寺常住 〓 奉當

住青陽軒昌慶書記者也 〓 延徳三年八月五日 〓 法眼紹永 〓 住山叟昌桂寄進焉と見えたり 〓 源三

位賴政墓 蓮華寺の境内にあり寺僧の傳へに治承四年源三位賴政高倉宮をすゝめ平家を
 擊むとし五月廿六日宇治川に戦ひ敗軍して自殺ありしかば遺命により家人渡邊省と云もの其首
 を持て關東に趣き賴政の姑比丘尼濃州山縣郡に居住ありし故其ゆかりを尋て此地に到りしに其
 夜人の夢に賴政枕上にたちて我こゝにたまらむと告られしと見えければこれを葬りしよし
 へり 遺囑軒記 大和國宇多の近所に山部寺と云ありて此所に競長七居たと見ゆ賴政討死の
 へは是へ牌を立墓を建つと見ゆ其所に賴政ぐる輪と云はり城も有たか今山部寺に賴政か具足並
 旗系圖あり賴政の紋の齒梁の葉の丸なり旗にも其紋あり又關東の古河の内にも賴政曲輪と云あ
 り爰にも居たか又そこにも葬たりといふ所あり墓の其人の恩顧を得たる者志次第に其所々に建
 るもの也畢竟の首を妹の尼公とりて下り今の美濃の蓮華寺に葬りたるか定と見ゆ とあり名古
 屋の長臣石河氏の采邑美濃の内三十六村九千七百七十六石五斗三升三合を領しこゝも其一所な
 れ其祖先の葬地に蓮華寺を再興し正光朝臣墓碕を建五百年の遠忌を修行す是寛文六年なり
 分脈系譜に賴政兵庫頭仲政子母勘解由次官藤原友實女法名頼圓號蓮華寺其墳寺在濃州山縣
 郡と見えたり碑銘の正光のもめにて林道春の孫林學士春常これをかく其文左のごとし 夫
 忠臣義士封其墓 旌其名 建祠追祀刻碑叙事者古來之美談也從三位源賴政墓在美濃國山
 縣郡上野村 載於藤公定所編源家系譜 然風箱之古草木之易殆五百年遺蹤寥寥里民傳稱治承

宇縣之役三位伏見渡邊氏族臨危致命其中一人源三位首泳水偶免欲赴關左三位族類素
 有在斯者一故暫憩於此其夕夢三位告曰理我於此覺而奇之遂葬焉乃立廟崇之且構一字
 號金光山蓮華寺後人營八幡祠於寺中以爲鎮護之神爾來國郡換守宰歷代多兵革祠破寺
 廢猶幸保其墓而已至慶長年中石河市正光忠奉住東照大神君賜美濃攝津三州之内一萬
 三百石以爲食邑辱賜印章山縣郡上野村在其中其後光忠因公命事尾陽亞相義直卿
 采地如故光忠沒後其子伊賀守正光承襲以隸尾陽管内歷仕黃門光義卿其名聞于世頃
 年正光憫斯地荒蕪尋其遺趾而修復八幡祠淨掃三位墓城再與其廟結草庵稱蓮華
 寺招小池法印信海定爲密宗派於是人皆知三位之墓在斯而感正光懷古之志掘貞高者故
 法眼杏庵正意子也仕尾陽而與余有累世之交一日爲正光來忍岡國史館述事之始末請
 假余筆刻於碑余曾謂三位沒于荒道之戰其墓在濃之山縣非無疑不審系譜何所據也今
 聞貞高所語以信公定博聞且告曰三位履歷其妙于射藝長于倭歌克勤王事於保元不與
 凶族於平治者昭々于口碑何贊焉當治承之役平氏秉國柄二十年傍若無人三位勢雖不
 敵義兵一舉老賊膽寒群豪競來虎狼遂屠昔暴秦之苦陳吳首唱劉項成功王莽之篡宗快先起諸劉戰
 勝以彼論此則知三位是射賊之善矢也我先人羅山子謂三位勳以仁皇子猶羅東郡奉劉信也
 斯言固當嗚呼我邦不可謂無人如三位則朝家之忠臣源家之義士也其老而猶勇確乎不撓雖

李廣馬援不可過焉若事成功遂則雖鏃子之誅入鹿百川之剛道鏡何以加焉哉痛哉正光生
 于數百歲之後爲忠臣義士封其墓修其廟則招九原之靈魂起千歲之餘情乎石河之系出
 自源賴親爲賴光同胞與三位不爲非族然則其追神其不可不敬焉余言無他以此刻
 于碑一系之以銘銘曰源家遺老武林俊彦義旗維揚精兵以練戰于宇治安于濃縣一抔僅
 存百世猶信碑石卓立其人如見寬文六年丙午五月二十六日弘文學士林子撰碑陰昔蘇東坡
 製韓文公廟碑揚其美今正光所建林子所記假令歷千百歲其石雖礫其銘無朽則亦足徵
 焉嗚呼三位沒而後四百八十七年于茲再興其墓正光之力也後世無不知此銘者則正光之名
 與此銘共無朽者矣 前任眞福後任長谷寺信海と見えたり 源三位賴政卿畫像贊 傳稱
 濃州山縣郡蓮華寺葬源三位賴政之首先是石河伊賀正光建碑詳記其事今茲五月二十六日正
 當三位五百年忌舊友堀貞高感其忠心義氣于今日寄納畫像于彼寺求贊詞于余因贊數語
 保元奉君官威斯遠平治竭忠自家豈省推實起嘆三品位整榮選遇逢七旬身靜再射怪鳥
 禁延絶肯豈惜駿馬海波不淨快崇切齒巨君逆橫耿肅守義孟德勢勁窮達有時衆寡
 難競鈎殿雲愁扇界風冷芝座感懷雍露唱詠志決身殲天平命乎

整字林懸直民題

伊佐美村 推倉の西北の方にあり 御料 千八石五斗 村社 御鉾神社 唐松神社

及眞言宗 寶宮寺 臨濟宗 瑞應寺 濟照寺 徳林寺 あり

大桑村 伊佐美の西北にあり 和名類聚抄に山縣郡大桑と見えたる舊地也 名所方角抄

に美濃に大我野など云名所も有りとあるしたれとさる地名當國になし大桑を開あやまりてかく
 かきしたるへし 御料 南泉寺領とも 千五百四十四石六斗二升 十五社大明
 神社 村内にあり 南泉寺 臨濟宗にて瑞應山と號す土岐美濃守政頼後頼法號南泉寺殿
 の菩提寺にて其墳あり 寺領御朱印 五石二斗七升 其他の 善性寺 圓教寺
 般若寺 洞照寺 多福寺 千手院 永光寺 妙光寺 妙樂寺 等各宗派の寺
 院あり 古城 同村の山の上にある 城主逸見又太郎惟長の 分派系譜に新羅三郎
 義光七代孫逸見又太郎惟重子 又太郎惟長承久乱之時渡美乃國大井口依其賞賜美乃國
 大桑郷了と見え惟長の弟 逸見大桑又三郎重氏大桑郷相傳號逸見大桑法名定心 重
 氏の子 大桑太郎頼隆頼隆の弟 大桑逸見七郎氏義氏義の子 大桑七郎惟泰と見
 えたりみなこにすめりその後土岐頼益の弟 大桑駿河守頼名こに住しなるべし頼益
 の子 左京太夫持益もはじめ守護職にうけ給ひさりし時大桑郷葦野城山のにすみしといふ
 大桑兵部太輔定頼の美濃守政房の弟なるか明應の頃大桑山の城を改め築きすみて明應五
 年兄政房に屬きて軍功あり 船田後記に新府主政房起義兵自革手進馬於加納兵部少輔

大桑某扈從之とある是なり其後土岐右衛門尉頼純はじめ美濃守政頼といひて當國の守護なり 永正十四丁巳年父美濃守政房の家督を繼て河手の城にありし逆臣長井政利政利のち道三に追ひれて天文のはじめ越前國に退きしが同十六丁未の年從弟朝倉義景の援けを得て兵を發して歸國し政利を誅伐せんとして大桑の城に來り同年十一月十七日病卒年四十九法号を南泉寺玉岑玄珪居士といひ其墳當村南泉寺にあるよし土岐系圖に見えたり 頼純の弟土岐左京大夫頼藝頼純越前に退きしのも土岐の惣領となり美濃守護をうけ給り河手の城にありしが天文のはじめ當城にうつり住めり 江濃記に其頃美濃國大桑に御座す土岐頼藝の代に成て道三が威勢つもの一國併呑して土岐屋形の威のなごる事をつり道三をほろぼして國を治めむと謀り忽に道三と不和になり合戦數度に及ひけり然ども道三合戦の道にありて近國無双の大將なれば誰か是に向て勝利を取るべき終に土岐殿打まけ尾張國へひらき給ひ齋藤の土岐殿を追出し奉り一國不殘治めけり爰に遠山徳山など云もの尾州越州へ下り織田朝倉をたのみ美濃へはたらきければ齋藤道三小勢にて稻葉山より打て出て越州尾州勢を悉く追散し一戦に勝利を得ければ其後の他國よりはたらきなく彌威を近國へ振ひけり其後尾張の武衛殿並京公方様より御あつかひの御使ありて齋藤と土岐殿和談ありて土岐殿大桑へ御飯座有り道三の大桑へ出仕して其後上洛有り子息兩人公方へ御勤仕申けり頼藝の隠居あり子息次郎殿屋形になごり給ひけり次郎殿の則道三諱に取り

奉るかゝて五六年美濃國治り諸人安堵の思ひをなしける處に美濃諸士悉く齋藤に伏し土岐殿を背天文十六年十二月十七日頼藝並當屋形次郎殿鷹野に出給ひける隙をうかゝひ道三稻葉山の城より人數を出し大桑の屋形を責落しければ土岐殿衆悉く敗軍し頼藝も合戦すべき手だてもなく信州へ落行後に甲斐へ落給ひ武田を頼み給ひけり屋形次郎頼充其年二十四歳にてたけくいなむ大將なれば勢をあつめ一合戦と志さし爰かしこにひかえり 勢をまち給へども御運の末にや美濃衆悉に道三に隨ひ普代舊功の侍一人もなく落行ければカキ 神戸の渡迄落給ひ舟にのり給へり道三方追かけ奉りければ舟なくして川端にて各々音をあげあの船頭よ其人をこぎかへさぬにたいてり一類子共皆々罪科に行ふへしいかに船頭こぎかへせよと叫びければ次郎殿是を聞いていやしき船頭に舟をこぎかへされての無念とたほしめしいかに船頭此舟こぎかへせとて舟をこぎもこし長刀のさやをはずし岸へ飛て下り向ふ敵八人手の下に切ふせなきたをし給へり其勢に恐れ爰かしこにむらかりたる勢散々に敗北しければ舟にのらむと販り給へ共船頭もにげ失せ舟もなければいかりをたさへ岸に立給ふ敵是を見て十方より射すくめて大勢押よせ終に打奉るあつれどもをろかなり順て御首とり道三に見せければ則御孝養の爲に承陸寺に治め奉る其時何ものかしたりけむ道三陣屋の前に一首の狂歌をよみて立たりけり 主を打ち婿をこらすの美濃尾張昔の長田今の道三と見えたり此江濃記に頼藝没落の時その次男次郎頼充あるいは頼師又頼次

の事のみかくるしてその兄太郎頼秀の始末をさるしもらせり頼秀のち頼榮と改め土岐宮内少輔又參河守と稱し幼名を猪法師といふ頼藝の長男にて大桑に在城なり父頼藝愛太子山權現を信仰し猪の彼神の使者なればとて此童名を猪法師丸とつけしとぞ齋藤秀龍つねに頼藝に昵近し君寵にはこり榮曜のあまり猪法師の生質穎悟にして國中無双の美童なりし男色に迷ひ折々艶語を通りしけれぬ法師丸其無禮過度を憤り其傳村山越後守が末子市之丞と語らひ合せ折を得て夜中に秀龍を闇討にせんとし或時の猪法師を始め一族家中の少童小里孫四郎原彌三郎蜂屋彦五郎ねど其外數十輩の矢を射けるかたはらをすぎて秀龍出仕しけるを彼若者共矢射かけて追かけんなんどしければをりく危難を負にけり秀龍思慮深き佞人なれば此猪法師かくてたがひなば我身のためあじかりなんと思ひ頼藝へ様々諷言を構へ太郎御曹司の若年なれど御叔父揖斐五郎殿と心を合せ御叛逆の企ありて御世を蒙給ひんの結構あるよし度々詞をつくして申けれぬ頼藝にもと思ひ且不審のせしかど流石兄弟父子の間なれの隔心のありながら重き沙汰にも及ばず打過たり其後秀龍揖斐五郎光親鷲巢六郎光教ともしに頼藝乃弟なりに對し無禮逆意のふるまひをなしたれば光親光教憤り頼藝の許に参りて秀龍御寵愛にはこり太郎を蔑如し御二門の面々へ法外の無禮をなすこそ奇怪なれ願はくば御ゆるしを得て秀龍を誅戮せんと請ひ申ければ頼藝かへつて此人の言葉を疑ひ其儀の許容なき太郎猪法師を勘當しひそかに秀龍に命じて光親光教を亡さ

ひとぞせらける猶秀龍が讒に依て猪法師を殺さむと構へらるよし聞えければ傳村山越後守入道國島監物などかけらひ入道が館に猪法師を迎へたりぬかへりければ秀龍軍兵を發して越後入道が館にそむかひける猪法師方の勇士とも鶴洞山に陣とり敵を曠野に引受て待かけたり揖斐五郎衣斐與左衛門原紀伊守石谷播磨守片桐總殿遠山加藤太松井越後守など少しく馳加り數日合戦に及ぶ尾張の織田信秀其沙汰を傳へき父子兄弟の和睦を扱ひむとて河手まで來られ其日の軍を押しめ猶猪法師の母方の親族近江佐々木定頼越前の朝倉義景など示し合せ父子の和睦をぞ致されけるされども秀龍が奸謀解やらす終に大乱を起し大桑を攻とり大守頼藝を追退けけりその合戦に太郎法師をはじめ村山國島中島等はげしく働き揖斐五郎も早速駆付防ぎ戦ひければ其時頼藝疑ひ晴れ先非を悔て太郎法師光親光教等の勘當ゆりけるとぞ猪法師織田備後守信秀の烏帽子子となりそれが一字を授かりて頼秀と名のりけるよし百くさねに見えたり土岐系圖に頼秀の子四人ありて兄を土岐越後守光義といふ二男土岐織部正昭頼將軍義昭に従ひて昭字を賜ふ三男稻葉鞞負佐頼長の外祖一鎮の養子となる末子土岐掃部助榮興といふよし見えたり又同系圖に頼藝の子供をのす兄の頼秀前にいへり二男次郎頼次號土岐左馬助の事實も前にあるす彼江濃記にさるせると此系圖にいへるとの甚たかへり系圖にの神戸川にて戦死の事なき父頼藝天文十六年當城退去の後京都又大和等に住む秀吉公に仕へ河内國古市郡西浦村にて五百石を

領すのち東照宮に仕へ奉り舊領元のとく賜ふ慶長十九年十一月十日山城の伏見にて卒法號を南陽院見松宗之居士といふよし見之たり 江濃記 の文と合せ考ふへし三男の早世して其名聞へす四男四郎左衛門頼宗の大桑落去のち東照宮めし給へとも病氣によりて出仕せず子孫紀伊君に奉仕す五男五郎左衛門頼重のち齋藤越前守と稱す齋藤頼重實ハ頼隆の胤子なれハ其ヨリミに大桑没落のち扶助して齋藤氏を稱せしむのち秀吉公に仕へ五百石を領し御一統の後東照宮台徳院君へ仕へ奉り慶長十三戊申年十月十九日卒その外女子も一人ありしよしまるせり頼藝大桑退散の後の事ハ大野郡岐禮村の條にくわしくまるす合せ見るべし

赤尾村 大桑の南にあり 御料 五百九十六石一升五合 村社 勝軍神社 岸

見神社 臨濟宗 泉藏寺 あり

藤倉村 大桑の西南にありて 伊自良十村 のうちなり 同 三百二十五石七斗

一升五合 村社 松尾神社 臨濟宗 慈福寺 眞宗 香教寺 あり伊自良の谷あい廣き地にて數村にわたれり 散木弄歌集にいまらのせにあしろうつと聞て ひをも世を過かたしとや思ふらむいまらの瀬にもあじろうつなり ともあるこの事か 伊自牟良君 釋日本紀に上宮記曰意富當等王 又名太郎子若野 彦主人王男大 彦二侯王子也 娶牟義都國造名伊自牟良君女子名久留比賣命一生汗斯王 又名 迹天皇父也 とあり 伊自良古城 伊自良次郎右衛門すみしといひ傳へまた頼藝の家士陰山

掃部助一景もこゝに住じよしいへりのち齋藤に屬し軍功あり總田眞紀の天文十六年十一月大柿城攻の條に陰山掃部助獲千秋紀伊守所帶刀名志丸相傳惡七兵衛景清所帶陰山氏於大柿城傍牛屋之寺内踞胡林指揮軍事時從城内以木鏃射如雨中左眼拔去之再中右眼云云 と見えたりあざ丸の劔の所持の人の眼にたゞれる事をいへり其城地當村か又他村か追て聞訂すへし 煎茶 も伊自良谷の名産にて此あたりの村くより出す

大森村 藤倉の南にあり 伊自良郷 あり 御旗本領 三百八十七石七斗三升

一合 村社 八幡神社 天台宗 三光院 寶泉寺 曹洞宗 東禪寺 あり 愚堂利尙 ハ名を寔といひて臨濟派の高僧なり天正五年當村に生れ幼年にて僧となり京都妙心寺にて修學し慶長の末京より歸國し小島の瑞巖寺に住み北方の慈溪寺を兼帶す寛永五年 後水尾天皇の勅により將軍家光公の命を蒙り紫衣を免され龍顏を拜し奉るのち山城山科の花山寺に移り寛文元年遷化勅して大圓宗鑑圖師と謚す當國細目の大泉寺岐阜の少林寺奥條の眞正寺等この國師の開基なり

四日市場村 大森の南にありて 伊自良 のうち也 御料 七十四石四斗六升二合
小倉村 大森の西にありて 伊自良谷 のうちなり 同 六百二十六石六斗四升
三合 村社 日吉神社 臨濟宗 黃梅院 穩溪院 あり

洞田村 小倉の北にあり 伊自良十郷のうち也 御旗本領 三百七十六石四斗
 合九升五合六池原村 洞田のうち也 村社 田社神社 白山神社 眞宗 金證寺
 松尾村 洞田の北西にありて 伊自良のうち也 同 三百七十九石二斗七升四
 合 村社 稻荷神社 臨濟宗 大通寺 曹洞宗 大喜院
 掛村 洞田の北にありて 伊自良谷のうちなり 御料 二百八十二石八斗七
 升九合 岩屋堂 頗に妙音寺とあり 當國卅三所觀音の十四番なり 村社 日吉神社 臨濟
 宗 東光寺 大福寺 龍興寺 不動庵 眞宗 大性寺
 長瀧村 掛の北西にありて 伊自良のうち也 尾張御領 立百十八石五斗三升
 四合 濃陽御行記に三百四十四石 八升七合 濃陽志畧に三百十石 名古屋まで十二里あり 釜嶽 濃陽志畧に里民呼白
 釜溪 連亘數里 絶頂有池 四時不涸 此山雜樹葱蒨 岩石巉岫 最為奇也 見へたり 長瀧寺
 岸見山 伊自良の高山なり 伊自良川 此山中より流れ出常氷なる砂川にて 洪雨の
 時水いつ楮 伊自良同の中諸村にて作る然れとも紙にすかず 武儀郡のうち紙を製する
 村くへ賣渡す 七社權現社 當村と掛村と持合の生土神なり 甘南美寺 眞宗 臨濟宗
 にて白華山と號す 開基の高阿彌名知阿彌本尊の千手十一面觀音 脇立不動毘沙門なり 當國三十三

所十三番に配す
 富山村 小倉の南にありて 長瀧の枝郷なり 同御領 九十一石四斗七升六合
 本郷長瀧より南の方五十町隔つ名古屋へ十一里余あり 東光寺 富士山と號し 臨濟宗東
 陽和尚の開基なり 本堂樓門寶塔鐘樓等嚴重なる經藏一切經を納む輪藏なり 塔頭一區あり
 て臥龍菴といふ
 上願村 掛の東南にありて 伊自寺のうちなり 御料 百七十一石五斗二升四
 合 白山神社 臨濟宗 香林寺 あり
 平井村 掛の東北にありて 伊自良谷のうち也 御料 御旗本領とも 四百七
 十七石一斗三升九合 村社 縣神社 臨濟宗 仙洞寺 あり
 大岡村 藤倉の北にありて 伊自良十郷のうちなり 御料 三十一石三斗七升
 五合
 畑野富永村 椎倉の北にありて 岩村の枝郷なり 御旗本領 二百六十八石二升四合
 村社 神明神社 白山神社 眞言宗 三光寺 臨濟宗 金龍寺 寶林寺 桂洞
 谷 庵長泉寺 林泉寺 あり 輪藏 二百六十八石 眞宗 大性寺 天龍寺
 青波村 富永の北にあり 岩村 松平能登守 領 百四十三石六斗八升七合 村社

神明神社 あり

谷合村 青波の北西にあり 領同 二百六十一石二斗六升六合 村社 天鷹神社

浄土宗 善導寺 及 観音堂 十一面の像を安置し濃民曰井氏知事す當國三十三所の

十一番なり 光明寺 境内にありて妙見堂繁榮す 桂泉酒 桂の清水といふ名水にて

かもしてうる所の名物なり 曰井氏宅趾 村内にあり曰井平太夫すみしよしひつたへ

たり

片狩村 谷合の北にあり 同領 三十四石八斗六升九合

日原村 片狩の北にあり 同 十一石五斗九升五合

圓原村 日原村の北にあり 同 十八石九斗 万所洞 白岩洞 圓原の枝郷な

り村社 北野神社 五位神社 熊野神社 臨濟宗 大雲寺 あり

今島洞 圓原の枝村 同 一石二斗四升 的地なり

神崎村 日原の西の方にあり 御料 二十七石八斗 村社 白鬚神社 臨濟宗 長

善寺 あり

井往洞 神崎村の枝郷にて 同 三斗七升 的地なり

中越洞 神崎村の枝郷 同 五斗九升 的地山深く地廣し三保富山などいふ高山あり

小倉洞

も神崎村の枝郷にて 同 一石六斗 的地以上みな御料なり

葛原村

當郡のうち北のはてなる里にて其地廣く數郷にわかつてり 同 四百九十四石

一斗八升 郷社 篠倉神社 浄土宗 庚申庵 臨濟宗 西藏寺 蓮華寺 あり 法

幢寺 葛原のうち岡村にありて高野山と號し臨濟宗なり西國卅三所の觀音を安置し當國三

十三所の十二番に配す

新撰美濃志十八の卷
 尾張文園岡田 啓編輯
 美濃簡齋神谷道一修正
 武儀郡 上
 高野宮大明神社
 神明社
 天神社
 葛屋神社
 白鬚神社
 八幡神社
 高野宮大明神社
 神明社
 天神社
 葛屋神社
 白鬚神社
 八幡神社
 高野宮大明神社
 神明社
 天神社
 葛屋神社
 白鬚神社
 八幡神社

新撰美濃志十八の卷

尾張文園岡田 啓編輯

美濃簡齋神谷道一修正

武儀郡 上

上麻生村

尾張御領八百四十九石七斗四升
 高野宮大明神社
 神明社
 天神社
 葛屋神社
 白鬚神社
 八幡神社
 高野宮大明神社
 神明社
 天神社
 葛屋神社
 白鬚神社
 八幡神社

高野宮大明神社

飯高村

上麻生の枝郷にて本村の東北にあり 同 八十二石一斗四升八合 高帳に

九石三斗六升 名古屋へ十三里あり 飛驒川 村の東にあり神淵谷水源篠洞村の袋坂邊の山

より流れ出此本郷と飯高との間にて飛驒川に落合ふ其あたり兩岸巨石多く水漲りて景よし川巾

はなはた狭く丈餘に過ぎる所ありて水勢洶湧して殊にめづらか也そこを餓鬼咽といふ又其邊の

西の岸に水の湛たる深淵ありて赤池といふ一株の老松ありはたへ松と呼びて土人 を祈る戸刈

といふ所に神淵谷にわたせる板橋ありて戸刈橋といふ 野宮大明神社 神明社 天神

追洞村

大洞と 飯高の成亥の方にありて上麻生の枝村なり 同 八十三石一斗四升

二合 高帳に二十八石七斗八升八合とあり 名古屋まで十三里 神明社 八劍社 八幡社 愛宕權

現社 ともに村うちにあり

室兼村

追洞の北にありて上麻生の枝村なり 同 五十七石二斗三升 高帳に二十

七石九升八合とあり 名古屋まで十三里余もつとも山深く幽邃の地なり 白鬚明神社 熊野權現社

ともに村内にあり

葛屋村

室兼の北にありて上麻生の枝邑なり 同 九十三石五斗四升六合 高帳に

四石三斗九升 名古屋へ十三里半 牛頭天王社 村うちにありて攝社に 八王子祠

二合とあり

勝之洞村

勝洞また勝野 飯高の戸刈橋より三十町ばかり北の方飛驒川の淵にありて上麻生

の枝郷なり 同 二十五石五斗六升二合 高帳に二十二石 一斗三合とあり 名古屋へ十三里あり 大

崎村 柿ヶ野村 勝之洞のうちなり 舟倉權現社 村内に鎮座す攝社に 若宮

祠 ありまた 天神社 神明社 ともに村内にあり 七宗山 村の北の方にあり其地廣

く山もひくからず東西五里南北四里ばかり根廻り十三里餘ありて東南の飛驒川を限り上麻生

坂東 桐洞 笹洞 神淵 五ヶ村の地に亘れりもと金森五郎八入道法印の領知の山なりしとい

ふ諸木生茂り國家の利をなす事多し杉檜楡榎樺椈梅朴榎小松十種の御留木山にてみだりに伐

る事を禁せらる此柿ヶ野に御山守ありて 多々羅氏 といふ其事をつかさどり抜荷改の御

番所もありくはしくの圖を見て知るへし 賤の小手巻 に先年上麻生にて蟒の五六間程なるを

鉄炮にて打殺せしよし 獵人與兵衛八右衛門兩人して去るしたるの此山うちにての事なるべし

大利村

坂東六ヶ村のうちにて上麻生六ヶ村の北東の方にあり 同 百八石七斗三升

二合 高帳に九十五石五斗二升一合とす また坂東六郷合せたる太閤檢の元高四百 名古

屋まで十七里あり 大利渦 飛驒川のまかりたる所をいふ 濃陽志畧 に在大利村下河

岸屈曲巨岩駢置洪水時河上流材盤旋入石間一役夫止之大爲民利と見えたり 茶 坂東

の村に産す製して四方にうり租税を輸す助とす之茹蕪其此邊諸村に同候つくが諸
方に賣る山間の地にて猪鹿甚多く五穀菜蔬を食ひ損す弱の味故然して彼獸類喰ひず且あた
も申しからざれば皆植つくりて利を得といふ 楮も多かつくりて四方にうりて紙

大味にづく事なし 白山権現社 八幡社 村内にあり 臨川寺 濃陽志等一に在

相摸村 大和の北にありて坂東の内なり 同 四十六石七斗九升八合 高帳に三
二升とあり 名古屋まで十七里あり 山王権現社 村内にあり

廣島村 相摸の北にありて坂東のうち也 同 百廿二石七斗八升七合 高帳に百
升とあり 名古屋八十七里あり坂東の七宗山の峽なる里にて田野の多きなく狗行記に凡山八百十

二町五段五畝十五歩とある如く山のみひろき地なれど其うち此廣島の田圃多く高も外の村よ
りの多し 天神社 白山権現社 山王権現社 池田村民祀れり 廣通寺 石城

新津村 廣島の北にありて坂東のうちなり 同 八十四石八斗三升一合 高帳には
五斗一升五合 名古屋まで十八里あり 熊野権現社 神明社 村内にあり

村君村 新津の北にありて坂東のうち也 同 六十一石六升六合 高帳には五十三石
六斗四升七合とあり

名古屋へ十八里あり村君といふ名は海邊に住む蝦人の事にて和名類聚抄にまたこの
は物語 等に見えたる皆漁父なりされども 夫木和歌抄に中務親王家歌合苗代二權僧正公朝

むらさみめあめのなが田の苗代に神のくだせる種をすらしと云ふは日本紀の神代
巻にいへるあめのむらさみに同じて漁父の事との聞へす今いふ村長の事なりこの村名も

と坂東數郷のうち村長が住たる地にて斯呼ひそめし物なるべし 山王権現社 白山権現
社 ともに村うちにあり

小川村 新津村君の西の方にありて坂東のうち也 同 百石八斗六升一合 高帳には
六斗七合とあり 名古屋まで十八里あり 常蓮寺坂 小川より未申の方神淵の葉須村に至る

見えたり 小徑七宗山のうち北の方にてさかしき嶺なり 權現社 白山権現社 明神社 大明
神社 四社ともに村内にあり

金山村 坂東の北にあり 同 元高 六百六石六斗四升三合 今高 七
百九石七斗三升五合 枝郷 四所 中切 井尻 奥金山 田淵 川を隔てたる

地な といふ名古屋は十八里あり北東の方飛驒にゆく往還にて豊饒の町屋あり則飛驒の國界
にて是より高山まで十九里あり 飛驒川 村の東にあり飛驒の山井より流れ出此あたり數十

里を経て河合村に至り木曾川に落合ふ此川水多く奔騰して漲りなればけしといふと此あた

り川中廣く水勢穩なり井尻の下にて巨岩重疊してただやかならず 船渡 町の東のはて
 にあり川中を堺として向ひに飛驒國益田郡下原村なり渡航に下原の枝郷大船戸村の持なり 弘
 仁式 また 延喜民部式に飛驒國金山河渡子人免係役とあるせり往古より渡守の飛驒の國
 につきたるを知るべし高山街道にて川より下原の本郷まで十二町あり 坊山 村の西にあ
 りて高き元山なり 長洞 村の西桐洞村の堺にあり山の中所くに金堀し穴ありむかし銀
 鑛銅鑛等を探し穴にて鑛を穿り多く積置しが今も穴の口に残りありて其形火打石の如く其性
 銅あり鉄あり鉛あり各り其色をなせり金銀鑛の少なし金山といふ村名のこゝに起るなるへし
 白山權現社 諏訪明神社 奥金山にあり 八幡社 中切にありて修驗智奉院掌
 三輪明神社 井尻にあり 長福寺 曹洞宗にて金山と號し下有智村龍泰寺の末
 寺なり 體藏寺 曹洞宗當村長福寺の末寺なり 水月庵 體藏寺に同じ 古城跡
 村うち飛驒堺にありむかし土岐伯耆守頼貞こゝに居て 金山伯耆守 と稱すその後 毛
 利左近慶長五年まで住しよし 名細記に見えたり
 桐洞村 川を隔て、金山の井尻の西にありもと露原村といひしを延寶年中改めて今の名とす
 同 元高 太閤 三百八十八石三斗 今高 六百八十九石三斗三升 支郷
 二所 大谷戸 開洞 といふ名古屋まで十六里余あり 水精嶽 當村と坂東と兩邑

に巨り巖の頂を堺とす官禁ありて山内の樹木を伐る事なし麓に白石英ありて明徹なり此ゆるに
 水精嶽と名づく 沙田湖 篠洞村の山より出づるを經て金山に至り飛驒川に入る俗に逆流
 川と喚べり 茶 綿 乾柿 當村の土産なり 諏訪明神社 白山社 八幡社
 天神社 ともに村内にあり 林泉寺 瑞應山といひて臨濟宗蜂屋村瑞林寺の末寺なり
 篠洞村 桐洞の西にあり 同 元高 太閤 二百二十八石九斗七合 今高 三
 百七十石五斗七合 本郷洞 與市野 前山 袋坂 黒川 の五所にはかる名古
 屋より十六里あり 高岡嶺 村西にありて遠方よりも見ゆ 釜嶽 七宗山の東にあり
 材木を伐出す事制禁なり 袋坂 神淵村の境なる飛驒往還の坂路なりむかし宗祇法師こゝ
 にて歌をよみしよし里民いひ傳へたり 乾柿 茶 を名産とすそのうち名茶 幾里 前
 山の素民 長尾氏製して毎年名古屋に献上す賣物にのする事なし九條相公御詠を給ひてかく
 名づく其一軸を家に所持すその歌 いく里か月のひかりもにはふらむむめさく山のみねの春風
 白山權現社 縣明神二社 熊野權現社 天王社 神明社 ともに村民ま
 つれり 自得菴 臨濟宗神淵村龍門寺の末寺なり
 戸路瀬新田 篠洞村の枝郷あるひに坂東の 同御領 六町二反四畝二十七歩 の地也 元和
 杉洞村 篠洞の南にありて神淵十郷のうち也 同 百九十八石四斗六升九合 高帳

高帳に百八十八石三斗四合とある元高なりまた神淵十ヶ村の惣高合千七百五十三石八斗名古屋

可測計五里あり箭括嶽の神淵麻生川浦郷に勝り高く秀で遠方より見ゆ小豆坂の濃陽志客に飛驒往還之路也

綿茶の産地なり此の土産なり松尾大明神社白山社區神明社白山社

萬場村の杉洞の南にありて神淵のうちなり同百五十七石三斗三升二合高帳に石七斗九升六合大上宮社白山社神明社

葉須村の杉洞の東の方にありて神淵の内なり同九斗七石七斗八合高帳に六斗二

中切村の萬場村の南にありて神淵のうちなり同三斗三升五斗五升六合高帳に二

寺洞の龍門寺の末寺なり

寺洞村

中切の東にありて神淵のうち也同百七十七石八斗三升六合高帳に百

二升とある牛頭天王社神淵十郷の惣社と稱す例祭六月十四日車樂二輛を出す祠官長

塔頭一字岫雲軒といふ季瓊日録永享十二庚申八月廿八日濃州龍門寺宗贖首座吹

時的女土岐の總領家なり曆應二年二月二十三日卒定林寺殿卓然存孝大居士と號すとかや

惣社牛頭天王の寺の東北にありその神のいます故郷一山か神淵村と名つけしよしひ

大橋村

寺洞の南にありて神淵のうちなり同百八十七石八斗三升高帳に百五

子安明神社白山權現社春日大明神社藏王權現二社

大塚村

大橋の西にありて神淵のうち也同九十二石七斗二升四合高帳に八十

石四斗六升六合 高帳に百九十二石九升 津保川 の村うちを流る 天井潭 の殊に

深くして水色藍のごとし 水車 の豪農加藤喜比右衛門製して民用をなす 八幡社 の

保十三村の惣社と稱し宮脇といふ村名も此社より興りしといふ 天神社 白山権現社

八劔大明神社 若宮社 神明社 も村内にあり 岩本寺 の神護山といひて臨濟宗

關村梅龍寺の末寺なり

船山^{フネ}村 の明ヶ島の南西にありて上保のうち也 同 百五十石三斗五升九合 高帳に百三十

二石三斗七合とある元高なり 富士権現社 藏王権現社 神明社 ともに村内にあり 明光寺

の日榮山と号し臨濟宗關村梅龍寺の末寺なり 此地より郡上郡那比村に通する間道あり同郡八

幡町に出する事を得

鴈會禮村^{ヱンレ} の船山の南にありて上保のうちなり 同 五十七石八斗八合 高帳に四十四石八升三合と

ある元高也 白山権現社 村内にあり

武儀倉村 の鴈會禮の南東にありて上保の内なり 同 九十四石九斗五升七合 高帳に八十石

一斗五升二合とある元高なり 天神社 白山社 ともに村内にあり 美濃國神名記 に正六位上真木倉

明神とあるは是等の神社が真木倉と武儀倉との轉し安し 武藏庵 の臨濟宗にて下保村天正

寺の末寺なり武儀倉の村名を略して庵號とす

祖父川村 の武儀倉の西南にありて上保の内なり 同 三十八石七斗五升八合 高帳に二十七

石八斗二升五合とある元高なり 八幡社 神明社 白山社 天王山 山神社 ともに村内にあり

岩山崎村 の祖父川の東にありて上保のうち也 同 二百十石六斗七升七合 高帳に百二十六石

七斗五升二合とある元高なるへし 石灰 の農業のあわひに少しやきて利を得土産とする程にはあらず 水

無明神社 村内にあり 雲光寺 の洞龍山と號し臨濟宗下保村天正寺の末寺なり

粟野村 の岩山崎の東にありて上保のうち也 同 九十九石一斗九升五合 高帳に九十二石九

斗五升五合とある元高なり 鈴越峠 の東の方中保の方へ出る道にあり 八幡社 の大社にて末社に

春日明神祠あり 神明社 稻荷社 ともに村うちにあり

町 村 の岩山崎の北にありて上保十三村のうちなり 同 百石七斗三升五合 高帳に百十

三石八斗一升九合と見えたり 諏訪大明神社 神明社 ともに村内にあり 御行記 には水無大明神社天満宮社當村にあるよゝまるせり 古

城趾 の稻葉右京亮住しもの郡上に遷りしと里民のひ傳えたり 稻葉系圖に侍從右京貞

通の伊豫守通朝入道一鏡の子にて信長公に仕へ天正十二年の頃掛斐より郡上の八幡の城にうつ

りしよしまるせり其頃迄はらく此城に在りしなるへし 御行記 には稻葉彦六の城趾とまるせり彦六典通は貞

通の嫡子なれば當城にありといへるもさるべき事なり

町村あるひの町組といへるは此城下に町屋ありし故の村名なるべし又田圃の字に殿町牟屋な

といふ地のあるも城下なりし故也とぞ

比根

日根と

村

神淵の奥田の西の方上保の大洞の東の方にありて中條六ヶ村のうち北のはて

なる里なり 同 五十五石四斗九升一合 高帳に百十九石二斗九升一合とあり 中

二斗三升その今高の七百 保六郷合せたる太閤檢の元高六百九十九石

十二石四斗一升七合なり 名古屋まで十三里餘あり 白山社 大明神社 ともに村内に

温井

拭井と 村 日根の南にありて中保のうち也 同 百四十九石八斗六升三合 高帳

に百六十二石八斗五升 白髭大明神社 村内にあり 觀音堂地蔵堂庚

多多羅村

温井の南にありて中保のうちなり 同 九十六石九斗三升一合 高帳に七

斗三升八合と 天神社 村内にあり 觀音堂庚申堂

間吹村

多々羅の西にありて中保のうちなり 同 百五十六石七升 高帳に百九石八

斗七升四合とあり 神明社 諏訪明神社 八幡社 天神社 ともに村内にあり 藥師堂庚申堂

若栗村

間吹の西にありて中保のうち也 同 百十九石五斗二升五合 高帳に百

斗八合と 弓取大明神社 村内にあり 美濃國神名記 武儀郡正六位上若栗明神とあ

瀨柳

此一寺のみありて外に寺院なし 正榮寺 天徳山と號し臨濟宗下保村天正寺の末寺なり中保六村のうち

瀨柳

若栗の南にありて中保のうちなり 同 百三十四石五斗三升七合

高帳に八十石六斗六升 大明神社 白山社 ともに村内にあり 阿彌陀堂觀音中保諸村の土産

大門村

柳瀬若栗の西にありて下保七ヶ村のうち也上保中保下保合二十六ヶ村を津保庄とい

大門村

ふ大門の津保川の西岸なり 同 六十七石九升九合 名古屋より十二里餘あり 城山

大門村

村の西にありて高き峯なり山上に老樹多し山の麓に大門鹿柴等の名残りて古城の跡なるよ

大門村

しまるけれどもいつの頃誰人の住しかつたへなけれぬ今の知りがたし 熊野社 白山社

大門村

もに村内にあり

町

大門の南にありて下保の内なり 同 百四十五石三斗二合 むかし稻葉傳

町

右衛門といふ人此あたりに城を構へてすみしといひ傳へ町村大門村等の名の残りしよし 徇行

町

記 にあるせりされども稻葉系圖に傳右衛門といふ人見えす傳説のあやまりなるへし 南宮

大明神社

村内にありて若宮を配せ享る 富士權現社 諏訪明神社 八幡社

山王社

白山社 若宮社 ともに村内にあり 天正寺 徳鄰山と號し臨濟宗蜂屋村

瑞林寺

の末寺なり 巡按日記 名古屋世臣神 下保村 天正寺 僧云是豊太閤所創建 晝哺畢取 前路

西洞村

町村の西にありて下保のうち也 同 百二十一石七斗八升二合 山王社

西洞村

入上有知云云

白山社 ともに村内にあり農家 佐藤某 が家に文祿年中の古證狀あり其文左のごとし
 一津保之内下之保山御年貢相定事 一西洞山 一ちのふ山 一くつわの山
 一いほう山 一へなり山 一長ほう山 一屋たき山 七ヶ所之物成 拾
 八石 京升 相定申候此上少も非分不可有之候御年貢被請候間御給人方用
 木以下被切取候へく何時も兵部少輔所へ可被申越者也 文祿三年九月五日
 たらき村くつわの村いわかせ村に 右庄屋組頭中 門池七右衛門長重判 各務
 しほら村との村まら村大もん村
 勝右衛門久恒判 染尾左介忠直判

殿

村 町村の南にありて下保の本郷なり 同 百五十六石八斗三升三合 下保七
 合せたる太閤檢の元高八百二十九石 石見檢知高の千 土産 茶 煙草 絲 綿 上保
 百廿八石六斗四合 今の高千四百四十六石三升五合なり
 中保諸村に同し 諸草 下保諸村にありて松茸香茸殊に多し 天神社 寄宮大明神
 社 神明社 ともに村内にあり 日龍峯寺 高澤山にありて大日山と號し眞言宗高野
 山増福院の末寺なり寺傳にむかし飛騨國に兩面四臂の異人ありしが此山に來りて毒龍を制伏す
 其後行基菩薩伽藍を創建し千手觀音の像を安置す山中に千本檜といふありて枝葉茂り立るが箒
 木のことは是彼異人が携來りし杖を地に挿み置しが生ひのびし也といへり ありては彼異人飛騨より當
 ち靈夢の告により觀音の分身となる 其後弘法大師佛堂を開基すとす されども其異人の 日本書紀 仁徳天皇六十五年飛

驛國有二人曰宿儺其爲人壹體有兩面一面各相背頂合無項各有手足
 共有膝而無臍踵力多以輕捷左右佩劍四手並用弓矢是以不隨皇命掠
 畧人民爲樂於是遣和珥臣祖難波根子武振熊而誅之 見え彼佛法のは
 じめて渡り來し欽明天皇の御時よりいはるかにさきつかたの事なれば夢の告などにて觀音に變
 身するよしあるべからず附會の説甚しく信しがたし享保丁未の年伊自良の黃梅院の僧が誌し
 たる 美濃國觀音順禮記 に此寺開基の兩面四手上人中興の尼將軍也とかけり兩面四手上人と
 彼宿儺を大徳の法師なりと心得たるか誠に愚蒙の至り笑ふに堪たり山上に觀音堂ありて本尊
 千手の行基の作脇立の不動毘沙門又本尊の右に弘法大師の像あり當國三十三所第廿五番なり二
 王門の左右に 大日坊 東光坊 の二院ありて寺務を掌る高閣山崖に倚りたる京都の清水
 寺のごとく風景殊に勝れたり境内に 藥師堂 大日堂 多寶塔 二重 鐘樓 樓門
 あり又堂の側に小池ありて岩屋地藏を安置す水清潔にして龍宮に通すといひ旱魃に村民雨を
 祈りあるひの眼病の人目を洗ふに必驗ありといふ寺傳に鎌倉の女將平政子雨乞ありしに應驗著
 かりけれの當國の守護梶原景時に命して水田を寄附ありしか亂世に廢絶し天正年中上有知の城
 主佐藤氏寺産 六石 を寄附し今に傳ふといへり鎮守 白山權現 の祠も山内にあり
 阿彌陀寺 の光明山といひて臨濟宗上有知村清泰寺の末寺なり 神德寺 の稻荷山と號し

同宗當村天正寺の末寺也 福田寺 〇書嶽山といひて同宗下有知村龍泰寺の末寺なり

上野村 〇殿村町村の東にありて下保のうちなり 同 二百二十五石五升四合 稻

荷社 六社明神社 白山社 八幡社 ともに村うちにある

多良木村 〇上野の南にありて下保のうちなり今多羅木ともかく 同 五十二石九斗四

升 津保川 村の南を流る 白山社 天王社 ともに村内にある

轡野村 〇上野多良木の東の方にありて下保のうち也 同五十九石九斗九升 石茸

〇山中の石崖に生す 白山社 村内にある

神野村 〇下保の南の方にありて富本庄なり津保谷街道村うちをつらぬき通る 暇小手巻 に

神籠村天神宮の山に鎌籠といふあり矢籠竹二本自然と節並ひ生す故に神籠村と名づく今に矢籠
を貴ぶとあるせりと 徇行記 にいへりされとも小手巻の原本松平氏の藏書なるを見るに土岐

郡神籠村云云 とかけり考ふへし 神皇正統記 に嵯峨天皇深く佛法をあかめ給ふ先世に美濃

國神野といふ所にたうとき僧ありけり橘大后の先世にねんごろに給仕しけるを感じて相共に再
誕ありとぞ御諱を神野と申けるも自然にかなへり とあるしたる神野のこの事か 文徳實

錄 に 嘉祥二年五月辛巳嵯峨大皇太后崩壬午葬大皇太后于深谷山故老
相傳伊豫國神野郡昔有高僧一名灼然稱為聖人有弟子一名上仙住止山

頂精進練行過於灼然云云上仙命終先是郡下橘里有孤獨姥號橘姬傾

盡家産供養上仙上仙化去之後姬得審問泣涕橫流云吾與和尚久為檀

越願在來世俱會一處得相親近俄姬亦命終其後不幾 天皇誕生有乳

母神野先朝之制每皇子生以乳母姓為之名焉故以神野為天皇諱後

以郡名同天皇諱改名新居后時夫人號橘夫人所謂天皇之前身上仙是

也橘姬之後身夫人是也 とあるを見れば伊豫國の事かとも聞へたりされども 新撰姓

氏錄 に橘朝臣の美勢が本貫の姓氏なるよしあるし且こより西の方遠からず立花村もありて

よくかなひたれり此神野村の事にもあるへし猶後人の考へをまつ 同 千二百四十五

石八斗二合 太閤檢の元高の八百五十八石七斗二升なり 高根に三百四十四石五斗四升とあるは枝郷名
日立窪谷今谷を除き本郷ばかりの元高なり

古屋まで十二里船路二十八里あり 大佛山 〇村の北にあり 神野二郎頼忠の 分脈系譜

に美濃源氏清水太郎頼直の弟神野二郎頼忠と見えたりこの人なるべし 南宮社 〇村内に

あり例祭四月八日文祿四年稻葉右京亮上田 一反 を寄附して祭祀の料とす其後金森法印も

元のとく慶長七年祭料田を寄附して今に退轉せず其證狀も今に所持す 末社 山王祠 神

明祠 白山祠 ともに境内にあり當村 圓徳寺 これを掌る 天王社 〇中むかし犬

矢田村の天王をこゝに遷しまつりしよしひ傳へ靈應ある神社なり金森法印此あたりを領しける頃庭き子ありて生育の事を當社に祈しに生質なればにや靈應も見えざりければ法印憤り神子を社の柱に縛り付拜殿より鏡炮にて打けるか七たび放されども玉はづれて一ツも中らず法印あきれてありけるに宅より使來りて妻女急病のよし告げれぬ急き歸りけるに妻女とく死してありけるよしひ傳へ今猶社の扁に鉄炮玉の痕七つ残り例祭六月十五日車樂一兩を出すよし賤の小手巻 又 濃陽志畧 にいへり 末社 居森祠 彌五郎祠 八王子祠 ともに境内にあり當村 圓徳寺 掌る 愛宕社 住吉大明神社 春日神社 白鬚神社 も村民まつれり 圓徳寺 天王山といひて眞言宗當村林正寺の末寺なり同宗 林正寺 大通寺 佛生山と號し臨濟宗關村梅龍寺の末寺なり同宗 王竜寺 靈松寺 萬年山といひて曹洞宗加治田村龍福寺の末寺なり

日立村 神野村の 枝郷 同 元高三百三十三石二斗一升 の地なり 茶釜岩 村の下河水の中になたり形ち茶釜に似たる故名とす 天王社 修驗福昌院掌る 末社 居守祠 彌五郎祠 あり 大明神社 も福昌院の持なり 白山社 當村玉龍寺知事す 大明神社 巖權現社 ともに村民まつれり 玉龍寺 寶雲山と號し臨濟宗京都妙心寺の末寺なり 福昌院 修驗伊勢國勢義寺の下なり

藤谷村 神野の枝村にて 同 元高百二十九石四斗二升 なり 白山社 林正寺掌る 白山社 村民まつれり 林正寺 山上にありて桂林山と號し眞言宗高野山

増福院の末寺也

今谷村 神野の枝村にて 元高 四十六石七斗三升 之所なり 天神社 愛宕社 ともに村内にあり 此外神野の枝村 上日立 寺洞 坊地 の三所あり

西神野村 神野の西にありて富本庄といふ もと八神村といひしを後今の名に改む 同 五百二十四石一斗五升五合 太閤檢の元高は三百 名古屋まで十一里あり 戸立岩 入神山の半腹にあり其形圓く岩の下空虚して椽の下を見る如く水流れ出て小野洞の水と一ツに

なり津保川に入る洞中神女すみて椽を借しけるが或時山伏椽を借らむとて神女の姿を見しかば其後さる事絶たりしよし 賤小手巻 濃陽志畧 等に見えたり 八社大明神社 八神といひし村名の起れる本所のみやしる也 天王社 淺間社 白山社 高野御前社 大明神社 ともに村内にあり 香林寺 花木山と號し眞言宗吉田村新長谷寺の末寺なり

常榮寺 御前山といひて曹洞宗下有知村龍泰寺の末寺なり 不動堂 香林寺掌る古像なり 古城趾 高の山にありて齋藤宗遊の住しといひ傳へたり 齋藤系圖 に宗遊といふ人見えず 船田後記 に齋藤宗珍右衛門といふ人見えたり似たる名なり 當村の農家に 岸氏

といふ者なり堂洞の城主岸勘解由が末孫也といひ傳へ古き證狀一通を所持す其文 今日廿二
於ニ加納御合戦ニ被レ討ニ捕織田新十郎一條粉骨之至不レ及ニ是非ニ候連々疎意不可レ有候恐々謹言
九月廿日 岸孫四郎殿 進覽 利政書判 見えたり孫四郎の勘解由か若き時の名利政は齋藤
道三がはじめの名乗なり

小野村 西神野の西にありて富元庄なり 同 七百五十六石一斗三升二合 太閤檢
の元高
ハ五百二十五石 名古屋まで十一里あり 白山社 八幡社 共に一林の中にあり 貴船
八斗五升なり

明神社 神明社 愛宕社 共に村内にあり 寶泉寺 出雲山と號し曹洞宗下有知村
龍泰寺の末寺なり 徳岩寺 補陀山と號し曹洞宗上有知村善應寺の末寺なり惟惠和尚の
徳の智僧なりはじめ善應寺の住持たりしが瑞龍院君歸依し給ひ名古屋にめして万松寺の住持を
給ふ和尚暫く住して固辭し此地に退隱し正徳四年三月十五日遷化其墓寺中にあり 古城墟
ハ村の北小野山にあり此山東ハ神野西ハ上有知に屬し南一面當村に亘りたれど小野山を通稱
し又大山ともいふ 城主ハ齋藤八郎左衛門 地方覺書 といふ物に齋 たり里民のつたへ
に天文二十三年落城のハも廢れたるよしいへり 齋藤系圖 に入郎左衛門と云人見へず 船田
前記に齋藤越前前司利藤石丸利光が忠功を賞して齋藤の性をゆるし諸子皆齋藤を稱しけるが利
光叛反しければ利藤怒りて其性を剝取りもとの石丸を名乗らしめしよしとるし同後記の利光等

自殺の條に石丸八郎左衛門屋の礎の際に窟れありしが顯りて自害せしよし見えたる八郎左衛
門ハこれなるべし

志津野村 小野の南にありて富元庄といふ 同 千二百四十五石五斗一升五合 太閤
元高ハ九百三十二石 名古屋まで十一里あり 椎倉山 村の南にあり甚高からずといへとも
四斗七升六合なり 四方平原なれハ諸方よりよく見ゆる山上 古城趾 ありて 永井隼人 住しよしひ傳へ
たり 齋藤系圖 に入郎左衛門と云人見へず 船田 前記に齋藤越前前司利藤石丸利光が忠功を賞して齋藤の性をゆるし諸子皆齋藤を稱しけるが利
光叛反しければ利藤怒りて其性を剝取りもとの石丸を名乗らしめしよしとるし同後記の利光等
仕ニ將軍義昭ニ元龜三年四月廿八日戰ニ死於攝州白河原 見えたり關ハ隣村にてハをも兼
て守りし成へし 又 美濃名細記 池田紀伊守信輝入道勝入仕ニ信長ニ始武義郡志津野城居レ之
亦大垣在城 見えたり 白山社 當所佐藤氏の創建にて一村の惣社と稱す末社に天王祠
神明祠あり 白山社 天王社 稻荷社 水無神社 南宮社 八幡社 天神社
ともに村うちにあり 吉祥寺 神宮山といひて臨濃宗關村梅龍寺の末寺なり 長昌寺
ハ堅固山と號し曹洞宗下有知村龍泰寺の末寺なり村民佐藤氏創業して香火の道場とす 正武
寺 經常山と號し曹洞宗下有知村龍泰寺の末寺なりはじめ農民佐藤氏一庵を建て當浦庵と名
つけしを寛保三年名古屋の老臣竹腰志摩守正武興立して今の寺號とす淺井惟寅 圖南 著ハした
る故今尾侯義忠府君行狀といふものに 府君葬ニ于濃州武儀郡志津野郷經常山下 其臣私諡

曰「義忠」志津野其采地也距藩府二十餘里府君嘗行部谷其地曰樂哉斯丘也死則我欲葬焉命
 造壽藏其地舊有萬浦庵萬浦國音與府君諱通遂更名正武寺置僧以守其墓域云云
 正武の圓覺院君附從二位大真嚴院君從三位宰相 晃禪院君從三位中納言樹友卿 章善院君從三位中納言春卿 源藏公從三位中納言宗勝卿
 の五代の君に仕へて其いさをいにしへの昭宣公にも准らへつべく忠烈すぐれたる良臣なり義
 忠君の牌子の佛殿の後にあり墓の堂の右の方の山下のすこし高き所にあり 墓牌の銘の儒宗林
 家の作にて 張藩大夫從五位下山城守義忠竹腰府君碑 府君諱正武姓源氏石河章長少子元祿中
 信濃守竹腰正辰養爲己子一時年十五冒竹腰氏母樋口氏中納言信康女元祿十四年府君諱張藩
 圓覺侯給事左右資永三年正辰致仕府君襲祿五千石六年竹腰氏大宗正映卒無嗣府君承其後
 食邑三萬石在濃州安八郡今尾郷明年三月朝謁文廟獻黃金時服及先大夫遺物十二月拜
 從五位下山城守 德廟元文四年張藩黃門侯宗勝既立謙遜恭默委任府君由是張藩安堵未嘗
 聞其職無狀也府君生於貞享二年十月廿七日卒於寶曆九年十二月十日享年七十有五葬于濃
 州經常山正武寺私諡曰義忠蓋府君躬履儒行而不信佛然未嘗毀淫屠僭力方剛武藝絕
 倫而未嘗示人最精若理交曠貴賤雷澤之遊聊寄其興存養高年不念人之過失育才成業可
 謂君子矣其年七十時黃門侯聞之爲壽公族畢集歌舞稱賀侯有詠言置酒罄歡及其卒也侯悼之
 最甚賜帛加禮罷朝七日四境之內莫不哭泣也府君有三子皆卒於是黃門侯以公子勝紀

爲竹腰氏之後拜從五位下壹岐守續其祭祀任山城守及今以備臣所狀余作銘因系其辭
 曰 赫々張藩 元老受職 社稷又安 大正其域 爲上靖位 爲下竭力 鄧國子產 魯
 邦季文 嘉言不朽 善行可開 義忠庶乎 斯人儉勤 仁政有澤 民望如雲 名遂功成 克
 得終始 修身以恭 好學不侈 濃陽諸郡 往哉山水 經常之阡 永貽後社 寶曆辛己
 春正月下泮 國子祭酒朝散大夫林信言撰 之見之たり 鍛冶洞 之むかし志津といふ鍛冶
 之にすみよし里人いひ傳へ經常等の地名も鍛冶の名によりたる如く聞へたれど志津の多藝郡
 の村名にて 志津三郎兼氏 以下の治工のみなそこの人なれば此志津野を志津鍛冶の居地
 といひひがたきにやむかしより關鍛冶とて隣村關に治工多かりしか其類どもかこにも
 すみし成るへし

大野村 志津野の東にありて富田庄といふ 同 二百六十二石九斗三升二合 太閤
 元高二百三十五石六斗九升なり 名古屋まで十一里あり 水無明神社 美濃國神名記 に武儀郡正六
 位上濃陽志保に從五位下 大野明神ある社なるへし 神明社 村うちにあり 大禪寺 神
 宮山と號し臨濟宗關村梅龍寺の末寺なりその外 阿彌陀堂 藥師堂 地藏堂 村うち
 吉田村 志津野の南西にありて富元庄なり 同 二千三百六十二石七斗六升七合

本閣檢の元高は二千六百
五十四石八斗六升なり
高三百二十四
石二升九合
名古屋まで十里あり枝村二所ありて
黒屋 高八百五十八
石九斗二合
塔洞

社 ともに村民まつれり 白山權現社 修驗等覺院これを守る 武埜天王社 修驗
寶壽院掌る末社諏訪祠居守祠齋五郎祠あり 新長谷寺 眞言宗新儀にて吉田山金剛院と號
すむかしの天台宗なりしをのち今の宗に改めしといふ後堀河天皇の御時此里に 護忍上人

といふ僧あり佛閣興立の願を發し貞應元年壬午六月十一日大和國長谷寺に詣て祈念する事七日
に及びり觀音夢中に水晶の念珠を授け給ひ且汝が志願成就すべしと告げ示し給ひければいそぎ
本國に歸りぬさて彼留守の草坊にひとりの佛工來りて長谷寺觀音の餘木をもて十一面觀音の像
をきざみけるが彫刻成就に及びける時 護忍 初瀬より歸り來れりその靈夢の御告の空しから
ざるを觀喜し此寺を 建立 して像を安置す貞應元年より嘉祿二年まで五年を経て造功畢り

勅して 新長谷寺 の號を賜ふ護忍寛喜二庚寅年三月朔日示寂のち 隆覺法印中興す
伏見天皇永仁五丁酉年宸翰の扁額 を賜ひ寺門の榮とす 正安二庚子年四月八日の火
災に諸堂伽藍一字ものこらす燒失せしを 二階堂出羽守行藤 鎌倉將軍家の臣當 隆覺 と
兄弟たるにより當寺の大旦那として重ねて 修造 を加ふ嘉元甲辰年より徳治丁未年まで四
年のうちに修補畢りあぐる延慶元戊申年八月廿二日行藤卒去 法名道雅是二階 隆覺も正中元甲子

年十月十八日寂す其後長祿元丁巳年八月また燒亡し同四庚辰年 寛正と 六月廿七日修造す其時の

施主の 村山參河守頼秀 土岐系圖に左京大夫頼盛の嫡子宮内少輔頼秀逆臣齋藤が讒言によ
秀龍謀叛の時兵を起し軍功ありし故父の樹氣を蒙り方縣郡村山の郷に整居し村山を稱す天文十一年

武義郡吉田村に住居し三河守と名のりしよしえるせり 山内式部丞利通 石井兵庫
助滿春の三人なりされとも修造なをさり遅々に及びしにや 季瓊日録に寛正六乙酉臘月五日

濃州長谷寺造營料無沙汰之事以三訴狀一申之以治部河内守可被仰付也と見へたり 本堂の
十一面觀音の像ハ大和の長谷寺觀音化顯の作當國巡禮觀音三十三番の打納めなり多門天持國天

三十三神等の運慶の作といひ傳へたり 大師堂 弘法大師の 像を安置す 阿彌陀堂 安阿彌が刻める
義朝の持念佛といひつたへたる 釋迦堂 聖臺の裏に永正十七 年寄進の文字あり 食堂 地藏堂 藥師
を安置す脇侍は觀音勢至なり 輪藏 元亨年中より永享年中まで 閑遊設録の遊吉田大

堂 三重塔 運慶の作の大日 如來を安置す 悲閣 條に有輪藏其經靈壞主僧化擅越修補之余請觀之權僧持輪來開藏其經皆寫本卷
尾題曰永享十二年七月六日其文字楷正可見也 とまるせり 鐘樓 鐘の銘に貞治二癸卯年七
月七日鑄しよし見たり

惣門 二王門 二王の像ハ 鎮守白山祠 山王祠 當時に慶長五年九月二十三日
賜ひし 東照宮御朱印の制札 あり其外 平岡因幡守 和田河内守 鈴木左馬
助 また 岡田將監 等の 證狀 あるひ文明十七年寄進の口な寺寶とする物多し

寺領五十二石太閤秀吉公の寄附 今に傳ふ 塔頭二字 寶藏院 護忍坊

境内に石徹權 といふ あら野集 美濃國關といふ所の山寺に藤の咲たるを見て 宗祇法師
現の祠あり 關こえて爰も藤しろみさか哉 といひよしまざるせる此金剛院にての事なりとぞ美の松
の附録には其色紙たんさく今に此寺にあるよしまざるせり 圓泰寺 高林山と號し臨濟宗京
都妙心寺の末寺及 磐掛庵 同宗なり 永昌寺 山王山といひて日蓮宗名古屋東寺町法
華寺の末寺なり

關

村 吉田の西にありて郡上街道の筋家並よき町なり 景行天皇美濃に行幸し給し時非常
まもりのため關を置かれし地なりといひ又むかし此所東山道の宿驛なりしが行人關隘になや
み津保川のわつらひ等あるにより公議ありて驛を宇留間にかへしともいへり 御旗木 大島
領 千六百石 小幡新田 は 關村 のうちなり 甚中山 村の南西にあり峯に

愛太子社ある故あたご山ともいふ山下に 常光寺 あり元祿享保の頃より詩人等風景を賞し
て甚中山十景の詩を賦すその十景の 愛宕清涼 山上の風 春日古林 以下の九景は山上
て當村春日 下内豊州 西北の方下 城山雲松 北の方の古 關市翠煙 關の町千餘
の社なり 信嶽殘雪 木曾の 長谷晚鐘 吉田村の新 梅嶺秋月 東の方大雲山なり山下
也 壺川長流 津保川 綠野耕歌 村の西なる 各々詩人の賦あるよし享保癸巳四月日

田葉山 名香檜竹老俗稱平次 加茂郡大針村の人なり 加書たる甚中山十景詩の序例に見えたり名古屋の松平秀雲も此山にて

詩をつくりよし 閑遊錄 にまざる 神明社 村の東の木戸にあ 春日社 村の南の方にあり中むかし鍛冶とも大和國より移り住し頃こゝに勧請して祀りよし甚中山十

景詩の序例に見えたり 愛宕社 甚中山のうへにあり 八龍社 村の西の方にあり
入幡神社 白山神社 ともに村内にあり 梅龍寺 大雲山と號し臨濟宗京都

妙心寺の末寺なり 實相院 修驗道美濃國中の袈裟頭なり天台宗 宗休寺
淨土宗 淨性寺 同 法然寺 臨濟宗 東光寺 曹洞宗 千手院 同 立藏寺 同

廣福寺 同 香積寺 黃檗宗 常樂寺 眞宗 慶圓寺 同 光明寺 同 明淳寺
同 安養寺 同 正覺寺 眞宗大谷派 照慶寺 日蓮宗 大雲寺 古城趾

村の北にありて今城山といふ 城主長井集人佐道利の子なり 永祿七年信長公に追
れ此城を退き將軍義昭に仕へ元龜三年四月廿八日攝津國白井河原にて戦死す 寶永の頃關の農

人の宅地を掘て板金を得たり形も大も今の小判の如く文もなく銘刻印もなし兩面に危き刻あり
其民京都に持行て金座の者に見せられ織田氏の時の板金のよし云けるよし 經濟錄 にまざる

せり此城主の頃より埋てありし成るへし 十六山岩跡 村の西南の山にありて森武藏守長
可の取出のあとなるよしひ傳へたり 刀劔 關鍛冶と稱て天下に其名高し 金重 道阿と

宗の弟子にて元應の頃越前の敦賀より來 兼仲 志津三郎兼氏
りて關に住す金二十枚より三十枚まで 兼仲の弟子文正の

山田郷地頭職始而拜領 見えたり 護命僧正の此あたりにて生まれし人なり 續日本後紀
に承和元年九月戊午僧正傳燈大法師位護命卒法師俗稱秦氏美濃國各務郡八年十五元興寺萬
耀大法師爲依止入吉野山而苦行焉云云學習法相大乘也月之上半入深山修虛空藏
法下半在本寺研精宗旨云云屏居右京山田寺云云天長四年特任僧正二年八十五終于元興
寺少塔院未及氣絶時同寺僧善守欲致問說自石上寺尋向此到少塔院忽聞微細音聲
劈院裏可謂淨刹所迎天人之樂也と見え 元亨釋書にも釋護命姓秦氏美州各務郡人五
歳入吉野山安座數年歸省父母父母留居郡之山田寺十五依元興寺萬耀十七得度云云と
あるせりさて此釋書に父母に歸省し父母とごめて郡の山田寺に居らしむとあるの各務郡の山
田寺といふ儀なり此山田村むかし各務郡につきたる里なればかくかきしなるべし又 續日本
後紀の文にて平城の右京の山田寺のよしなりかく兩書にのせしところ其むねたがひたれど
今何れをよしともわきまへがたし後の人よく考へ定むべし

下白金村

山田の北にあり 和名類聚抄に武藝郡白金とある此下白金上白金の兩村なり

岩村領 御旗本領とも 五百七石 東漸寺 臨濟宗 寶林寺 同宗 長泉寺

曹洞宗 福聚庵 同宗 端林寺 黄檗宗あり

上白金村

下白金の北にありて 御料 三百七十石の地なり 金福寺 臨濟宗あり

小梁村

小屋名と 上下白金の東にあり 御料 御旗本領とも 六百四十六石四

合 吉祥院 眞言宗 圓通寺 曹洞宗 觀修寺 同宗 臨川寺 黄檗宗あり

小瀨村

倉知の北にあり 尾張御領 五百十二石三斗八升七合 太閤檢の元高の
三百六十四石五

斗七 名古屋まで十里船路廿四里あり 長良川 村の北にあり郡上川の下流にて下の岐阜

山の麓に到る 香魚 長良川に産す鵜船五艘大網小網船五艘ありてこれを捕り岐阜に送り

て賣物とす小瀨の鵜飼と稱して長良村に劣らす其形殊に大きくして其大概よき魚七八寸重百錢

目かしら小背丸して味殊にすくれたれ俗に小瀨丸と稱す其うち極めて大なるは長一尺一寸

重百八九十錢目あるもの稀に産す天下年魚の第一とすべし 絲 絹 茶 ともに産物とす

楮 の皮を四方にうりてこゝにて紙にすく事なし 八幡社 村内にあり末社に春日若宮天

王の三祠あり 白山社 神明社 八王子社 愛宕社 熊野權現社 ともに村民ま

つれり 山州名跡志に京都今熊野神社領の後白河天皇の院宣に院廳下云云當社領諸國庄園貳

十捌箇所云云美濃國池田庄小瀨庄云云養和元年十二月八日とあるよしあるせりも今熊野の社

領なりし故熊野の社を祀りしなるべし 永昌寺 松尾山と號し曹洞宗下有知村龍泰寺の末

寺也 無量寺 福壽山といひて曹洞宗下有知村龍泰寺の末寺なり 三光院 眞言山と

號し修驗道名古屋清壽院の同行なり 藥師堂 觀音堂 ともに村内にあり 十三塚

村の南にありて其數多く何人の墓とも其よしをまらす村民掘毀ちて畑とし今のわつか残れり
清藏寺墟 濃陽志界 に在り村東其寺廢絶已久不可復知又有聖人洞其地有呼爲
二門二門三門者恐是古有伽藍而廢絶而已と見えたり

志摩村 小瀬の北にありて富元庄有智郷といふ 和名類聚抄 に賀茂郡志麻とあるのこいな

るべし此地其郡へ遠からず 同 二百三十一石五斗一升 太閤檢の元高の二百 名古

屋まで十里あり 大明神社 末社に春日祠 南宮社 明神社 荒神社 神明社

ともに村うちにあり 延壽寺 仙島山と號し曹洞宗下有知村龍泰寺の末寺なり 竹腰氏

宅 村の西南の方郡上川の涸りにあり前の川原廣く閑寂の地なり名古屋の老臣今尾侯の別荘

當村の其領知なり

下有知村 志摩の東北にあり 和名類聚抄 に武藝郡有知とあるの上有知下有知なり 神風抄

に美濃國下有智御尉八丈絹二十疋紙五十帖云云と見えたり有知の上下にわかれしふるき

を知べし また内庄ともかきしにや 日吉神社 土地神社 星宮神社 富士神

社 大宮神社 神明神社 唐栗神社 白山神社 村民祭れり 吾妻鏡 に建久三

年六月廿日庚申美濃國御家人等可從守護相摸守惟義下知之由被仰下云云是爲被鎮洛中

群盜等也前右大將家政所下美濃國家人等可早從相摸守惟義催促事右當國內庄之地頭中於存

家人儀輩者從惟義之催可致勤節也就中近日洛中強賊之犯有共聞爲禁遏彼黨類各

企上洛可勤仕大番役而其中者不可家人之由在在早可申子細但於公領者不可加催

兼又重隆佐渡前司郎從等催召可令勤其役於隱居輩者可注進交名之狀所仰如件 建久

三年六月廿日云云と見たり惟義美濃守護にて大内右衛門尉と號す新羅三郎源義光の三男平

賀冠者の裔孫なり 土岐系圖の土岐明知十郎頼篤の孫式部少輔賴秋幼名長壽丸の條にのせたる

證狀にも美濃國妻木郷武儀庄内野所郷事當知行旨土岐明知長壽丸領事不可有相違之狀如件

應永三十四年六月廿五日 義持判 さまるせり 御料 御旗本領 龍泰寺領とも 二

千二百四十一石九斗三升二合 龍泰寺 祥雲山と號す曹洞宗東美濃の惣祿と稱す

寺領御朱印三十石 近郷に末寺多し 同宗 寶積院 同宗 洞泉寺 同宗 立霜庵

同宗 彌勒庵 神光寺 眞言宗にて今宮山と號す本尊の十一面觀音の立像傳教大師の作

當國三十三所の廿四番なり境内に藥師堂稻荷祠辨才天祠等あり二王門もありて上の山に奥院と

呼ぶ社あり 糠塚山 下有智にあり古冢の跡なり近年あはけて古太刀古鏡古鈴等様の物出し

富士塚見取新田 御料 畑四十一町二段三畝五歩 の地なり

生櫛村 元和高帳に伊串村とかき郡村記 下有知の西にあり 和名類聚抄 に武藝郡生櫛と

見えてふるき里なり 御料 尾張御領とるに 五百六十六石九斗六升三合 尾張御領ばかりの百石六斗八升二合 御料 にてい 生櫛村 といひ尾張御領にてい 上生櫛 其元高の百十三石九升三合なり

といふ名古屋まで十一里舟路十九里あり 白鬚神社 住吉神社 春日神社 曹洞宗

昌福院 あり 古河 の村の東にあり今の水涸れて其形のみ残り

松森村 の下有知の北にありて富元庄有智郷といふ 尾張御領 七百三十石九斗六升

二合 太閤檢の元高の四百 名古屋まで十一里あり 金倉山 の村の東にあり山上に權現

の社あり山の下牛洞といふ所あり中むかし石を鑿ちて金を採りし故山の名とす今の事なし

又山中に大岩ありて一面すこし鑿徹て日に映し金光のごとじよりて金倉山といふともいへり

土産 は 紙 雑帛を 糸 綿 なり 金倉權現社 の養老年中須原權現と同時の創建

といひ傳へたり山の麓に御島といふ地ありてむかし神供の米を作りし田のよしいひ今に乞食村

うちに入る事をいましむ御食物の穢れん事を懼るといへり 大明神社 末社に神明熊野 神

明社 白山社 大明神社 八幡社 荒神社 鎮守社 稻荷社 山神社 天神の三祠あり

區二 松鞍神社 ともに村内にあり 長徳院 の松源山といひて曹洞宗下有知村龍泰寺の末

寺なり 藥師堂 の昔し東氷山松教寺といふ一院ありしが廢絶して今此堂のみ残りり村人

いひ傳へたり 善應寺廢跡 の村中にあり天和三年上有知村に移したるよし村民いへり

寶泉庵址 の寺洞といふ地にあり廢寺となりし年月忘れず寺洞といふ名の興りし跡也とぞ

上有知村 の松森の北にありて富元庄内郷といふ内庄と古書にかきたるを下有知の條にしるす合

せ見るべしもと城下なりし故二番町二番町などいひて町並よく居民殷富なり 同 千百五

十六石三斗八升七合 太閤檢の元高の六百 枝村 二所ありて 口野 樋洞 とい

ふ名古屋まで十二里船路廿五里あり 鉦尾山 の直高十五町程根廻り二里八町余の山なり

藍見川 郡上川なり圖南の釜戸浴湯日記に上有知より岐阜まで舟にて下りなむといふこゝよ

りきふまでの五里なりあやうき瀬とも多し此川の郡上より來るこゝにていあひ見川といふ宿よ

り送り來りし人に わかることもやかてや人にあひ見川岸根の波の立歸りなば 打物 鍛鍊等

の農器をつくる鍛冶多しむかしより隣村關鍛冶天下に名高く稱美せらる中古大半わかれて當村

に移り刀劍をうつ其家多く農具庖丁の類をつくりて今の太刀劍をうつ事すくなし 常陸守廣

辰 上野守國常 その外 兼綱 兼庸 兼信 兼吉 兼得 等みな關の 兼常

の裔孫也 漬松茸 の鉦尾山小倉山等に産するものをとりて製す 桑葉 此邊の村々より

持來りて上有知にて諸村のこかひする者にうる是を桑市といふ淺井圖南の釜戸浴湯日記に明行

は廿四日也 安永二かど近く人馬の行かふ聲とてたが旅立にかと思ふ起出て人にこへの是なん桑

市なりといふ 孤枕夢醒驚短宵門前雜沓若鳴鯛初知蠶室三眠起、騎賊步擔桑市驚、 上有

